

死を選んで・・・

～ 苦しかった訳じゃ無いよね 悲しかった訳じゃ無いよね
ただ自分らしく居たかっただけだよ
けれど時は無情にも過ぎていく 苦しみも悲しみも置き去りにし
て
僕等は一体何を残したのだろう
この現実という淋しい世界に・・・・・・～

作者 齊藤 和彦

～ 僕等はただ辿り着きたかった

僕等はただ自分らしくいたかった

きっと僕らは永遠と言う時の中を彷徨っているのだろう

そして永遠に僕等は探し続けるだろう 風は冷たく吹き付ける
夢はその中ではたった一つの灯火だった

愛は僕等を救ってくれるのだろうか？ 愛は一体何を与えてくれたのだろうか？

僕は君と居る夢を見た 限りなく広がる世界 そして永遠に続く
想い

きっと僕等はすでに気付いていたはずさ

そこには確かなモノなど無いと言う事に・・・～

僕はまるで深い深い海の底から這い上がる様に目を覚ました。それは決して目覚め良い朝の光では無かったけれど、最悪というものでも無かった。窓から差し込む光はまるで天国に僕を導く為の階段の様にも見えた。僕はその中途覚醒された世界の中で周りを見渡した。

ベットサイドに置かれた幾つかの精密機器、そして真っ白い空間。どうやらここは僕の部屋のベットの上ではないことはすぐに分かった。けれど僕は別にあわてたりする事はなく、ここに居るのが当り前の様に、もしくはここにたどり着く事が遠い昔から分かっていたかの様な気すらしていた。そして目の前には父親と呼ばれる人が疲れきっている様にも悲しそうにも見える顔をして立っていた。そして父は僕が目目を覚ましたことに気が付くと慌てて言った。

「一体どうしたんだ？ 一体何があったんだ？ このところ急な事が立て続けに起こって、父さん何が何だか訳が分からなかったが、お前が瀕死な重傷でここに運ばれたと聞いて、どうしたらいいかって、父さん母さんまで死んでその上お前まで死んだら・・・」と言いながら涙が目にとまっているのが見えた。僕はそんな父の姿を見ながらまた失敗してしまったのかと実感した。そしてここが一体どこなのか分かったのはそのすぐ後の事だった。

白衣を着た見るからに人の良さそうな眼鏡を掛けた中年の少し小太りの男が、僕に体の調子はどうだこうだと聞いてきた。だから僕は必然的にここが病院だということに気が付いた。そして僕はその優しそうな中年の人に「特にどこも悪くありません。ただ今は少し一人で居たいです」とだけ答た。するとその優しそうな人は「わかった、すこし休んだほうがいい」と言って、父にもう大丈夫だから向こうで少し休んで下さいと言いながら父を連れて病室から出てい

った。そして一人残された僕はもう一度周りを良く見渡してみた。

そこは真っ白な空間だけが何処までも何処までも続いていた。良く人は真っ白は清潔だから好きと言う人がいるけれど、この空間もまさにその清潔そのものに思えた。けれど僕はその真っ白な空間があまり好きにはなれそうも無かった。何故ならこの真っ白な空間の中で色と呼べるものは僕自身だけだったからだ。それはまるで僕がこの純粋で美しい空間を汚(けが)している様な、それは孤独でとても淋しいものだった。

僕はきっと汚(けが)れてしまったのだろう。こんな空間ではそれがリアルに感じられてしまう。僕はそんな気持ちを打ち消したい一心で昨日の夜の事を思い出す事にしてみた。確か僕は昨日の夜二度目の自殺を図ったのだった。でもその理由(わけ)はまだ思い出したくない気持ちだった。何故ならそれはまだ癒されない感情であり、今その事を思い出せば、またそんなやり場の無い気持ちにかられて、僕はこの点滴を付けたままこの病院の窓から飛び降りてしまいそうに成るかもしれない。そしてこの真っ白な空間を僕の汚れた血で真っ赤に染めてしまうかもしれない。勿論僕はそんな事はしたくはなかった。だから僕は二度目の自殺の事では無く、一度目の自殺の時の事を思い出すことにしてみた。

それは思い出すと言うよりも僕自身にとってきっといつまでも忘れることは出来ないくらい今でもハッキリ覚えている出来事だった。だから思い出すと言う事はいとも簡単に出来た。左手に巻かれた痛々しい傷、けれど痛みは無かった。むしろ痛みを感じるのは、心の傷の方だった。そして体の傷と心の傷を重ね合わせると、そこには確かな愛があった。

一度目の自殺を図ったのは二年前のまだ寒さの残る二月のことだった。その時は恋人(好きな人)と心中という形で自殺をしたのだけれど、今僕がここに居る事でもわかるように、それは未遂で終わってしまった。けれどあの時僕は本当に彼女を愛していたんだ。だからこそ彼女が「こんな私と一緒に死んでくれるの?」と言った時、僕は全てを受け止めて頷いたんだ。何もかもを受け入れる様に・・・。

そうあの頃僕はまだ中学三年生だった。そして僕は仲間達とロックバンドを組んでいた。その頃よく練習場として使っていたスタジオ[MELODY]にその彼女は居た。

彼女の名は遠藤紀子と言う名前で、六歳年上の本当に美しい女性

だった。髪の毛は長く、スラッと伸びた手足はそんな彼女を一層引き立たせていた。そしてそんな非の打ち所のない彼女は僕らの様な生意気な中学生にも唯一優しく接してくれていた大人の女性だった。本当か嘘かあの頃の僕には分からなかったけれど、僕らの歌う歌が一番好きよって言ってくれた。そしてそんな六歳年上の彼女の事を僕はみんなで愛着の意味を込めて、紀子さんと呼んでいた。言わば彼女は僕等にとって大人の魅力と優しさを持っていた女性で、憧れの人だった。それはみんながそうであった様に明日の希望すら不安な僕にとっても同じ事だった。その時の僕には理由(わけ)はどうであれ、そんな彼女が僕の事を好きだと言ってくれるなんて想像なんて出来たのだろうか？ だって彼女はいつもワンレン・ポディコンと言う出で立ちで、僕等が通うボロボロの小さなスタジオにはあまりも似合わない格好をしていたし、それに比べて僕らとは言うところボロボロのジーンズにTシャツという廃れたスタジオなら何処にでも居そうな格好だったから、だから当然そんな彼女と僕等が話をしている光景は誰が見ても不似合いなものだったのだろう。それに僕は決して格好良いと言う訳でも無かったはずだった。そりゃ確かにバンドの中ではボーカルをやっていた事もあり、僕にも何人かのファンと言ってくれる女の子もいたけれど、バンドの中ではギターを弾いていた公彦[ただひこ]の方が断然もてていたし、それに比べたら僕のファンなんてたかが知れていた。けれどそれなのに彼女はあの夜、公彦では無くて、イヤ公彦どころか世界中の男の中で僕を選んだんだ。こんな取り柄の無い僕だけを……。

そうあの夜はとても冷たい雨の多い夜だった。

僕はいつもの様に自分の部屋でギターを弾きながら曲を作っていた。内容は叶わぬ恋と知っていながらも、それでも僕は君を求めたと言う内容だった。

そのフレーズはメジャーコードの連続からマイナーコードに変わって行くと言う、ちょっと寂しい雰囲気曲だった。正直に言うと僕の示している君と言うのは実は紀子さんの事だった。そしてちょうどその曲の三分の二ぐらいを書き上げた頃、時間でいうと十一時を廻るか廻らないかの時間だったのだろうか。いきなり僕の部屋の電話が鳴った。

普段この時間帯は僕の友達以外は殆ど掛かって来なかったから、僕は友達だと思い電話に出た。

「もしもし飯田ですけど」

「……」

「もしもし」

「・・・」

その電話からは全く返事が無かった。ただ聞こえてくるのは、遠くの方から聞こえる淋しそうな雨の音だけだった。

僕は一瞬イタズラ電話だと思い電話を切ろうと思った。そして僕が受話器を降ろそうとしたその瞬間、微かだったけれど確かに声が聞こえた。それは今にも壊れてしまいそうな小さな声だった。

「遠藤ですけど」

僕は驚いた。何故なら遠藤と言うのは紀子さんの苗字だったからだ。それに声も彼女の声だった。

僕は慌てて落としそうになった受話器をとり「俺です紀子さん俺ですよ」と言った。正直に言うと僕はこの時かなり動揺していたので、この時の会話は余り覚えていない。だけれども、その中で今でもハッキリ覚えている事が一つある。それはちょうど彼女が[MELODY]の前にある公衆電話から電話をしている事が分かったすぐ後の事だった。

彼女がいきなり「飯田君の事が好きだから、今どうしても逢いたいの・・・」

突然の彼女の切ない告白は、僕にとって寂しそうにもまたSOSにも聞こえた。

僕はその時彼女に何かあったんじゃないかと思い「今すぐに行きます」といって受話器を切った。だけれども僕の頭の中はかなり混乱していて、しばらく動く事も、イヤ息をする事すら出来なかった。しかしそんな僕を一段と強くなってきた雨音が現実引き戻してくれた。

僕はとにかく[MELODY]に向かおうと思った時には、すでに強く降りつける暗い雨の中を、傘もささずにたった一つ見える光りに向かって走り出していた。

それから僕は三十分位、走って[MELODY]に辿り着いた。彼女は雨の中でやはり傘もささずに一人立っていた。それはまるで雨の中のゴミ捨て場で、もう来やしない飼い主をただただ信じて待っている、捨てられた子猫の様にも見えた。けれど一つだけ違うところは、彼女の場合僕と言う飼い主が助けに来ると言うところだろう。僕はそんな事を考えながら彼女に近づいていった。

僕が彼女の前までくると彼女は、僕の方に顔を上げた。彼女の姿は雨に打たれてびしょびしょだった。ストレートに伸びた髪は一段とストレートになって少し膨らんだ胸の辺りまで伸びていた。そし

て雨とは違うとハッキリわかる涙が、雨に混じっていくのが見えた。

彼女は僕が来たことに気付くと一瞬ホッとした様な笑顔になった。そして彼女は「ごめんね」といいながら僕に抱きついてきた。正確に言うと抱きついたというよりも、僕に必死にしがみついている様に思えた。僕も捨てられた子猫を抱き上げる様に、彼女の事をしっかりと抱きしめた。

彼女の体は僕が思っていたよりも華奢（きゃしゃ）な体つきをしていて、強く抱き締めると今にも壊れてしまいそうな程弱々しいものだった。それから僕らはどれくらいそうしていただろうか、気が付いた時には雨も激しさを忘れて寂しさを連想させるものになっていった。

彼女も先程に比べると少し落ち着いた様に見えたので、僕は彼女にそっと話しかけてみた。

「一体どうしたのですか？」と僕は聞いてみたが、彼女は「ごめんね」の一言だけだった。だけど僕は正直言って理由なんてどうでも良かった。どうでも良かったなんて言うと無責任や冷たいと思われるかもしれないけれど、本当にどうでもよかったのだ。何故なら僕達はお互い色々な現実を背負って生きているんだ。今僕だって人には言えないけれど、潰れてしまいそうなくらい重くて辛い現実を背負っていた。だけどその事を彼女に伝えようとはしない。正確には彼女やみんなに伝えたり相談したりという術（すべ）を知らないんだ。だけどそれは決してみんなを信じていないという事や、彼女を愛していないという事とは違った。彼女の場合もこうなのかは分からない、けれどきっと頭のいい彼女の事だから僕の様ではないだろう。だけど今現在言えないという事は、きっと僕以上に辛い事だったのだろう。そしてそんな彼女に掛ける気の利いた優しい言葉を僕は残念な事に持っていなかった。けれどその代わりに彼女を信じる心を僕は持っていた。僕は彼女に「少し歩こうか」と言うと、彼女はそれに対して小さく頷いた。

小雨がぱらつく夜の街に僕等はお互い迷子になってしまわぬ様に、そして心が碎けて無くなってしまわぬ様にと、手と手をしっかりと握り合いながら歩き出した。

夜の街は土曜の夜という事もあって、夜中なのに賑（にぎ）やかだった。街行く人は終電に間に合おうと、千鳥足に最後の力を込めて早歩きで僕等の横をアルコールの匂いを漂わして通り過ぎていった。右側の雑居ビルの階段にはもう終電を諦めたのだろうか、女の三人組がくしゃくしゃになってしまったスーツに身をくるみ、雨が

当らない様に座り込んでいた。そんな中を僕等は宛も無く彷徨っていた。

僕はとにかく彼女の氷のように冷たくなった体を暖める為に、自動販売機で暖かい缶コーヒーを買って手渡した。そして雨から身を守る為に歩道橋の下でそれを飲んだ。その間僕等は殆ど会話は無かったが、僕はそれでも良かった。僕はただ自分を必要としてくれる人が居るという事、そしてそれが紀子さんだという事だけで凄く嬉しかったし、幸せな気分にも成れた。そして言葉を忘れかけていた僕に、言葉を思い出させてくれたのがやっぱり紀子さんだった。彼女は一息付いて僕に言った。

「急に電話であんな事言ってごめんね」

「あんな事ってなんですか？」

「私が飯田君の事好きって事。でも私なんかじゃ迷惑だよ、飯田君は私何かよりもっと良い子が好きなものね。本当にごめんね」

紀さんは切なそうに言った。

「そんな事無いですよ。俺だって」

「えっ」

「俺だって紀さんの事ずっと好きでした。だけど紀さんは綺麗で優しかったから俺なんかじゃってずっと思っていたんです。けどさっき電話で好きって言われた時俺嬉しくて、でも紀さんに会ったら紀さん凄く淋しそだったから、俺どうしていいか分からなくて」

僕の間からは涙が溢れ出して来た。それは今まで僕が必死に作ってきたダムを後方も無く壊してしまったかの様な。そして涙は僕の心の中の深い深い溝に流れ落ちていった。気が付くと彼女も涙を流していた。そして彼女は僕に「ごめんね私もうそんなこと言わないから、飯田君の事好きだから、だからそんなに泣かないで」と言いながら僕の事を優しく、そして強く抱き締めてくれた。そして今度は僕が彼女に必死にしがみついた。そして僕等はお互いをかばい合うように優しく口付けを交わした。

僕にとってこのキスが忘れもしないファーストキスだった。彼女の唇はとても柔らかかった。そして表面は雨と寒さのせいで冷たかったが、僕等が唇を重ねている間にそれはだんだん暖かくなってきた。よく人はファーストキスの味はレモン味だとか言うけれど、僕のファーストキスの味は涙の味だった。僕等はどれくらい口付けを交わしていただろうか。気が付いた時にはもう雨も上がり、街行く人も殆いなくなっていた。

そして初めに口を開いたのはやっぱり彼女の方だった。

「今一体何時何だろうね。飯田君の家の人心配してるんじゃないか、あっごめんなさい私が呼び出しといてそんな事言うなんて私ったら」

僕は微笑んだ。彼女は時々子供っぽいところがあった。でも僕はその子供っぽい彼女がとても好きだった。そして僕は彼女に言った。「大丈夫ですよ。うちの場合母が死んでから親父は仕事やなんやがらで、殆ど家の事は俺等にまかせっきりでろくに家にも帰ってこないし、それに兄貴は兄貴でそれをいい事に友達を家に呼んでやりたい放題しているから俺一人居なくなっても誰も気付かないですよ」僕がそう言うと彼女はそんな僕に同情したのだろうか、また僕の為に泣いてくれた。僕はそんな彼女を見て幸せと安らぎを生まれて初めて感じた。

本当にそうだったんだ。僕は正直言って家の中にも学校の中にも安らげる場所が無かった。いつもいつもピリピリ、ピリピリしていてつっぱって強がっていなければ、今にも心の弦がピンと音をたてて切れてしまいそうぐらいギリギリの場所を歩いていたんだ。確かに友達も居た。だけど僕が本音を言い出すとみんな僕の言っている事が理解出来なくなってしまうんだ。そして僕もみんなの言葉が分からなくなってしまうんだ。いつも気が付いた時には僕はひとりぼっちになっていた。そんな時に紀子さんという優しく僕のことを暖かく包んでくれそうな人が現れたんだ。紀子さんは僕にとって憧れの女性だった。その彼女が今こうして僕の目の前に居て、そして僕の為に涙を流してくれていた。こんな僕の為に。

彼女は僕の想像を遥かに越えた安らげる場所を僕に与えてくれた。そして僕も彼女に想像もしていなかった安らげる場所を与えてあげることが出来た。出会った時から何となく気付いていたけれど、きっと彼女は私生活で何かあったんだと思った。そして彼女も僕と同じできっと今まで寂しい思いをして生きてきたと言う事が感じられた。けれど現実の風はこんな僕等の周りをやけに強く、そしてやけに冷たく吹き抜けていく。だから僕等は世間の冷たい風に負けないように強く抱き合った。それから僕等はまた口付けを交わした。

風が過ぎ去った後、彼女は「これからどうしようか？」と僕に聞いてきた。

僕は正直言って温もりの欠片さえ無い家には帰りたとは思わなかった。それより紀子さんと居るほうが断然僕を安心させてくれたので「紀子さんさえよければ僕は一緒に居たい」と言った。それに

対して彼女も同意見だった。けれど雨に濡れた服は確実に体温を奪い始めている。

「だけこの濡れた服のまま居ると風邪をひいてしまうから、何処か暖かい場所に行かないと」

僕は言う前から気が付いた。これじゃまるでホテルでも行こうって言っているみたいじゃないかって。僕は思わず口ごもってしまった。そんな僕を見て彼女は「そうね確かにこのまま濡れた服を着ていたら風邪をひいちゃうわね、私の大切な人に風邪をひかせたく無いからとにかくどこか暖まる場所に行きましょう」って言ってくれた。

その時僕はやはり紀子さんは思っていた通りの優しい人だと思った。そして僕等は先ほどとは違って見える同じ街をまた歩き始めた。

正直言ってこんなずぶぬれの野良猫を暖かく迎えてくれる人や、場所なんかこの街には存在していなかった。唯一入れそうなファミリーレストランも二時には看板らしく、入口にはCLOSEの札が斜めに掛かっていた。中ではラストオーダーに間に合った人達が美味しそうに、そして楽しそうに暖かそうなスープをその良く笑う大きな口に流し込んでいた。彼女は「しょうがないかこんな時間にこんな格好じゃねえ」とつぶやく様に言った。

まるで僕たちは現実と言う時の流れにうまく乗る事が出来ずに、この空間を彷徨っている様に思えた。

だけどいつまでもこんな所に彷徨って居られる訳も無く、また歩き出した。明るい場所、暗い場所、にぎやかな場所、静かな場所、僕等は幾つかの場所を通り抜けた。そして気が付いた時には、暗闇の中でたったひとつの街灯に群がる虫たちの様に、遠くに見えるネオン街に向かっていった。きっと長年この街で育ってきた僕達は、そこがホテル街だと言うことに気が付いていたのだろう。だけど今の僕達は本当に純粹にそこを目指していたのかもしれない。もうこの街、いやこの世界の中で僕たちが居られる場所はそこしかなかったのかもしれない。僕達は何かに誘われる様に、そのきらびやかなネオン街の光の中に溶けて行った。

ホテル街は僕が想像していたより明るく見えた。きっと生まれて初めて来たという事と、さっきから暗闇を歩き続けていたせいだろうか、だからそのネオン街がやけに大げさ過ぎる程眩しく感じたのだろう。そして僕等はその大げさ過ぎる世界で空室という文字を捜し続けた。いくつかの満室と書いてあるホテルを横目に見ながらど

のくらい歩いただろうか、気が付くと僕等は一軒の空室と光っている看板が立っているお城の様なホテルの前に立っていた。僕は正直に言って初めてだった。女の人とこんな場所に来るのは。だからこんな時一体どんな言葉を掛ければいいのか、それとも何も言わずに入った方がいいのか全く分からなかった。ただ何故かとてもやましい気持ちと、恥ずかしい気持ちが、僕をどんどん深くて遠い場所へと引きずり込んで行きそうになった。そんな僕の事を理解してくれたのだろうか、彼女は僕の手を導いてくれた。彼女のその手は震えていた様に感じたけれど、僕の手はそれ以上に震えていたので正確には分からなかった。そして僕等は何も言わずにその中に入った。

ロビーは外のきらびやかさとは違って、地味な造りに成っていた。人工的に作られた石垣にはやはり人工的な造花が置かれていた。右側の壁にはそれぞれの部屋の雰囲気映し出したパネルが置かれていて、好みの部屋のボタンを押す仕組みに成っていた。けれど僕等の来た時は十三個あるパネルのうち十二個は使われていたらしく、必然的に一つしか選べなかった。彼女はその一つのローズと言う部屋のボタンを押した。

それからフロントでなにやら言っていたけれど、僕には自分の今にも破裂しそうな心臓の音が頭の中で響いていたので、何を言っているのか分からなかった。それから僕等はフロントで鍵を受け取るとそのまま今にも壊れそうな音のするエレベーターで三階に行き部屋に向かった。部屋は暗い廊下の突き当たりに位置する場所だった。

部屋のドアを開けるとそこにはやはり別世界が広がっていた。壁一面ピンク色のバラの模様がその違和感を引きだたせている。それは普通に考えても趣味が良いとは言えないものだった。中央に置かれた大きなベッドのカバーの柄もバラをモチーフにしたものらしかったが、僕にはよく分からなかった。入り口の右手には洗面台とトイレのドアがあり、その先にはバスルームがあった。一応部屋の中に窓はあったものの、雨戸が閉まっていて外の様子は全く分からなかったが、雨戸を開けてまで外を見る気も起こらなかった。とにかく僕は今にも割れそうな心臓の音が耳の中で鳴り響いていたので、落ち着くことは出来なかった。僕等はとりあえずベッドに腰掛けて一息付いた。そして僕の心臓の音が聞こえなくなったのは部屋に入ってから間もなく経って、彼女のシャワー先に浴びてと僕に投げられた言葉がきっかけだった。

僕は我に返って「俺より紀子さんこそ先に入って下さい」と言った。けれど彼女は「だって飯田君の手凄く冷たくて震えていたよ」と言い返してきた。

確かに僕はパンツまでびしょびしょで身体の芯まで冷えきっていた。だけどそれは紀子さんと同じ事だ、だから僕は彼女に先に入って欲しかった。けれど彼女の目はただ僕の事だけを心配している目だった。こんな事を言うとなにを自惚（うぬぼれ）ているんだよと言われてしまうかもしれないけれど、確かに僕にはそう見えた。実際には見えたと言うより本当にそうだった。僕には不思議な力があって、人の目を見ただけでその人の事が手に取るように分かるんだ、今までその力のおかげで嫌な思いばかりしてきたけれど、今日の前に居る彼女に対しては違っていた。本当に僕の事を言葉だけじゃなくて心から心配してくれていた。それにここまで来る間だってきっと彼女の中にやましい気持ちなんかこれぼっちも無かったはずだ。ただ僕の事だけを心配してくれていただけなんだ。だからホテルに入る時だって、普通だったら女の人が男の手を引っ張って入ることなんて出来やしないだろう。だけど彼女は僕の為にそんな恥ずかしい事を自らしてくれたんだ、こんな僕の為に。それなのに僕はホテルに入る時にやましい気持ちを感じてしまったんだ。こんなに純粋に僕の事を愛してくれていたのに。僕は自分の事が凄く許せなくなった。そんな僕の葛藤の中に彼女の心配そうな目が覗き込んできた。「どうしたの？ 顔色悪いよ私何かいけないこと言った？」

僕は滲んでぼやけた世界の彼女を強く抱き締めて、首を横に振った。その時涙が飛び散ったのが分かった。そして彼女に「ううん何でも無いです、ちょっと考え事してただけです」と言った。

彼女は「飯田君の身体凄く冷たいじゃないの、だから早くシャワーあびなきゃダメよ」と言った。けれどそんな事を口にした彼女の身体の方もやはり冷たかった。僕は純粋に彼女の事を思い、彼女と一緒に入りたいと言った。今度はさっきまでのやましさをなんて何一つなく、代わりに純粋な愛だけがそこにはあった。

彼女は僕の純粋な愛に応える様に頷いてくれた。それから僕たちはお風呂場に向かって歩き出した。そして僕の顔に笑顔がほんの少し戻ってきた。

~ きっと僕等はずっと淋しかったんだよね。

きっと僕等は誰にも理解されなかったんだよね。

きっと僕等はずっとひとりぼっちだったんだよね。

けれど僕等は出会えたんだ。

悲しみの向こうには必ず幸せがあるという言葉だけを

胸に信じたままで・・・~

脱衣所に着くと僕はまずお風呂の中を見た。浴槽はかなり大きくて、二人で入るには充分過ぎる程の大きさがあった。そして僕は浴槽にお湯を入れた。お湯はかなりの勢で浴槽に注がれていった。そして僕はそれを見てこれなら相当早くいっぱいになるなと思った。それから僕は脱衣所に戻った。脱衣所に戻ると彼女が何やらタオルをさがしているのだろうか、僕に背を向けて洗面台の戸棚の中を覗き込んでいた。僕は正直言ってとうとうこの瞬間が来たのかと実感し始めていた。

初めての見る女性の裸、そしてその後の初めての体験。不安は何一つ無い代わりに、みんなが言う程の興奮も無かった。それはどちらかと言うと純粹に彼女の温もりに触れたいだけで、その後の快感を望んでいないと言うのが一番合っていた。今僕に必要なモノは彼女の温もりであって、彼女に必要なモノも僕の温もりだった。そしてそんな純粹に温もりだけを求めた二人が、街外れの小さなラブホテルの一室に居た。

それは本当に短い時間だった。気が付くとバスタブのお湯は溢れ始めていた。僕は今にも破裂しそうな胸の鼓動を押さえるので精一杯だった。それは彼女も同じ気持ちだったのだろう。例え彼女に異性経験があったとしても、今の彼女にとっては寒さに震える子猫の様にその瞬間に震えていた。そして僕等は溢れるバスタブのお湯をほんの少しの間、黙って見つめていた。湯気で曇り始めるバスルーム、熱気こそ感じるものの、そこには僕の知らない世界が広がっていた。僕は塗れたシャツの第一ボタンを外し始める。そしてそれに連鎖反応する様に彼女もやはり第一ボタンを外し始めた。僕等が服を脱ぐ間、僕等の中では会話は一つも交わされない。それはただ沈黙の中であり、それはただ言葉の要らない世界であった。そして僕等はその全ての着衣を冷たい体から取り外した。もう何も必要は無い、もう何も僕等を止めるモノは無い、それは生まれたままの姿の僕等だけに共感出来た気持ちだった。始めて見た異性の裸、それは神秘的で僕にはとてつもないモノに感じられた。彼女は細身な体つきの割には胸は大きく、そして締まったウエスト、それから少し小ぶりお尻、その光景は僕の体の中の全ての欲望を奮い立たせた。僕は冷え切った彼女の体を優しく抱きしめ、そして浴槽に足を踏み入れた。浴槽のお湯は熱すぎず、温すぎずと言う丁度良い湯加減だった。僕等は肌と肌を触れ合ったままその浴槽に体を沈めた。

お湯は冷え切った体の芯まで僕等を優しく暖めてくれた。そして僕等はその暖かさの中でまた唇を重ねた。ほんの少しの僕の笑顔、けれど何故か彼女の顔には笑顔が無く、どこことなく悲しい目をして

いた。けれど僕はその理由を聞かなかった。それは聞く必要性が無かったと言うよりも、何となく言葉を交わさなくても僕には彼女の気持ちが理解出来たからだった。彼女は今とっても傷付いていた。もしかすればこの場所に僕じゃなくても本当は良かったのかもしれない。けれど僕は彼女の為に何かしてあげたかった。本当にそれは何でも良かった。彼女の心の傷がほんの少しでも癒せるのなら、僕は裸踊りをして良かった。けれど今の彼女にとっての一番の事は無言の優しさだった。僕は彼女の体を抱きしめた。体にじかに感じる彼女の柔らかい胸、そして柔らかいお尻、僕のペニスはすでに勃起していた。だから必然的に彼女の下腹部辺りにはその感触が伝わっているはずだった。けれど彼女は何も言わずに僕にその小さな体を委ねていた。そして僕もそんな彼女を受け入れていた。しばらくの沈黙は僕等の気持ちを代弁してくれている様だった。そして僕等は暖まった体のままベットに潜り込む、そしてそれから僕の世界の始まりだった。

僕の唇は彼女の口、そして首元、それから乳房と言う具合に彼女の下に向かっていった。ピンク色に染まった彼女の乳首は僕を記憶の奥に引きずり込む。そして彼女は僕のいきり立ったペニスを手で優しく握りしめた。僕の興奮は僕の記憶を壊す。僕の興奮は僕の理性を壊す。そして僕はその欲望に全てを奪われる。高ぶる鼓動、震える体、そして純粋な心。彼女も少し震えている様だったが、その記憶は定かではない。ただハッキリ言える事は、その何倍も僕の方が震えていた事だった。そして彼女は優しく僕を導く、それは遠い遠い記憶の奥なのかもしれない。もしかするともっと身近な場所だったのかもしれない。けれどその時の僕にはそれが一体どの場所に在るのかは分からなかった。ただ分かる事は、僕は彼女の中に在り、彼女もまた僕の中に存在して居ると言う事だけだった。そして僕は彼女に身を任せ射精した。この時の快感は今でもハッキリ覚えている。それは僕の初体験だったからなのかもしれない、けれどその相手が紀子さんだったからこそ僕は快感を覚えたのかもしれない、その相手が当時心から愛していた紀子さんだったから。僕は射精した後もしばらくは放心状態だった。感じるモノは熱くなった体の熱だけだった。彼女も僕と同じ状態だった。僕等はきっと幸せだったのかもしれない、壊れていく恐怖も無く、死ぬ事自体だって美化出来たのかもしれない。

・・・美しく幸せのままの終わり・・・

そんなモノすら僕等は幸せと重なって見えた。僕は本当にこのまま時間が止まって欲しいとさえ思った。そしてその気持ちはきっと彼

女も同じだったのだろう。夢なら覚めないで欲しい、もしも現実ならこのまま時が止まって欲しい、けれど現実には動いている、僕の鼓動が動いていく様に。そして彼女は僕に言った。

「このまま時が止まってくれればいいのにな。明日も来なければ明後日も来ないの。そうなれば何も考えないでずっと二人きりで居られるのにな」

僕もその意見には賛成できた。けれど現実が動いている限りそれは無理なことなんだ。もしも現実が動いているのなら、確実に明日と言う日は僕等の前にやって来る。明日がやって来ると言う事は明後日も確実に僕等の前に訪れる。そうなれば僕は学校に行かなくては成らないし、彼女もまた仕事に行かなくては成らない。きっと僕等の有り金全部はたいたとしても、精々一週間か十日でこの恋の逃避行も終わりが訪れる。勿論僕等の恋は許されない恋では無い、だから日常生活を続けながらでもこの愛を育む事は出来るのだろう。けれど僕はどうであれ、彼女は違った。この愛が全てであり、この瞬間だけがその全てだった。それは彼女を雨の中で見つけた時から分かっていた事だった。彼女は僕と会ってから一つの事をずっと考えていた。僕はその事に気が付いていたけれど言葉には出せなかった。けれど彼女と一つになった僕はその事を素直に口に出すことが出来た。僕は彼女を少し強く抱きしめて言った。

「僕は平気だよ。紀子さんと一緒なら怖くないし、この世に未練も無いから」

彼女はその言葉に少し驚いた様に聞き返してきた。

「こんな私と一緒に死んでくれるの？」

僕はその言葉に黙って頷いた。正直言って僕はまだ中学三年生だ、歳で言えばまだ何も知らない十六にも成っていない。だからこの世界に未練が無いと言えはきっと嘘に成ったのだろう。当然まだやりたい事や、やるべき事は沢山あった。けれど彼女にとってこの愛がそうであった様に、僕にとってもこの愛が全てだった。だからそれが真実であるならば僕はその愛を受け止めて、そしてこの愛に命の全てを掛けたかった。僕の残された死への不安な気持ちは紀子さんの少し安心した顔を見ると無くなっていく。そして僕等また唇を重ねた。

～エデンの園を追い出された二人

都会の片隅で凍える二人

不安はあったよね 淋しい事もあったよね

けれどきっとそれもいずれは終わる時もあるんだね

だって僕等は死と言う最後の砦をいつだって

持っていられるのだから・・・～

僕等は無言のまままた重なり合った。それはこの世に存在した確かな感触を確かめ合うようなものだった。SEXをし終わると僕等は何も無い天井をしばらく眺めていた。彼女の細い腕と足は僕の体にまとわりついていて、彼女の髪が僕の顔にかかり、彼女の柔らかい乳房が僕の脇腹の辺りに当たっている。それは生きていたと言う確かな感触だった。見上げた天井は、さすがに天井まではバラの様子は無く、白い空間だけが広がっていた。僕は死ぬと言う事をほんの少し考えてみた。辺り一面に広がるお花畑、そこに居る人はみんな天使のように羽が生えていて、自由に空を飛び廻る。幾つかの場所にはポッカリとした大きな穴が開いていて、そこから下界がのぞき込める様に成っていた。そんな所に僕等は行くのだろうか？ けれど僕の想像したその世界は全クリアティーが無く、漠然としたものでしか無かった。僕はその想像の世界から今度はこの世の未練を考えてみた。まずは家に対してだ。兄は昔は優しくだったが、今では友達の方が大切なのだろう、ここ何日間はろくに話しもしていない。だから僕が死んだとしてもそれ程傷付かないだろう。そして父は尚更の事だ、僕が物心付くか付かない頃から殆ど家に帰って来ない。母が息を引き取るときも立ち会わなかった。だからきっと僕が死んだとしても何日間も気が付かないだろう。僕はそんな父には当然未練は無かった。後は友達だ。僕は昔っから内向的な事もあり、あまり友達を作らなかつた。本当に友達と呼べる人間は片手に余る程しか居ない、勿論そんな友達は僕が死んだとしたら悲しんでくれるだろう。けれどその僕が友達と呼ぶ友達はバンドの仲間、全員が紀子さんを知っている。だから僕が紀子さんと死んだとすればきっと分かってくれるはずだった。僕は残された未練を捨てて目を閉じた。十五年と言う未練は目を瞑るほど簡単なものだった。

お互いがそれぞれ色々な事を想像してからどれくらい経ったのだろうか。彼女はセカンドバックから幾つかの錠剤を取り出した。白い錠剤、黄色い錠剤、青い錠剤、そして赤い錠剤。・・・色とりどりの錠剤・・・僕等の死にはふさわしい最後のきらびやかさがそこにはあった。そして彼女はその色とりどりの錠剤を器用に二等分してから僕に言った。

「もう一度だけ聞くね。本当に私なんかと一緒に死んじゃっていいの？」

彼女のその気持ちには怖いぐらいの真剣さがあった。

「ええ、本当にいいんです。僕は紀子さんと一緒に居られるなら生より死を選びます」

彼女は僕のその言葉を聞いて少しホッとした様に見えた。そして最後の笑顔を見せて「ありがとう」と言った。それから僕等はもう一度だけ最後の口付けを交わし、その錠剤を一気に飲み干した。

興奮していたせいもあるのだろうか、睡魔が来るまでにはかなりの時間が掛かった。僕等はその間色々な話を交わしたが、その殆どが不思議なくらい覚えてはいなかった。そして気が付くと僕は眠りの奥深くに吸い込まれて行った。

それがどれくらいの時が流れたのだろうか？ 僕は酷い頭痛と吐き気によって覚醒された現実と言う名の世界に引き戻された。僕は便所に行って便器にその全てを吐き出した。ただの苦痛と苦しみだけの現実、きっと飲んだ睡眠薬は純粹に殺傷性の高い睡眠薬だけでは無かったのだろう。けれど初めのうちはそれが何なのか分からなかったが、苦痛と共に吐き出した幾つもの錠剤の残骸を見ればイヤでも何時間か前に自殺を図った事を思い出す。現実に戻されると一緒に自殺を図った紀子さんの事を思い出す。紀子さんは一体、僕は慌てて彼女の居るべき場所に戻って見た。けれど彼女はそこには居なかった。一体紀子さんが何処に行ったのか僕には分からなかった。彼女の着替えは昨晚と同じ場所で同じ状態のまま置かれていた。まさか裸のまま何処かに出かけた訳は無い、だとすると残された場所はバスルームしかない。僕はゆっくりとバスルームに向かった。僕がバスルームの近くまで来るとシャワーの音が聞こえて来た。その音を聞いた僕はほんの少し安心した。僕も死んでいなければ彼女も死んではいない。それにシャワーを浴びていると言う事は彼女に少しでも生きる希望が戻って来たと言う証拠でもある。僕はそんな立ち直った彼女と一緒に歩いて行こうと言う気持ちが湧いてきた。これからきっと色々な事が僕達二人の前に訪れるだろう。けれどこれからは僕等はいつでも一緒だ。いつでもどんな時でも一緒に手を繋いで歩いて行ける。時には僕が紀子さんを守る事だってあるのかもしれない。時には僕が紀子さんの手を引いてあげる事もあるのかもしれない。僕はいつだって彼女の味方だ。まだちょっと頼りないかもしれないけれど、僕は彼女の為に強くなろう。そしてほんの少しでも構わない、どんな時も僕が彼女の支えに成ろう。僕はそんな明るい気持ちのまま勢いよくバスルームと言う名の天国への扉を開けた。まさかその先が地獄絵の様な場所とは知らないままに・・・

僕が彼女からの置き手紙に気付いた時には、もう冷たくなった彼女の体をベットの毛布に優しく包んでからの事だった。

飯田君へ

まず始めに私は飯田君に謝らなくてははいけませんね。こんな事に貴方を巻き込んでしまったのだからね。本当にごめんなさい。だけどこれだけは分かって下さい。私、飯田君と一緒に死んでくれると言ってくれた事とっても嬉しかったの、これは本当よ、私生まれて始めて人から愛されているんだなあ実感できたの。本当よ、本当に実感できたの。

でもね、本当は私なんて飯田君に愛される資格なんて無いんだよ。私は飯田君が想ってくれるほど良い女じゃ無いの、私は今まで何百人との男と寝てきたの。理由はどうであれそれは事実、だからね貴方の大切な命を懸ける様な女じゃ無いんだよ。私はただの娼婦、だから貴方のその大切な命を重ねられないの。でもね、最後に一つだけ言わせて欲しいの。貴方が一緒に死んでくれるって言ってくれた事、こんな私の為に流してくれた涙、本当にとっても嬉しかった。貴方と一緒にならもう一度やり直せるのかな、私にも普通の幸せ来るのかなって、でもね現実はそのように甘く無かったよ。私覚醒剤を打たれているの、勿論自分でしたかった訳じゃ無い、けどね、現実はずぐそこまで来ているの。私はいずれ薬が切れる、そうなればまた同じ事を繰り返してしまう。もうダメなの、偽る事も、偽り続ける人生ももう終わりにしたかった。本当は貴方に会うまで一人じゃ淋しいから、一人じゃ怖いから、誰かと一緒に行きたかったの、今一番愛し合える人と。けどね飯田君と会ってそれから色々こんな私の為に一生懸命考えてくれたり、そして死まで選んでくれた貴方を私は心から好きに成ってしまったの。だから本当は一緒に行きたかったけれど、私の愛は貴方をもっともっと好きに成ってしまったの、だから貴方は連れて行けない、世界でたった一人の一番大切な人を私は連れては行けない。だから私は怖し不安だけど一人で行きます。そして最後にこんな私の事愛してくれてありがとうね。最後の最後に幸せのまま死ねた事に感謝します。飯田君、聞いていますか？ もしも貴方の愛が偽りで無く、真実の愛だとしたら絶対私の後を追わないで下さい。私の最後のわがまま聞いてくれますか？ 貴方は私の分まで幸せを噛み締めて生きて行って下さい。本当にありがとう
.....
紀子

彼女の最後の手紙はとっても切なく僕の心に音をたてた。僕は何も言葉に出来ず、ただただ冷たくなった彼女を抱きしめた。苦しみを偽り、偽りの中で彼女はたった一人で苦しんでいたのだ。一体僕はそんな彼女に何て言ってあげる事が出来たのだろうか。もう言葉の意味は無くなっていて。彼女の冷たくなった耳は生涯一度も「愛しているよ」という言葉を聞かずにこの世を去った。そして彼女のその動かなく成った唇は生涯一度たりとも「私ねえ、今とっても幸せだよ」という言葉を発する事は無くこの世を去った。そんな彼女に僕は一体何て言ってあげれば良かったのだろうか？ 勿論後追いも考えた、けれど彼女はきっとそれを認めないだろう。ほんの少し微笑みかけている口元は僕の後追いを許す顔では無かった。僕はただただ泣いて、ただただ彼女を抱きしめただけだった。たった一人で旅だった彼女の抜け殻を・・・。

葬儀は一人ぼっちだった彼女にふさわしく質素に行われた。参列する身寄りも少なく、僕たちメンバーを会わせても十数人で行われた。彼女の唯一の血の繋がった弟もそこには居た。けれどその弟すら彼女の美しい死に顔をまともに見てやる事は無かった。しかしその気持ちも理解出来ない訳では無い。それは僕にも当てはまるものなのだ。もしも僕の身内の父、もしくは兄が死んだとしても僕もやはりその死を悲しみだけで受け止める事は出来ないのかもしれない。例え葬儀のその場ですら僕は涙を流したとしても、それを純粋に悲しみとして訴える事が出来ない様な気がした。これは何がいけないのかは分からない、けれどそれは事実であり、それが現実だった。そしてその全てが後った後で知った事だったのだけれど、彼女の両親は彼女が十三の時に交通事故でこの世を去ったと言う事だった。それから彼女を含めた兄弟は親戚に引き取られたが、跡取り手の無かった親戚は弟の方だけすぐに籍に入れられたけれど女だった彼女は、養育費を掛けても元が取れないと言うレッテルを貼られ、一人だけ親戚をたらい回しにされた。そして何処でも厄介払いの中たらい回しされたのちに彼女が辿り着いた先は、暴力団の元だった。彼女は元々両親が抱えていた借金の返済の為、暴力団の言いなりに成らざるおえなかったと言う事だった。彼女はまだ十六の時に売春をやらされ、そして逃げられ無い様にシャブ漬けにさせられた。それから五年間と言う歳月は彼女にとってはきっと地獄の様な日々だったのだろう。毎日の様に知らない親父達と夜を共にしなければ成らなかったのだから。勿論そこには愛と呼べるモノなんて何一つ無かった。ただただ苦痛の毎日で、それは彼女にとっては耐えられない

毎日だったのだろう。僕等はそんな彼女の事を何一つ理解してあげる事が出来無かった。僕等は偽りの笑顔に幸せを信じていた。けれど偽りの中の苦しみなんて言うモノは、何もかも全ては過ぎ去った後に気が付くモノなのだ。もしも始めて出会った頃にその事のほんの少しでも理解してあげられたのなら、もしかすると彼女の人生も変わったのかもしれない。けれど僕等が知ったのはその全てが終わった後の事だった。僕等の歌う歌は真実の愛を求めるモノが多かった。きっと彼女はそんな僕等の歌に自分の知らない幸せを重ね合わせていたのかもしれない。けれどそれは今では後の祭りだった。彼女はもうこの世の中には存在しない、僕等の歌も彼女の耳にはもう届かない。そして彼女の優しい笑顔も、もう二度と見る事は無かった。僕等の憧れだった紀子さん、そして僕が当時唯一愛した紀子さん、けれど彼女は眠ったままで二度と僕等の前で笑って「あなた達の歌、私はとっても好きよ」と言ってくれる事はもう無い。僕等は追悼の歌を焼き場で遺骨に成る間、生ギター一本で歌い続けた。僕等のやれる事はそんな事しか無い。けれどそんな事が僕等の唯一してあげられる感謝の気持ちだった。だけど僕等の追悼の歌も今と成っては悲しいロックンロールと成って焼き場の淋しい壁に木霊する。そして一時間もしない間に彼女は灰に成った。それはとっても淋しいモノで、それはとっても悲しいモノだった。きっと薬の打たれ過ぎだろう、骨はとっても薄く、とってもか細いものだった。本当に小さな骨の断片、僕等はそれを優しく骨壺に移した。人間の人生の重さに比べて、死と言うのはあっけなく、そして機械的に事は運ばれる。彼女の死体と一緒に焼いた僕のギター、そしてそれも跡形も無く闇の中に消える。確かに形は何もかも灰になった。もしも願いが叶うなら彼女の苦しみも一緒に灰に成って彼女から消えて欲しいと願った。そして灰を骨壺に入れると役所の下らない手続き書と同時に彼女の存在はこの世から抹消される。けれど僕は絶対に忘れない。例えこの先にどんな事があっても、例えこの先みんなの心から彼女の記憶が無くなったとしても、僕だけは絶対に忘れたくない。あの時本当に心から愛し合った夜の事を、それが僕の唯一出来る彼女に対しての純粋な気持ちだった。

僕は今病院の一室の中に一人ポツンと居た。この静寂の中で唯一動と呼べるモノは時計の針と点滴だけだった。紀子さんの事を思い出した僕の気持ちは今やり場の無い追憶の中にある。やはり一度目の自殺未遂の事も考えるべきでは無かったのかもしれない。けれどこの空間の中では死と言うモノはいつでも隣り合わせにあった。

僕が紀子さんの死を受け止めそれを乗り越えるには紀子さんが死んで一年と言う歳月が掛かった。けれど本質的にはそれを完全に乗り越える事は出来やしない。ただ人は流れる時の中で忘れると言う防衛本能が働くのだろう。生きて行く為には忘れると言う偽りを重ねなければ成らない。そしてそれは僕も同じ事なのだろう。だから僕は一年と言う歳月の中で偽る術を覚えた。正確に言うと忘れる事は無い。僕は紀子さんが死んだ時に誓った様に、彼女の事を忘れる事は無かった。ただ人は悲しみの中だけで生きていけるモノでは無い。きっと必然的に心の中のポケットの一つにその全て詰め込んでチャックを閉める事をする事だけなのだろう。だから僕は心の一番奥の一番大切なポケットに紀子さんの思い出をしまった。そして更にそれから一年と言う歳月の中で僕は新しい第一歩を歩む術も覚えた。

時計の針は五時と言う時間を指していた。けれどそれが夕方なのか朝なのか僕には分からない。もはやこの静寂の空間の中では時間もまた意味は無い。ただ時は流れているけれど僕自身は前進もしなければ後退もしない。僕の記憶は昨夜の自殺未遂で止まったままだった。しばらくするとまたさっきの少し小太りの白衣を着た医師が僕の前に現れた。

「調子はどうかね？ まあ、あえて君がどうしてこんな事をしたのかは聞かないよ。けれど私も医者として君のここまでの課程や、これからの方針も聞かなくては成らないんだ。一応これも仕事だからね。だから出来る事なら話して貰えないかな」

その小太りの医者は僕にそう言った。けれど僕にはそれに答える程まだ整理も出来ていなかったし、もしもきちっと話せてもそれを理解するのはきっと無理だと思っていた。

「先生、僕は自分が何をしたのかも分かっています。けれどきっとこの事を理解するのはきっと貴方じゃ無理なんじゃ無いのかと思うんです」

僕のその言い方に小太りの医者はムッとせずに、少し考えてから優しく言った。

「まあ確かに君の全てを理解する事は無理なのかもしれない。けれど一つだけ分かって貰いたいのは、我々は人の命を救わなければ成らないと同時に、君の心の病も治さなければ成らないんだ。だから無理にとは言わないが、もしも君が何かを背負っているのならそれを、少しでも軽くしてあげたいだけなんだ。勿論君がその気に成ってからでいいのだけど」

医者のその言葉には、何一つ偽善的な部分や仕事の要所は無いように聞こえた。きっと本音で言ってくれているのだろう。だから僕は「とりあえず今は人と話したい気分じゃ無いし、それにまだ混乱の中に居るんです。だからまだ何も言えません」とだけ言った。

それに対して医者は「まあ、その事は今すぐじゃなくていいんだ。二、三日ゆっくり考えてからでもいいし、二、三週間でもいいんだよ。まあ私は一応医者だから時々様子を見に来るけれど、別に気を使わなくていいんだ。君が何か話したい時に話せばいいし、話したくない時は無理して話す必要も無い。君の思うままで構わないんだ。それに大体の事は君のお見舞いに来てくれたお友達から聞いているしね。それとあと一つだけ言って置くけれど、どうやら今回の事件の事で警察官が色々と尋ねに来るかもしれない、けど君はこの病院に居る間は、気が乗らなければ何も話さなくてもいいからね。警察官も悪気は無いのだろうけど、結構傷付く事を平気で言う事が多いんだ。君もそうだと思うが、私もどうも警察官が好きに成れないたちでね。じゃあもし何かあったらそこのボタンを押してくれ。例えば警察の強引な尋問とかね」と言って別れ際に微笑んだ。そして最後に言い忘れたけれど、私は担当医の小野だ、と言って部屋から出ていった。小野と名乗った医者が出ていくと部屋の中はやはり言葉を失った静寂に包まれた。

小野と言う医者は確かに言った。見舞いに来た友達から大体の事は聞いているよと。見舞いに来た友達？ 僕の記憶の中には見舞いに来た友達の記憶は無い。勿論友達は居たから見舞いに来てくれてもおかしくは無い。だとすると僕は一晩どころか何日間も眠っていた事になる。一体僕はどれくらい長い間眠って居たのだろうか。けれどその答えはこの部屋の中には無かった。壁に掛けられた時計は黙って時を刻むだけ、だから時間は分かってもし日にちは分からない。そしてその他に目につくモノは白い百合の花が飾ってある事だけだった。

・・・ユリノハナ・・・。きっとその百合の花もその友達か誰かが持って来てくれたものなのだろう。そしてその先の窓には傾きかけた夕日が綺麗に部屋の中をオレンジ色に染めていた。その事は僕の一つの発見だった、少なくとも今日と言う日はあと七時間弱で終わる事だけは分かった。僕は先ほど言われたボタンを押して今日の日にちを聞こうかとも思ったが、すぐにやめた。その理由としてはさっきも言った様にこの静寂の空間に時間が無意味な様に、やはり日付の様なものも無意味だと言うことだ。今日が仮に何月何日で、僕がああ記憶を無くしてから何日経ったと言うことは知ったとして

もただそれだけの事で、それ以上でも無ければそれ以下でも無い。ただ僕に必要な事はハッキリしている記憶だけで、心で刻む体内時計が全てだった。だからあの出来事は僕にとって数日前の出来事だったとしても数時間前の出来事であった。そして整理して考えるにはまだそれは物足りない時間でもあった。

僕は少し体を起こして外を眺めて見た。窓の外に広がる景色はオフィス街なのだろうか、雑居ビルが立ち並ぶ孤独を感じる世界だった。医療機器を見ると、東京東亜総合病院と書かれたステッカーが貼ってある。東亜病院と言えば僕の家から車で十五、六分の所にある、僕も知っている少し寂れた病院だった。僕も実際何度かその前を通った事があったが、その時に感じた景色と、実際病室から見た景色とはどことなく違って写る。そして窓から真下を見れば一つだけハッキリ分かった事があった。それは例えどんなにまた死にたいと思ったとしても、この階から飛び降りても精々足の骨を骨折する程度で、相当運が良くなければ死ぬ事は無いということだった。勿論今すぐに死にたいと言う気持ちは起こっていない。けれどだからと言って死にたく無いと言うのも嘘になる。現実的にこの病院に居ると言う事は自殺を図ったのだから死ぬつもりでいた事は事実だった。ただ正直言って今は何も分からない、死にたいのか死にたくないのか分からないと言うのが今の率直な気持ちだった。それも仕方無い事なのだろう、とにかく自殺の後遺症だか治療の薬の影響だかで、目覚めてからの体調が滅茶苦茶悪かった。僕は少し横になって目を閉じた。勿論幸せな夢は見れない。事の大きさはそんな僕のささやかな安息の地すらも奪うモノなのだ。けれど起きているよりも目を閉じている方が僕にはほんの少しの思考回路を作り上げる。そして僕はそんなささやかな思考回路の中で断片的な夢を見た。

カワサキGP-X250のバイクは走っている。そして風を感じる。背中には確かに小さな鼓動があった。僕等は淋しかった。けれど二人ぼっちの小さな形は確かに存在している。僕はそんな彼女に言った。何処か遠い所に行こう。そして彼女はただその言葉に頷くだけだった。ただそれだけだった・・・。

次の日は小野医師が言っていた様に刑事が二人僕の前に現れた。

その中の一人の刑事は数日前に会ったことのある佐々木と言う刑事だった。そして佐々木刑事は僕に幾つかの質問をしてきた。内容は僕の想像していた事と同じ内容だった。

「まあこんな状況の中で聞くのもなんだけど、君はこの一週間の間、

何処でどうしてたのかな？ いい加減話してくれないか？」

佐々木刑事はやはり今回のこの事件の事を聞いて来た。

「前にも言った通り、今はまだ混乱の中にいるんです。だから何も話せません」

僕は真実を述べた。けれど例え落ち着いたとしても、今は本当に話したくない心境だった。そして佐々木はその言葉を軽く流した。

「色々調べさせて貰ったけれど、君はどうやら色々問題のある子だったみたいだね。一つだけ言って置くが警察はそんなに甘くは無いぞ。今は病院内だからあまり派手な事はしないが退院したらそうはいかないぞ。だから今のうちに言った方が楽だと思うがね」

実際刑事にそう聞かれても僕には答えられる程余裕も無ければ、気持ちの整理も出来てはいなかった。

「ええ、刑事さんの言われる通り今回の事を答えるのは義務なんでしょう。けれど今は何も答えられません。これは別に言いたくないと言う事では無くて、今現在の段階では何も言えないと言う事なんです」

佐々木という刑事はその言葉を聞いて、しばらく考えている様だった。勿論向こうも仕事と言う立場上理由を確かめなければならない。それは僕にも分かる。それは二年半前に紀子さんと心中未遂をした時も同じ様に問いただされた。けれど答えと言うモノはいつでもYESとNOと言う言葉だけでは表せられない事もある。あの時もそうであった様に今回もそれはYESとNOだけでは答える事は出来ない。生と死はいつでも二つの選択肢しか無い、けれど死を選ぶにはYESとNOだけでは無くて、もっと複雑な選択肢が幾つもあった。そして僕はまだその選択肢の意味も分からないままだった。「刑事さんの言っている事は分かります。けれど今は何も答えられないのです。それだけは分かって下さい。もしもこの先落ち着く事が出来たのなら、その時は全てをお話します。だからそれまではほって置いて下さい」

佐々木は僕のその言葉を半分位、イヤ三分の一位は理解したのだろうか？ 少し間を置いてまた来るからと言って病室から出ていった。

佐々木が病室を出ていくと室内はやはり静寂の世界に包まれる。個室の病室、それは死を選んだ者だけに与えられる孤独な空間なのかもしれない。普通に考えれば死を一度選んだ人間にとって個室は自殺の再発にはもってこいの場所の様に感じられる。けれど実際は違った。もしもこの病室が共同だったとしよう。きっと隣のベッドの人は「おたく、何でこの病院来たの？」と必ず聞くだろう。そ

んな問いに「僕は自殺未遂でこの病院に来たのです」なんて答えられる訳は無い。そしてもしも仮に同じ境遇で来た患者同士だったとすれば、それは相乗効果と成って自殺の再発を併発するだろう。けれど不思議と個室と言う孤独な空間は死ぬ気すら起こらない。それは深層心理をついた医師達の巧みな戦略なのかもしれない。気が付くと真っ白なシーツにくるまれたベットに寝かされて、そして体に悪そうな黄色い点滴を打たされる。そこには逃げ場は無く、そこには意志も無い。ただそこにあるモノは自分の傷付いた体と、無意識と化した心だけだった。僕はそんな状態のまま何日間も寝かされ、そして色々な検査を経て一時的に釈放される。けれど行き先は決まっている。単発的や衝動的に自殺を図った者ならば、そのまま元の環境下に戻るけれど、僕の場合は多分違う。きっとまた施設送りにされるのが落ちだ。前回の自殺の時もやはり単発的や衝動的と言う診断はされず、千葉県の下度東京湾と九十九里の間に位置する施設に僕は行く事に成った。その場所は下度車で千葉県の県道二十号を九十九里方面に走り、大網の少し手前を左に折れて、山道らしき道を十五分ほど走った所にその小さな施設は在った。人里離れたその施設は自然にマッチするかのように、年期の入った二階建ての木造社屋だった。そして今でも僕はその施設の事をハッキリ覚えていた。

その施設に初めて行った時、僕は軽い言語障害と自閉症を伴っていた。まあ簡単に言うとその施設自体がそう言った何かしらの心的外傷(トラウマ)を抱えた人達の療養所だった。そこに来ている人達の大半はまだ小さな子供達で、僕のように十五を越えた人間はその中ではほんの一握りに過ぎなかった。そしてその殆どが僕よりも重い心的外傷を持った人間達だった。ただハッキリ言える事はこの療養所は今の様な医療機器に縛られた病院や校則に縛られた学校に比べると、幾らか自由が在り、そして何より全てを失った僕を受け入れてくれる唯一の場所だった。

振り返れば僕はその療養所に一年半居た事に成る。そしてその一年半は僕にとって大きな一年半でもあった。

あの日も僕は今と同じ傷を持ってその療養所に入院する事に成った。二年前、それは今でもハッキリ覚えている。紀子さんは僕を置き去りにしてこの世を去った。そして僕はこの世にひとりぼっちのまま取り残された。理由は分からない。彼女の遺書が全てなのかもしれない。警察が

ホテルに着いた時には僕は思い出と言うただの抜け殻を、ただただ抱きしめていた。今思えば僕はその時まで、本当の悲しみと言うモノを知らなかったのかもしれない。確かに僕はそれまでに母と言う身近で大切な人を亡くしていた。けれど母の時と、紀子さんの時とでは明らかにそれは違うモノだった。母は僕が物心の着いた頃、そう僕が五歳の時に他界した。けれどそれは死んだと言う概念では無く、もっと漠然としたモノだった。例えるなら永遠の別れと言うよりも、僕が目を瞑って良い子にしていればきっとまた会えると言うおとぎ話の様なモノだった。けれど紀子さんの場合は違う。それは僕にとってホテルの一室で見た光景があまりにも衝撃的過ぎたせいかもしれない。もしくは自分の命をも賭けた心中だった事だからかもしれない。それは今でも言葉に出来ないモノだけれど、僕にとっては忘れることの出来ない悲しみだった事だけは事実だった。そしてそれは数日後の紀子さん告別式が終わった直後にやって来た。それまでは全て機械的に事は運んだ。警察の事情聴取も彼女の直筆の遺書と、彼女の身の回りの状態から彼女が自殺を図った事は明白だった。だから僕は幾つかの質問に形式上だけのYESかNOを答えれば済んだ。そして最後の別れの時も彼女の為に彼女が生前好きだった歌を一生懸命歌えばそれで全ては済んだ。けれど本当の悲しみと言うモノはいつだって全てが済んだその後から出て来るものなのだ。そして僕の場合もそうだった。僕はその全てが済んだその直後に、何もかもに心を閉ざした。紀子さんの耳にもう僕の声が届かないのなら、僕にはもう言葉は要らなかった。紀子さんの美しい声ももう聞けないのなら、僕にもう耳は必要なかった。そして紀子さんともう分かり合えないのなら僕にもう心は必要無くなった。紀子さんは僕の全てであり、僕の全ては紀子さんを中心に廻っていたと言っても過言では無かった。少なくとも十五歳の僕の恋はそうであり、本当の愛はそうであった。僕の心の扉は紀子さんを失った時点で全ての鍵をかけた。それは意識レベルでどうと言うモノでは無く、意識とは無関係なところで行われたものだった。そして日常生活もままならなくなった僕は病院で精密検査をさせられた。勿論僕の中では意識の概念はあった。僕自身だって出来る事なら早くこの悲しみから逃れ、そして早く元に戻りたかった。けれど近代医学の力なんて言うものは、決してそんな悲しみを取り除ける程進んではいけないのが事実だった。結局僕は心的外傷が原因で起こした心身病、正確に言うと軽い言語障害と自殺衝動を伴った躁鬱病及び軽度の自閉症と診断され、治療とりハビリを兼ねる目的で千葉県の療養所に入院する事に成った。それが僕の初めての療養所でもあった。

その療養所は子供専用だと言う事もあって、職員以外は全て未成年の子供達だけだった。そしてその中でも僕の様子に十五を超える者は三分一位で、その殆どがまだ思春期も越えていない様な小学生や中学一年生位の子供達ばかりだった。僕は先でも言った様に、言語障害を伴った自閉症だったけれど、意識の概念は存在していた。簡単に言うと言葉と外に対しての興味は無かったけれど、外から入ってくるものには理解出来ると言う事だ。と言う事はその世界が僕にとってどんな所か分かって貰えるだろう。十五にも成って何で僕がこんな小学生達と一緒に共同生活をしないでいけないのだろう。僕はその環境下を拒んだ。けれど急患の患者が病院を選べないのと同じ様に、医師や療養所の職員達の意見は同じだった。僕の傷付いた心は一般の療養所で直すよりも、子供達の中で直す方が早く完治する。それはその療養所の設立の目的と一致していた。簡単に言うところ療養所は患者同士がお互いの治療をし合う事を目的として作られたと言う事だった。思春期に入ったばかりの少年の傷付いた心は、下手に俗物社会の中で生きている大人よりも、まだ何も知らない純粋な心を持った幼年達を見ながら治療をする方が直り方も早いし、逆に幼年期に傷付いた子供達は少し年上の少年達の心を見つめて育つ方が歪まずに素直に育つ率が高いと言う事だった。正直言って僕はそれを鵜呑みした訳でも無ければ、そんな都合の良い連鎖反応があるとは思わなかった。けれどその時の僕には一つのモノがハッキリと見えていた。それはその施設に入って二、三日で感じた。

初めはその年齢差や一人一人の症状の落差ばかりに目を奪われていたが、ある時フッと気が付いた事があった。それはその療養所の中の全ての者の持つ瞳だった。どんなに小さい子供も、そして自分よりも二つか三つ年上の人もみんな同じ瞳を持っていたんだ。その瞳は純粋と言うか、輝いていると言うか、とにかくみんな同じ瞳を持っていた。そしてその瞳は今亡き紀子さんと同じ瞳でもあった。きっと理由や環境はどうであれ、この社会が俗物的であればある程、傷付く人間は同じなのかもしれない。自分と同じものに感動し、同じもので笑い、同じもので泣く、そして同じもので傷付いた。そう考えるとすでに歳の差なんて概念は存在しなくなる。そこに居るのは自分と同じ傷を持ち、そして同じ様に戦う同士達なのだ。きっと僕がみんなから貰えるモノもある代わりに、僕からみんなに出来る事もあるのだろう。そう思った時に初めてこの施設の設立の意味を理解出来た。そして僕はその施設の一員と成った。

その施設はまるでこの淋しい現実から切り取られた小さなポケットの中身の様な空間だった。外の冷たい風は僕等の様な者にとってはとても厳しく、そしてとても悲しかった。けれど塀の中は違った。そこに居れば何も悲しまなくていいし、何も傷付かなくてよかった。ただそこには空があり、そこには自由があった。そして僕はそんな優しい空間の中で少しずつ自分を取り戻す様に成ることになった。まず僕がした事は、なるべく多くのレクリエーションに参加する事だった。初めに言うておくけれど、この施設の中では強制と言うものは何一つ無かった。レクリエーションに参加するのも自由ならば参加しないのも自由と言う事だ。勿論中には参加しない者も居た。特に僕くらいの年齢や、もしくは僕よりも年上の人あまり参加することは無かった。やはり小さな子供達と同じ事をするのがバカバカしいと思っているのだろう。正直言って自分だってこの施設に来る前までは同じ気持ちだった。けれどこの施設に入って見方が少し変わった。純粋な目をした子供達、僕が彼らから学ばなくてはならない事は沢山あった。それに一人で部屋に居たところで現実是不変。もしも現実を変えたいと思うならまず自分から変わらなければならぬ。それはこの施設に入る時に吉田香奈さんと言う僕の担当になる人から言われた言葉だった。僕はその言葉の意味は直ぐに理解出来た。正確に言うて理解出来たというよりも、理解せざるおえない現実が自分の意志とは関係なくそこにはあった。

僕は確かに紀子さんと共に多くのものを失った。けれどそれと同時に確かなものも手に入れる事も出来た。

・・・真実の愛・・・それは言葉にすると薄っぺらなものになる。だけど僕はその愛を信じていたし、その愛に全てを賭けた。そしてその愛は僕だけを置き去りにして僕の前から去って行った。そして僕は取り残された。死ぬことも許されてはいなく、振り返ることさえも許されてはいない。残されているのは前を向いて生きる事だけだった。それは機械的でもあれば、強制的でもあった。けれどそれが唯一紀子さんとの約束でもあったのだから。

レクリエーションは幾つかのカリキュラムに沿って行われていた。もっとも簡単なものはボール遊びの様なものやハンカチ落としの様なもので、その殆どは低学年用のカリキュラムだった。そして僕の様な高学年の者達のカリキュラムは、どちらかと言うと勉強的なものや、仕事の様なものが多かった。僕は初めの内は勉強的なものを重点としたカリキュラムを行った。教室と言うか作業部屋は大体普通学校の教室の三分の二位の大きさで、生徒も十人前後といった少人数制で行われた。そして午前午後とそのカリキュラムを終わらせる

と夕食をとってから、夜のミーティングに成る。と言ってもその殆どが何かしらの言語障害なり自閉症を伴っていた者が多かった為、殆どがチーフ（この施設では先生と言う名前は使われない）のためになる話や、ギター片手の音楽会の様なアットホーム的なものが多かった。そして大浴場で入浴を済ませ消灯となる。僕はそんな日々の中で少しずつ友達も出来、そして少しずつ自分を取り戻していった。

そんなある日僕は一人の少女に出会った。少女の名は斉藤小百合と言うまだ十三歳の少女だった。

彼女は僕が日々行っているレクレーションの一つに五月に成ってから参加した一人だった。彼女の場合は僕とは違って、見た目には精神的な傷害は無い様に見えた。言葉も八キ八キ喋るし、何と云っても一日の殆どが笑顔の絶えない子だった。後からチーフに聞いた話だけれど、彼女は幼児期の両親の死去と言う心的外傷（トラウマ）によって軽い外因性精神遅滞があると言う事だった。そう言われると確かに彼女には十三歳とは思えない程幼稚な部分もあった。彼女はいつでも熊のぬいぐるみを持っていて、そして時々幼稚な言葉使いをする事もあった。その為か彼女との間には二歳以上の年齢差を感じる事が多かった。そしてそんな彼女がある時とても傷付く出来事があった。それは七月の後半のある暑い日の出来事だった。彼女は廊下ですれ違った僕に言った。

「ねえ、お兄ちゃん、私のポピーを見なかったですか？」

ポピーとは彼女がいつも大切に持ち歩いていた熊のぬいぐるみの名前だった。

「いや分からないよ」

僕はその頃には何とか日常会話程度の言葉は喋れる位に回復していたので、言葉を使って答えた。

「そうですか・・・」

その時の彼女の落ち込み方といったら物凄いものがあった。僕は何故だかそんな彼女を一人でほっとけなかったのと、たまたまその日が日曜日で暇だった事もあり、一緒に探してあげるよと言った。

彼女の話を知ると朝食をとり食堂に行って帰って来たときには、ぬいぐるみが無くなっていると言う事だった。まあこの施設の中では物が無くなる事は日常茶飯事だった。施設と言う所は見た目には心の傷を負った人達が集まる可哀想な場所と言うイメージが多いだろうけれど、実際はそんな良い所ばかりでは無い。嘘を付く者も居れば、人の物を平気で盗む者も居た。けれどその殆どが時計や貴金

属等の高価な物が多く、ぬいぐるみの様な物は余り盗まれることが無かった。だからもしも盗まれたと言う事が事実ならば、小さな子供のほんの出来心が真相だろう。けれどそうなるって話がややっこしく成ってくる。この施設の中では人を疑うという事は精神的ダメージ、いわゆる信頼関係の崩壊に繋がる可能性がある為に厳禁に近かった。それに相手が小さな子供ならば尚更の事だ。きっとチーフに相談したところで答えは決まっていた。だから僕等は仕方なく二人だけでその施設の中を探す事にした。

建物は木造二階建ての田舎の学校の様な建物だった。建物自体も古く、赤い三角屋根も今では色が変わり、黒っぽく見える。建物全体の背景は、正面玄関を挟んで黒光りした長い廊下が二手に分かれていて、正面から見て右手は僕が所属するA棟で左手は彼女が所属するB棟に成っていた。中央には玄関と事務室兼職員室、そして待合室がある。療養所自体の敷地はそれ程広く無かったが、それでもその中には造園やジャングルジム等の遊具、そしてバスケットのフルコートもあった。ただ実際は林や畑に囲まれた施設は外も中も出入りが自由で、自由行動の時には施設の近くにある野池を散歩したり、林の中で昆虫探しをする者もいて、実質の行動範囲はかなり広がった。僕等はとりあえず彼女の部屋の周りから探し始める事にした。

施設内の部屋割は十五歳未満や人に危害を喰わせる程の障害が無ければ殆どが共同部屋だった。十三歳で、そして危害を与えるはずも無い彼女の場合もそれは同じ事で、彼女の部屋は三人部屋だった。

彼女の部屋の中は金属製の二段ベッドが二つと少し大きめのテーブルが一つ、それと木製のロッカーが置いてあるだけの、限りなくシンプルな部屋だった。窓からは施設内の運動場が見渡すことが出来て、僕の部屋の光景よりは幾らか良い眺めだった。僕等はその部屋の中を隈無く探したが、それらしいものは見つからなかった。僕等は次に建物内を探すことにした。まず僕等が向かったのは食堂だった。

食堂はA棟の玄関近くにあり、十人掛けの長いテーブルが五つあり、端には厨房があった。今は時間外と言う事もあり、厨房で昼食の準備をしているコック以外は誰も居なかった。五分も探せばそこに熊のぬいぐるみが無いのは直ぐに分かった。それから僕等はレクレーションルームに向かった。

レクレーションルームは施設内に五カ所あり、その一つ一つを廻ることにした。レクレーションルームはどれも同じ様な作りをしていて、学校よりも一回り小さな教室の様な場所だった。高学年用の

レクレーションルームには、色々な楽器や机、そして作業台の置いてある部屋もあり、見渡しただけではぬいぐるみがあるかどうかは直ぐには分からない場所もあった。僕等はテーブルの下や、楽器の置いてある場所を探したが、ぬいぐるみは見つからなかった。それから僕等は低学年用のレクレーションルームを探した。低学年用のレクレーションルームは、トランポリンを始め、ボールプールや遊具置き場があった。そして遊具置き場には幾つかのぬいぐるみがあったが、その中にも彼女の熊のポピーは置かれていなかった。レクレーションルームを全て探し終わると、昼食を済まして午後からは建物の外を探すことにした。建物の外と言うのは施設内外を合わせると近くの野池や林の中まで探さなければいけなかったで、かなりの広範囲を探さなければ成らない事になる。僕等はとりあえず施設内のグラウンドを始め造園や遊具の集まった小さな公園等から探し始める事にした。それは普通に探しても一時間以上は掛かるものだった。僕等はの一つ一つを隈無く探した。幾つかの場所には誰かが忘れていった私物らしいシャベルやロボットの超合金が置き去りにされていたが、どれも丁寧に扱われていなかったのか、泥だらけに成っていた。僕等は公園を探し終わると次は運動場に向かった。

運動場には何人かの少年達がボロボロのゴールネットのバスケットゴールに向かってスリーオンスリーをしていたが、それ以外は目に着くものは無かった。その他の造園や運動場にも向かったが、鬼ごっこや手打ち野球をしている何人かの少年少女が目につく以外はやはり何も手がかりは見つからなかった。施設内を探し終わると残されているのは、施設外の場所になる。けれどそうやって来ると探すのはかなり困難に成る。けれど彼女の真剣に探す姿勢を見れば、ここで諦める訳にはいかなかった。僕等は施設の門から出て、限りなく広範囲を探すことにした。そこまで行くと、きっと誰かが借りて何処かで持ち歩いていることは目に見えていた。そう思った僕は彼女にとりあえず聞いてみた。

「これだけ探したんだ。きっと誰かがちょっと借りたんだよ。だからきっとその誰かがそのうち返しに来てくれるかもしれないから、部屋で待っていると言うのはどうかな？」

けれど彼女はそんな僕の提案に首を振って「ダメ、ダメなの。あれが無いと私、私・・・」と言い返して来た。

彼女の表情からすると余程大切なぬいぐるみなのだろう。僕はそのぬいぐるみの事を彼女に訪ねてみた。

「そんなに大切なぬいぐるみなの？」

「うん」

彼女は小さく頷いた。そして彼女の力無く頷くそのうんは、痛いほど気持ちの伝わるうんだった。だから僕は夕方に成るまで一緒にその大切なぬいぐるみを探す事にした。そしてそれは二人にとってほんの小さな冒険の様なものだった。僕等は熊のポピーを探しながら普段行かない部屋に行ったり、今まで気が付かなかった秘密の抜け道を見つける事が出来た。そして僕等は探している内に、宿舎から少し離れた小さなお花畑を見付けた。そのお花畑は入り組んだ林を抜けて少し開けた場所にあった。きっとそこは誰かの私有地なのだろう。真夏の太陽をしっかりと受けて咲くヒマワリやアサガオ、そしてタンポポが並ぶように植えられていて、辺り一面を色とりどりの花が埋め尽くしてた。そのお花畑に辿り着いた時はぬいぐるみこそ見つからなかったが、彼女の表情は少し明るく成った。きっと女の子にとって花というものは永遠の憧れなのだろう。彼女は我を忘れてほんの少しだけ夢中になった。真夏の太陽は四十五度を差し始めいる。そしてそんな日差しの中、花と戯れる彼女、宙を飛び交う蝶々もそんな彼女を温かく迎え入れる。僕はそんな光景を遠目で見ているだけで、心の傷が癒されるのが感じられた。花と戯れる純真無垢な少女、花柄のワンピースに白いスニーカー、髪を後ろに束ねているポニーテール姿はとても十三歳には見えなかった。そして僕はそんな彼女の姿を見ながら一時の安らぎを覚えていたが、フツとした瞬間、彼女はポピーの事を急に思い出したのだろうか、彼女の表情は悲しみに戻った。そして彼女は僕に寄り添って来ながら言った。

「ねえ、私のポピー、見つかるかな？　ひとりぼっちで淋しくしてないかな？」

僕はそんな不安そうに聞く彼女に優しく言った。

「ああ、きっと見つかるよ。だって君はポピーのお友達なんだろう？　だったらきっと戻ってくるよ」

けれどそうは言ってもこれだけ探すと、見つかる保証は限りなく無いに等しかった。傾きかけた太陽はそんな二人の不安を一層濃くしていく。そして僕等が野池の周りを探して宿舎に戻って来た時には太陽は山の向こうに沈みかけていた。結局その日は見つからないまま僕等は別々の部屋に戻ることにした。別れ際僕は彼女に「また明日一緒に探してあげるよ」と言った。小百合はそれを聞いてほんの少しではあったが、微笑み返してくれた。そして僕等は別々の廊下を歩きだした。

僕は小百合と別れてからも熊のポピーの事が気に掛かり、担当の吉田香奈チーフにその事を相談してみた。

「あの香奈さん、ちょっと相談したい事があるのですが」

「あら珍しい、飯田君が相談なんて」

香奈さんは年齢で言えばもう二十代後半に差し掛かった独身の女性だった。見た目は決して悪くは無いのだけれど、本人に結婚願望が無いのだろう、自己紹介の時は必ずと言っていいくらいあえて独身なのよと言う事を胸を張って言う人だった。

「ええ、ちょっと探して貰いたい物があるんです」

「探して貰いたい物？」

彼女は不思議そうに言った。

「ええ、実はB棟の斉藤小百合ちゃんの熊のポピーの事なんですが見かけませんでしたか？」

「熊のポピー？」

「あっいや、熊のぬいぐるみの事なんですけど」

「ああ、いつも小百合ちゃんが持っているあの熊のぬいぐるみの事ね」

「ええ」

「そうね、私は見ていないけれど他の人が見かけたかもしれないわね、けれどそれがどうかしたの？」

「いや実はそのぬいぐるみが今朝から行方不明なんです。それで今日一日中小百合ちゃんと探したんですが見つからなくて」

「そう、じゃあ他の人にも聞いてあげるわ。ちょっと待っててね」

香奈さんはそう言って内線電話を掛けて事務局に問い合わせをしてくれた。数秒間受話器越しのやり取りをして香奈さんは電話を切った。

「詳しい事は分からないけれど、どうやらそれらしい物をあの浩が昼間持ち歩いていたらしいって言っているけれど、浩に直接聞いて見ようか？」

香奈さんの言う浩と言うのは施設内にいる者ならば誰でも知っている人物だった。特にあのが付けば確実に一人に限定されていた。

浩（本名、青木浩）別名、壊し屋の浩は精神分裂病でこの施設に入院している十六歳の少年だった。正確に言うと爆発制を伴った分裂病に値して、本来ならば療養所では無く、専門の精神病院に入院するのが筋なのだろうが、人には殆ど危害を喰えないと言う事と、未成年と言う事でこの施設で様子を見る事に成っていた。ただあだ名が壊し屋の浩と言う事もあって、とにかく人の大切な物や、施設内の壊れやすそうな物を見ると壊したく成る習慣があった。実際僕も過去に大切なギターを壊されそうに成った事があった（ちなみにその時は未然に防げたけれど）。

「そうですか、あの浩がですか・・・」

僕のその言葉は絶望的な溜め息に近かった。

「まあ浩が持っていたと言う事は、今頃ボロボロに成っている可能性はあるけれど、どちらにしろそれが本当に小百合ちゃんのポピーかどうかは確かめないといけないしね」

香奈さんは不安そうに言う。

「いや、浩が持っていたのはきっとポピーですよ。あいつはとにかく人の大切な物を見ると壊したくなる奴ですから」

「まあ私が言うのも何だけど、浩ならやりかねないわね。散々注意しているんだけどね。でっ、どうする？ 私の方から聞いてあげようか？」

僕はそんな香奈さんの問い掛けに首を振った。

「いや、俺が直接聞いて来ます。部屋も近くだし」

「そう、まあもしも彼が持っていたぬいぐるみが本物だとしても暴力はダメよ。ここの規則を破ると、今度はあなた自身が悪者に成る事もあるんだからね」

僕はその言葉に対しては曖昧な返事をしただけだった。正直言って自分を抑えられるかどうかは自信が無かった。きつともしもそんな自信があったのなら僕はこんな場所には居ないはずだし、もしも仮に何とも無い正常な状態だったとしても、許されない事ならば暴力を振るうこともある。それは十五年間に築き上げた正義を守る為には悪にも染まる事もある、と言う僕自身の自論でもあった。

僕は香奈さんに礼を言うと真っ直ぐに浩の部屋に向かった。浩の部屋はA棟の僕の斜め前の一つ隣の部屋にあった。僕達の様に一五歳を迎えた少年少女は、小百合ちゃん達とは違って、大概は一人部屋を与えられていた。そしてそれは青木浩も同じ事だった。僕はAの13 [青木浩]と書かれた部屋の扉をノックした。

トン・トン・トン。

「・・・・・・・・」

部屋の中からの応答は無かった。僕はもう一度部屋のドアをノックした。けれど答えは同じだった。僕はドア越しに耳を当てて、中の様子を伺った。耳を澄ましてみると扉の向こうから何か独り言の様な声が途切れ途切れ聞こえて来たが、「はいどうぞ」と言う確実な返答は無かった。僕は再度ノックをしたが結果は同じ事だったので、仕方なく強引に扉を開ける事にした。部屋のドアは何処の部屋も鍵と言うものは存在していなく、ドアを開ける事自体は簡単な事だった。僕は部屋のドアを開けて中を覗き込んだ。そしてその時僕が見た光景は、一生忘れることの出来ない光景として僕の記憶に深

く刻み込まれる事に成った

東京東亜総合病院の病室は、小さなベッドサイドのスタンドの明かりだけの暗い空間だった。ここ数日間に起こった出来事はまるで解離性人神経症の様にリアリティーの欠けた現実だった。勿論それら全ては自分に降り掛かっている事なのだけれども、そこにはまるであかの他人の出来事の様に僕には感じられた。二度の自殺を凶った時の様子も今はまだハッキリと思い出せない。まるでリアルティーの欠けた出来事の様に感じる事もあった。けれど窓辺に飾られた白百合の花を見ると、あの浩の部屋で見た光景がハッキリと思い出すことが出来た。僕はベットサイドの小さな明かりの中でその事を思い出してみることにした。本当にあの時の光景は衝撃的なものがあった。

鍵の掛かっていない青木浩の部屋のドアは意図も簡単に開けることが出来た。部屋のドア越しにはちょっとした仕切りがあって、その仕切りの向こうに浩の気配はあった。ドアを開けると浩の独り言の声はハッキリとしたものに成る。僕は勇気を持ってその仕切りの隙間から中を覗くことにした。中には一人用のベットとその床にはちょっとしたベージュの絨毯が敷かれている部屋だった。そして浩は背中越しにその絨毯の上に座っていた。浩のその姿が素っ裸だった事は薄明かりの中でもハッキリ確認する事が出来た。浩の右手には何処から調達したのか、カッターナイフの様な物を持っていて、左手はその右手とは不似合わない様な規則正しく上下にピストン運動を行っていた。それが自慰行為だと言う事は鈍感な僕でも直ぐに分かった。そして右手はそのぬいぐるみの左手と胸辺りを切り刻んでいた。僕は直ぐにその行動を辞めさせようとしたが、その光景があまりにも衝撃的過ぎたせいなのだろうか、なかなか声に出すことが出来なかった。そしてその空間の中で聞こえる声は、浩の一方的な声だった。

・・・ぶっ壊してあげよう・・・俺と一緒にイッテくくれるか？
・・・そうかそれを望んでいるのか・・・もうすぐお前は俺のものさ・・・さあ俺のこの制裁を受けるがいい・・・。

浩の発するその言葉は完全に僕等の知らない別の世界にイッテしまった男の声だった。僕は震える声で怒鳴った。

「おい、お前何をしているんだ！」

僕のその声に浩は振り向いた。けれどその目は正気は無く、完全に違う世界にイッテしまっている目だった。浩は自分の幻想の世界

を邪魔された事に腹を立てたのだろうか？　邪魔をした僕に怒鳴る様に言った。

「なんだお前！　俺様の儀式を邪魔するつもりか！」

そう言うと浩は右手に持っていたカッターナイフを片手に立ち上がった。体の割には小さく勃起しているペニス、そしてその体の節々には自分で傷つけたらしい傷跡が何カ所があった。

「その熊のぬいぐるみはお前の物ではないだろ！　それを返せ！」

浩はそれを聞いても言っている意味が分かっていなかった様だったが、片手が切り刻まれてもぎ取られた熊のぬいぐるみ、それは紛れも無く小百合ちゃんのポピーだった。

「そうかこのぬいぐるみが欲しいのか？　けれどこのぬいぐるみは俺に犯して貰いたいって言っているんだ。それをお前に邪魔される覚えは無い！」

浩は完全に別世界にイッテしまっていた為に、まともな話し合いは出来なかった。

僕はとにかくその小百合ちゃんのぬいぐるみを取り返そうと手を伸ばした。そして僕がぬいぐるみに手を掛けた瞬間、半狂乱だった浩の鋭い刃物が僕の腕に振り下ろされた。

勢いよく振り下ろされたナイフは僕の腕に深い傷を与えた。そして傷を受けた僕の腕からは血が滴り落ちた。けれど不思議な程痛みは余り感じなかった。普段服用している抗精神薬（ドグマチール）と抗不安薬（セルシン）の影響もあったのだろうか、もしかすると興奮をしていたからだろか、体の痛みは今の自分にとっての心の痛みに比べると大した事は無かった。僕は滴り落ちる血を右手で押さえながらも熊のぬいぐるみを取り上げた。ぬいぐるみの周辺には白いドロドロとした液体（スペルマ）がこぼれて居たが、幸いの事にぬいぐるみ自体にはその液体は付着してはいなかった。けれどいかれた浩の反撃は僕の腕一本だけにとどまらなかった。浩はナイフを更に高く振り上げて僕を襲おうとする。僕も素手同士ならば喧嘩に負ける事も無かったが、相手はナイフと言う凶器を持っている。それに加えて精神の異常と言う狂気も備わっていれば尚更の事だった。浩は自分の快楽を奪われ完全に正気を失っていた。そんな怖いもの知らずの浩の前では僕の抵抗も虚しく、二度目の攻撃は僕の胸辺りに振り下ろされた。今度は激痛が走った。本当にこの時は殺されるんでは無いかと真剣に思った。けれど奇跡と言うものは偶然にして起こるものなのだ。僕が浩の部屋に一人で行ったのが心配に成って、香奈さんが様子を見に来てくれたのだ。僕は三度目の攻撃を受けずに済んだのはそんな香奈さんのおかげだった。香奈さんは素早く浩

の持っていたナイフを取り上げて、そして浩を押さえつけた。さすがに合気道をやっていた香奈さんの前では、正気を無くしている浩は赤子の手を捻る様だった。そして事の成り行きを聞きつけて集まった職員達によって僕は間一髪のところまで救われた。けれど流血が凄かった為、僕は急遽大網町内にある千葉県立大網総合病院に救急車で運ばれる事になった。幸い傷は動脈を外れていた為、命には別状が無く、全部で十三針と言う傷跡だけ済んだ。そして僕は三日間その千葉県立大網総合病院に一時的に入院させられる事になった。

県立の総合病院と言えは聞こえは良いが、築年数三十八年のその建物は、そこにただ居るだけで他の病気を誘発させられるのではないかと思わせられる程古ぼけた建物だった。病院の部屋は憂鬱になるほどの古ぼけた壁に囲まれていて、窓から見える景色は隣の汚れ掛かった壁で、日光も一日のうち数時間しか当たらなかった。そして少し色あせた患者着と腕と胸に巻かれた包帯に僕は身を包まれていた。本当に急な事だったので、用意してきた物は何もなかった。小説も無ければウォークマンも無かった。ただある物は、浩から取り上げてから一度も手放さなかった熊のぬいぐるみだけだった。僕は時間がある時はいつも、そのぬいぐるみを眺めて時間を過ごした。左腕と胸辺りを切り刻まれてしまった熊のポピー、まるで今の僕と一緒に、それは愛着の湧くものだった。そしてそんな傷跡を見ているとイヤでも夕べの浩の事を思い出してしまう。それは本当に怖い出来事だった。まあナイフを振り回されたり突き付けられる程度の事はそんなに怖い事では無かった。それよりも怖かったのは何と言っても浩のあの別世界にイッテしまった眼にあった。半狂乱に成りながらも冷酷さを持ち備えた眼、それは今までに見たどんな眼よりも恐ろしい眼だった。きっと浩は歪んだ妄想の中を彷徨っていたのだろう。そしてそこに歪んだ世界と現実との境が見えなくなったのだろう。

・・・歪んだ妄想の中の歪んだ現実・・・。きっと逃げ場すら無かったのかもしれない。やるかやられるか、ただそれだけの選択肢、真っ直ぐにしか生きられない十代の僕等は、いつだって一步間違えれば浩の様に成ってしまうことはあるものなのだ。ただたまたま今回は浩がその犠牲に成ってしまっただけの事だった。勿論それに対して同情するつもりは無い、けれどその歪んだ現実には僕にとってもいつでも隣合わせに存在してあった。

午後からは香奈さんが本を二、三冊持って病死室に現れた。

「夕べは本当に大変だったね。でもまさか浩があんな事をするなん

て、私も不注意だったわ、ごめんなさいね」

「いえ、あれは香奈さんのせいでは無いですよ。むしろ香奈さんが居なかったら僕は今頃どうなっていたか。ところで浩はどうなったんですか？」

僕は色々な意味で浩の事が気に成り浩の事をたずねてみた。

「浩はあの後職員の話し合いの結果、強制的に精神病院に入院させる事になったわ。まああれだけの事をしたんだからねしょうが無い事ね。私もあれ程症状の酷い子を見たこと無いわ。まあ元々浩は精神病院に入院するべきだったのよ。今回こんな事に成ったのはきっと初めの医師の曖昧な診断が原因だったと言う事ね」

その後知った事なのだが、結局幾つかの検査の後浩は精神分裂病の中でももっともたちの悪い破瓜型分裂病と診断された。もしももっと早くその診断が出ていたのならば、浩もあんな醜く歪んだ世界を彷徨わずに済んだのかもしれない。けれど誰もが目を伏せてしまうような精神病の世界では、出来るだけ青少年の今後の事を配慮する事で、誤診と言うのは付きものだった。

「ところで、何か必要な物はない？ 一応あなたの好きそうな本を二、三冊途中で買って来たけれど、他に思いつかなくて」

香奈さんはそう言って本をベッド脇のテーブルの上に置いた。

「いや本があれば充分です。ただ一つだけ持って来て貰いたい物は洋裁セットとそれとあと、斉藤小百合ちゃんには熊のポピーはちゃんと見つかったよと伝えてあげて下さい。彼女はポピーの事をとても心配していたから」

「ええそれは分かったわ。でもあなたまさかこのぬいぐるみを片手で縫うつもりなの？ もしあれだったら、私が代わりに縫ってあげようか？ これでも裁縫は得意なのよ」

確かに香奈さんの言う通り、ただでさえ不器用でその上左腕は包帯を巻かれた僕なんかよりも、器用な香奈さんが縫った方が綺麗に仕上がるのだろう。けれど僕はその提案に首を振った。

「いえ、大丈夫です。どちらにしろ僕は後二、三日は暇ですから。ゆっくり遣りますよ。暇つぶしの為にも」

そう言って僕は自分で縫うことにした。理由は何故かハッキリしなかった。もしかするとそれは傷付いたポピーが自分の置かれた状況に似ていた事なのかもしれない、さもなければそれはもっと前の小百合ちゃんと熊のポピーを探し始めた時から決まっていたのかもしれない。その答えは分からないが、僕はそうすることに決めた。そして次の日から僕はポピーの手当に残りの全ての時間を費やした。

僕が退院する時にはポピーもちょっとした傷跡は残していたが、すっかり元通りに戻っていた。僕は療養所に戻ると直ぐに小百合ちゃんの元に行った。彼女は僕の入院の話を聞いてこの二、三日は落ち込んで居たらしく、僕が元気な姿で現れた事を心から喜んだ。

「お兄ちゃん、大丈夫だったの？」

「ああ、ほらちゃんと元気だろ。それにポピーもこんなに元気に成ったよ」

そう言って僕はポピーを彼女に手渡した。彼女の元に戻ったポピー、それはここ何日間を感じる事の出来なかった安堵感に似ていた。それから僕たちは所々で二人だけで色々な話をする様になった。彼女はポピーの一件以来少し人を信じられない様に軽い不信神経症に成ったが、僕だけには心を許せたのか、僕と会う時はいつも楽しそうに話しかけて来た。そして僕の方もあの一件以来に体の傷では無くて心の傷を心配された。

「でも良かったわ、飯田君は大丈夫そうで」

ある時香奈さんは僕に言った。

「ええ」

「まあそうよね。これまでもあなたは色々な色々な経験をして来たんだものね。でもあの日以来小百合ちゃんはあなた以外には心を余り開かなく成っちゃったなあ。やはり彼女の年齢には衝撃的過ぎたのかな。一応配慮はしてたんだけど、こんな小さな施設でしょ。噂は直ぐに広がっちゃうのよ。それもかなり膨張されてね」

「ええ、そうですね」

「まああなた次第ってところね。一応今月からの彼女とのセッションを多めにしたレクレーションを組むことにしたから、だから彼女の事をお願いね。彼女の担当のチーフからもお願いされちゃっているから、まああなたの治療にとっても彼女の純粋な心が必要だと思うしね。だから自分の治療だと思ってやってよ」

「ええ、それは構わないですけど、ただ僕は医者でも指導員でも無ければ専門的な知識もありません。だから具体的にどうしたらいいのか」

「まああなたは特に意識しないで、普通に彼女に接すればいいのよ。特にこれだと言う事は無くて、普通に接していればいいと思うわ。あまり意識しているとかえって混乱するでしょ。だから普通でいいと思うけど」

・・・普通・・・。

確かに香奈さんは普通にと言った。けれど正直言って僕には紀子さんが死んで、この施設に入ってから普通と言うものの意味が分か

らなく成って来ていた。

僕はいつでも特に意識をした事は無かった。今までだって普通にやって来たし、これからも普通で居るつもりだった。けれどそれは何処かで普通という概念からずれて、今では薬と環境によって保たれる様に成った。俗に言う世間では僕は普通なのだろうか？ それとも異常なのだろうか？ この施設は一体何の為に作られ、何の為に運営しているのだろうか？ 香奈さんの言った普通、僕の言う普通、そして世間が言う普通、この世の中には幾つもの普通が存在している。僕は本当に普通に遣って行けるのだろうか？ そしてそんな普通と言う言葉がいつも僕を苦しめていた。

「分かりました。僕が彼女の為に何か出来る事があるのなら、僕は何でも遣ります」

自信は無かった。勿論普通の意味も分からなかった。けれどただ一つ分かっていたことは、彼女の為にもしも自分に何かが出来るのなら、それを精一杯遣りたいと言う気持ち、ただそれだけだった。

~ 怖い事ばかりだから、不安なことばかりだから
だから淋しいんだよね、だから悲しいんだよね
だから僕がずっとそばに居るよ、暖めてあげるよ
だから泣かないで
君のこと好きだよ、言葉では伝えられないけれど
君のこと好きだよ、だから僕が守ってあげる
だって僕は君のこと大好きなのだから・・・~

その日から僕と小百合ちゃんの日々は始まった。僕と彼女の間には実年齢の差は二歳だった。けれど軽い精神遅滞を伴った彼女との精神年齢の差は五、六歳近くの差があった。それはまるで兄と妹の様だった。弟や妹の居なかった僕と、兄弟の居なかった彼女、それは信頼関係だけで支え合った二人の絆だった。彼女と僕はあのポピーを探した時に見つけたお花畑によく行った。その場所は二人だけの自由な空間だった。そこにさえ居れば、束縛するものは何も無く、何一つ気を使う必要も無かった。療養所と言う場所は一見自由な場所の様に聞こえるが、実際は規則は有り、気を使わなくてはいけない人間関係もあった。けれどそこから一步外に出れば何も無く、ただ空と大地が存在するだけだった。小百合ちゃんと言う子は本当に純粋で心の綺麗な子だった。よく子供と言うと必ずしも純粋の象徴として挙げられるけれど、それには若干の誤りがある。確かに純粋な子は沢山居るが、小学生にも成ればそれは本能的な自己防衛や、

欲望を叶える為の手段となる。実際イジメ問題がその一つだろう。イジメを行う者、そしてそれを見て見ない振りをする者、そう言ったものが生きて行く為の手段に変わった時に人は大切な心を失い、偽りの心を手に入れる。そして自我が形成されていく。その点小百合ちゃんは違った。壊れやすい心を持つ続けている代わりに、純粋な心も備え持っていた。そしていつしか僕はそんな彼女の中に自分の過去を照らし合わせる様に成っていった。

紀子さんが死んでから半年以上が経った。勿論僕の心の傷がまだ癒せた訳では無い。けれどそれを少しずつ心の片隅にしまい込む事が出来始めていた。それは小百合ちゃんの純粋な心のお陰なのかもしれない、彼女の瞳は紀子さんの瞳ととてもよく似ていた。だから何だかけなげにがんばっている小百合ちゃんを見ていると、まるで紀子さんの姿の様に見えることがあった。だから必然的にそう言う姿を見ていると、自分もがんばらなくちゃいけないと言う気持ちに成る。そしてそんな僕と小百合ちゃんの関係は少しずつ変わり始めて行った。

殆ど僕たちの会話には複雑な事は余り無かった。時々僕らは彼女にギター片手に弾き語りを聴かせたり、時々彼女が僕の為に絵本を読んでくれた。二人ともその瞬間は本当に幸せだった。きっと幸せと言うモノは誰にでも与えられる最後の樂園なのかもしれない。けれど皮肉なもので、幸せと不幸せはいつでも隣り合わせにあるものなのだ。彼女の異変に気が付いたのは、秋も終わりにかけて冬の一步手前の頃だった。

その頃彼女の口から直接聞いた訳では無いが、彼女がどうやらイジメに遭っていると言う事だった。イジメと言っても極端なイジメでは無く、ただ仲間外れに成っていると言う事だ。元々僕等のセッションは十代中盤の子供達で行われることが多かった。けれど明らかに精神遅滞の彼女はその中ではひとりぼっちに成りやすい状況下だった。自閉症を伴っていた僕も実際は友達と呼べる者はそれ程居なく、その殆どが上辺だけの付き合いだったが、幼い彼女にとってはそれは致命傷となる。それに加え、周りの環境が更に彼女を孤独にさせていた。

周りのみんなも悪気は無いのだろう。みんながテレビのアイドルの話をしている中、彼女はアニメの主人公の話をし出す、そうやって来れば自然と会話は無くなり、気が付くと見えない境界線がハッキリと引かれてしまう。けれどそれが自然であり、そこには誤りと

言うものは無かった。中ではそんな彼女に積極的に接して来てくれる心の優しい女の子も居たが、そんな子達もセッションが終わればやはり自分たちの友達の外に帰ってしまう。そして悪いことにあの時以来に起こった彼女の不信神経症が、その溝を更に深いものにしてしまう。そんな悪循環の中で彼女は一人もがき苦しんでいた。僕はそんな彼女を見ているのが辛くなり香奈さんにその事を相談する事にした。

「最近小百合ちゃん、イジメか何かにあっている様な気がするんです。勿論本人は口に出して言わないけれど、何となく辛そうなのが分かってしまうんです」

僕のその問いかけに香奈さんは少し考えて、そして言葉を選ぶ様に言った。

「イジメねえ、確かに孤立しがちな所はあるわね。それにこの問題はあの頃の年代には必ずと言って起こる問題なのよ。だから自然と言えばそうなのかもしれないが、事が大きくなるとやはり問題になるわね、ただ・・・」

「ただ？」

「ただ、この問題は小百合ちゃん本人で解決しない事にはなかなか難しいのよ。勿論私達がしてあげられる事もあるのよ。例えば環境を変えてあげるとか。でもそれも結局は一時的な効果はあっても直ぐに元に戻ってしまうわ。要するに私達のしてあげられる事には限界があるの。それ以上のことは私達には出来ないし、それを彼女自身が乗り越えなければ、結局いつまで経っても本当の問題解決には成らないわね」

確かに香奈さんの言う通りなのかもしれない。けれど僕はこのまま彼女をほって置く事はとても出来やしなかった。

「僕に出来る事はありますか？ 何か少しでも協力出来ることはしたいんです」

「まあ、あなたに出来る事は勿論あるわ。けれどとっても難しい事なの、まずあなたは彼女を出来るだけ自分以外の人と接するように促すこと、けれどそこで一番大切な事は彼女にあなたが自分を見捨てたと言う気持ちを起こさせない事ね。とにかく今の彼女にとっての愛情はあなたが全てなのよ。例えば親に対する愛情や愛おしいモノに対する愛情、きっと彼女は今思春期に入ろうとしているけれど、少し怖さもあるのね。だから今あなたを失ったとしたら、まあ彼女の精神年齢では自殺を図る事は無いにしろ、失望症には陥るわね。普通の子ならそれでも対象物を変える柔軟性があるけれど、彼女の場合はそれが出来ないところがあるから本当に難しいわね。でも良

かったわ、あなたみたいに協力的で優しい人がその対象に成っていて。私からも感謝するわ」

僕はその晩彼女の夢を見た。今ではもう花が無くなってしまった僕等の秘密のお花畑。二人は横に並んで座っていた。風は冷たく僕等の間を過ぎて行く。僕は彼女の肩をほんの少し自分の方に寄せる。彼女はそんな僕に全てを委ねる。そして僕等はそんな世間の冷たい風の中で小さく震えていた。そして次の日から僕等はまた少しずつ軌道からそれて行った。

東京東亜総合病院で僕は十日間と言う日々を過ごした。その頃に成ると佐々木という刑事の尋問も無くなっていった。それは僕の黙秘権が通ったのかもしれないし、僕の身辺調査でその辺の事がハッキリしたのかもしれない。理由は分からないがとにかく佐々木と言う男はここ二、三日は姿を見せなくなった。その間バンド仲間や香奈さんが何度か僕の前に見舞いにやって来た。けれどその中の誰一人として僕の本当の理由までは分かる者は居なかった。ただ僕と小百合ちゃんの間柄を知っている者もいた。けれどそれは暗黙の了解の上、誰一人として言葉にする者は居なかった。そして小野医師も幾つかの検査を行った後、精神的ショックは治り始めていると言う結果を出した様だった。

実際僕の精神状態は不思議なくらい落ち着いていた。それは自分でも不思議な感覚だった。けれどそれは今がそうであるだけで、この先もそうだという保証は無い。紀子さんが死んだ時も最初は普通だったがある日それが異常に変わって、そして正常の意味が分からなく成った。

「君の退院の日が決まったよ。来週の火曜日だ、まあ今までの経過からするともう大丈夫だと私が判断したのだけれど、君はどう思うかね」

小野医師は言った。

「僕は正直言って分かりません。けれど保証なんていつだって無いものなんです」

保証なんて何て言うモノはいつだって無かった。ましてや幸せの保証なんてモノは。

「まあそうだと思うが、君はまだ若い。これからだって色々な経験をする事だって出来るし、沢山の幸せを手に出れるんだ」

「沢山の幸せ・・・」

「そう、沢山の幸せだよ。他の医師達は君をまた療養所に戻した方

が良いと言う意見を持っている者も居るが、私は君を普通の生活に戻してあげたいんだ。勿論今回の事件が解決した訳じゃないから警察に行く事もあると思うが、見舞いの人達の話を知ると君の選択は間違っていないようだから、すぐに解決するだろう。そうすれば普通の生活にだって戻れる。その方が君にとっても良いと思うんだが、どうかな」

小野医師の言う普通の生活。僕にとっては療養所で過ごした一年半も普通の生活だった。そこで得た幸せは沢山あった。だからこそそこで失った大切なモノも沢山あった。だから僕にとってはどちらも普通と言う概念の上では同じ事に成る。行く場所は決まっている、辿り着く場所も決まっている。そこはどんな環境下に置かれても同じ事だった。小野医師の言う普通の生活も、療養所で過ごす生活も、そしてこの拘束された病室内に居たとしても。それは一人の少女と出会ってからきっと決まっていた事なんだ。たった一人の少女と出会った時から・・・。

・・・サユリ・・・。

そして彼女との生活が僕を大きく変えて行った。

彼女（小百合）との関係が大きく変わり始めたのは、紀子さんが死んでから一年、丁度彼女と出会ってから、九ヶ月が過ぎた頃だった。

その頃僕の精神的症状は少しずつではあったが良くなり始めていた。言語障害の方も複雑な会話も何となくこなす事が出来た。そして自殺の後遺症(失望愛の後遺症)も少しずつ忘れることが出来た。きっと愛と言うのは時の流れと関係があるのかもしれない。時の流れは失望を軽くする事と同時に、新しい何かを連れてくるものでもあった。

僕は時々複雑な哲学書を読んだり、時々作詞、作曲を行ったりしていた。けれどそれと相反する様に彼女（斉藤小百合）の症状は重く成るばかりだった。療養所の職員もその事には頭を抱えている程だった。

その頃に成ると僕以外の人には全くと言って心を開かない。理由はとても簡単な事なのだけれど、解決はとても難しい事だった。彼女自身の問題だと言ってしまえばそれで済んだのかもしれない。けれど僕にはそれを放って置く事は出来なかった。そんな僕はある時彼女にその事を尋ねてみた。

「ねえ小百合ちゃん、どうしてみんなとお話しないの？」

僕のその言葉遣いははたから見るととても滑稽なものだったのだ

ろう。見た目には僕と殆ど変わらない容姿をしている女の子に対して、まるで小さな子供に接する様な言葉遣いなのだからおかしくないとするのは嘘に成るだろう。けれど現実の彼女はまだ幼かった。

「だってみんな私の事変な目で見るのよ」

「変な目で見るって、どう言うこと？」

「よく分からないけれど、私がポピーとお話しているとみんなはおかしいって言うのよ。それに男の子達は私の事いつも意味もなくジロジロ見て、ニヤニヤ笑うのよ」

まあ最初のポピーの件はどうであれ、後の男の子達のジロジロ見ると言うのは何となく分かる気がした。小百合の場合精神年齢はどうであれ、外見は明らかに大人に成ろうとしている女性の体をしていて。それに輪を掛けて小百合の容姿は美人に近かった。

「きっとそれは小百合ちゃんが可愛いからだよ。別に変な意味で見ている訳じゃ無いと思うよ。それに小百合ちゃんもみんなと仲良くしたいだろ。熊のポピーやお兄ちゃんだけじゃつままないじゃないのかな」

僕は小さな子供に言って聞かせる様に言った。けれど彼女は今の現実に満足しているかの様に言い返して来た。

「私は平気よ。お兄ちゃんとポピーが居れば平気。パパもママも居なくても平気、だって私は一人じゃ無いんだもん」

正直言って僕はその言葉に感動を覚えた。誰かに頼られる喜び、それは言葉に出来ない喜びだった。けれど僕はその言葉に満足しているだけではいけなかった。

「それはそうだけど、まあ熊のポピーは別として、お兄ちゃんとはいつまでも一緒と言う訳にはいかないかもしれないよ。勿論お兄ちゃんも小百合ちゃんの事好きだけど、でもいつまでも一緒と言う訳じゃ無いんだ。だから・・・」

けれど僕の言葉はそこから先には出てこない。一体僕は何て言ってあげるべきなのだろうか？ 僕の言葉は不完全のまま、宙を漂っていた。

「私ね、良く夢を見るの。そこにはパパもママもいるの。勿論ポピーやお兄ちゃんもよ。そしてママは言うのよ。『ねえ、いい小百合。ちゃんと良い子にしているの？ 自分よりも弱い子をイジメてはいけませんよ。小百合が良い子にしていればきっと将来幸せになれるんだから』って。だから私ね、良い子にしているの。一人ぼっちでも淋しく無いのよ。いつかママやパパに会える時まで淋しく無いのよ」

小百合ちゃんのその言葉には未来への力強さがあった。僕はそこ

まで言われてしまうともう何も言えなかった。

「そうだね」

「ねえ、お兄ちゃんは良い子は好き？」

小百合は僕の顔を覗き込むように聞いて来た。

「ああ、大好きだよ」

「ああ良かった。じゃあもしも私が良い子にしていたら、将来私をお兄ちゃんのお嫁さんにしてくれる？」

僕は頷いた。勿論この頃はそんな事は、とても小さな約束としてしか受け止めてはいなかったが・・・。

小百合はそれを聞いて喜んでいて、けれど彼女の中の好きと言う感情はまだ幼い感情にすぎなかった。

僕はしばらくは黙っていた。言葉というものは風のようなモノで、いつだってその場をただ通り過ぎて行くだけのモノだったのだから。

僕が療養所に来てから一年が過ぎ、そして残される日は後半年と成った。それは初めから決められていた訳では無かったが、僕の治療の進行状態から見て妥当の線だと言う事を香奈さんから聞かされた。

「ねえ、飯田君。一応あなたの経過を見て今年の夏頃には退院と言う声があるんだけど、君自身の意見はどうか？」

「僕の意見ですか・・・。正直言って分かりません。僕自身の問題もあるとは思いますが、小百合ちゃんの事を考えると今の僕にはどうしたらいいか」

「まあそうね。やはりその事が心配だったのか。でも安心して欲しいの。彼女も一応彼女の叔父さんにあたる人、確か彼女のお父さんの弟だったかしら、まあその辺の事はいいわ、それでね、とにかくその叔父にあたる人が、是非うちで引き取りたいとこの前の面談の時に言ってくれたのよ。まあ身寄りが無かったと言う事が一番の心配だったのだけれど、たまたまその叔父夫婦には子供も居なく、それで彼女を自分の娘にとってね。彼女の病状の問題は残るけれど、それは療養所に居ても同じ事ね。逆にこの療養所内で起こった出来事が原因だから、また別の環境下の方が症状も和らぐと言う意見もあるくらいなもの。だから彼女の場合、来月には退院出来そうなの。まああなたの場合は言い難いけれど、自殺未遂と言う事があるから直ぐにと言う訳にはいかないけれど、半年後位にはどうかなって」

僕は自分の事よりも小百合ちゃんの事の方が気になった。

「小百合ちゃんが退院ですか？ その事彼女は知っているんですか？ それに彼女はまだ十分に回復してないじゃないですか」

「いやまだ急な話だったから、本人にはまだよ。それに彼女の場合は精神遅滞と言っても軽いものだから、普通学級だけとは行かなくても、情緒障害学級と兼ねながら通えば、充分普通学級でやっていけるのよ。彼女にとって大切なのはこの先の事じゃ無くて、今まだ義務教育のうちに世の中に対応出来る心が必要なのよ。彼女はこのまま行けばおそらくここから一生出られなくなる可能性だってあるの。だから今が一番良い時だと思うの。それに飯田君とこれで永遠にさよならする訳じゃ無く、月一回はここにも顔を出す事に成るし、確か叔父さんの家も東京都内だったから、退院してからだって簡単に会えるのよ」

香奈さんの言う事は正論だった。それに対しては僕は何も言えない。けれど彼女は果たしてそれにうんと答えるのだろうか？ 僕との離ればなれの生活を受け入れられるのだろうか？ だけど正しい事はいつだって僕等の気持ちなどとは関係なく進められるものだった。

彼女が退院する前の晩、僕と彼女はこっそり施設を抜け出して、あの二人だけの秘密の花園に行く事にした。まだ離ればなれに成ることを実感出来ない二人、それは別れの前夜と言うよりも初めの一步に似ていた。

「寒いね、お兄ちゃん」

「そうだね」

小百合は僕のコートの中で縮こまって居た。僕はそんな小百合を優しく抱きしめた。

「ねえ私、遠い所に連れていかれるの？」

小百合は不安そうに僕に言った。

「そんな事は無いよ。隣の県だからね」

「隣の県？ それは歩いて行ける所なの？」

「歩いては無理だけど、車で行けば一時間もしないで着くよ。それに後半年もすれば、お兄ちゃんもここから出て、小百合ちゃんの家の方に行けるんだよ」

「そしたらまた会えるの？」

「ああ、会えるよ。いつだって好きな時間に好きな場所で会えるよ。ここの様に規則も無ければルールも要らないんだ。小百合ちゃんが会いたいと思えば直ぐにだって会えるんだよ」

「本当に？」

「ああ、本当さ。別々の場所に居たって小百合ちゃんがお兄ちゃんに会いたいと思っていいたら、お兄ちゃんは空を飛んでも会いに行く

よ。約束する。あっそれとこれお兄ちゃんの宝物なんだけどこれを小百合ちゃんにあげるよ。だから淋しいときはこれを見て元気を出すんだよ」

僕はそう言って自分がいつもしていたペンダントを小百合ちゃんの首から掛けてあげた。

「これ大切にするね。じゃあお返しでこの熊のポピーをお兄ちゃんにあげる。これはママから貰った大切なモノなの。だけどお兄ちゃんにこれあげる。私はこれからはお兄ちゃんに貰ったこのお守りを大切に作るから、お兄ちゃんもそのポピーを大切にしてくれ」

「いいの？ ポピーは大切な友達なんだろう？」

けれど彼女はキッパリと言った。

「いいの」

そして僕にポピーを手渡した。

「じゃあとっても大切に作るよ。でもいいかい、このポピーはいつでも小百合ちゃんに会いたがっているんだから、いつでも会いに来なよ」

小百合は少し僕の言っている言葉の意味を理解しようとしていた。そんな中僕には何故か寂しさが溢れ出して来る。それは今までは当たり前前の事だった。会いたい時に小百合はそばにいて、会っていると言う事が当たり前前の事だった。けれどこれからはそれが当たり前では無くなる。振り返ればこの一年間は僕にとって本当に不思議な一年間だった。紀子さんが死んだ時は絶望の淵に居た。そしてこの施設で幼い一人の天使に出会った。自分の殻に閉じこもって居た僕と、陽気で元気で外交的な彼女。そしてその立場はある時逆転した。心を閉ざした小百合、それは小さな砦を必死に守る子供の様だった。そして僕等は愛とはまだとても呼べなかったけれど、いつしか信頼関係だけが頼りに成っていた。お互いを思いやる心、ただそれだけが僕等の最後の鍵だった。いつしか僕の頭の中はここ一年間近くの思い出が走馬燈の様に駆けめぐっていた。そして僕は小百合の今にも壊れそうな体をほんの少し強く抱きしめた。微かに感じる小百合の温もりを一生忘れない様にと……。

～僕は君の温もりの中で夢を見る 君は僕の腕の中で夢を見る

二人だけの小さな幸せと言う夢を

だけど形を求めてはいけないよ だって僕等はいつだって自由な夢追い人なのだから

だから僕は君の手の中で幸せを願うんだ そして君は僕の手の中で幸せを願うんだ

だって僕等が出会えたのは運命でも無ければ定めでも無いのだから

だって僕等が出会えたのは 僕は君と そして君は僕と
ただずっと一緒にいたい

たったそれだけの事なのだから・・・～

小百合ちゃんの居なくなった日々は僕にとっても、とても儂い日々だった。いつものレクレーションにも、そしていつものセッションにも彼女は居なかった。ぼっかりと空いた僕の心は、ただ残された日々を埋めるだけのものにしか成らなかった。だから僕は一ヶ月に一回の彼女の訪問を心待ちにしていた。けれど一ヶ月経っても彼女は訪れなかった。僕はその事を香奈さんに聞いてみた。

「あの香奈さん。あれから一ヶ月半経つけれど、小百合ちゃんの一ヶ月に一回の訪問はどうなったのですか？」

僕のその問いに香奈さんはためらってから言った。

「その事なんだけれど、向こうの叔父さんの方で状態が良くなったから、もう大丈夫ですと言われて、それっきりのよ。まあ本当にそれならば良いのだけど、あれだけ症状が重かったのだから、環境が変わったからと言ってそう簡単に良くなるとは思えないのだけだね」

香奈さんはためらいがちにそう言った。

「香奈さんは小百合ちゃん本人とは話をしたのですか？」

「いえ、それがね。何だかおかしいのよ。彼女と話がしたいと担当のチーフが彼女の家に電話かけたら、彼女はもう大丈夫ですからの一点張りって事なのよ。まあ身内の叔父さんにそう言われるとこちらとしても手の着けようが無いのよ。けどね、良くあることなのよ、こう言う事って。だって施設が施設でしょ、ここで過ごした事がある意味みんな忘れたいのよ。過去に療養所に居たと言う肩書きをね。だから余り強く言えなくて」

香奈さんの言っている意味は分かった。ある意味それは確かに誰にでも当てはまるものなのかもしれなかった。けれどあの小百合ちゃんまで、僕と過ごした事を忘れたがっていると言う事までは認められなかった。

「そうですか。それじゃあ僕の方でコンタクト取ってみます。僕の方も彼女と話したい事がありますから。だから連絡先を教えてくださいませんか？」

香奈さんは本当はプライバシーの問題もあるから、本人の承諾が無ければ教えられないけれど、あなたと小百合ちゃんの場合は特別

ね、と言って連絡先教えてくれた。

彼女の住んでいる所は田園調布にほど近い世田谷区奥沢に住んでいた。僕はとりあえず彼女の家に電話を掛けてみた。

「あのもしもし、施設で小百合さんと一緒だった飯田と申しますが、小百合さんはご在宅でしょうか？」

僕のその問いに電話の向こうの小百合ちゃんの叔父の斉藤啓太は素っ気なく答えた。

「小百合は今、誰とも話したく無いと言っています。だから取り次ぐわけには」

「あの飯田と言ってくれば、きっと彼女も電話に出てくれると思うんですが」

けれど僕のその言葉もこの斉藤啓太の前では無意味なものだった。結局僕は小百合ちゃんとの電話の取り次ぎをして貰えずに電話を切った。

一体彼女に何があったのだろうか？ 取り次ぎたくないと言うのは彼女の本当の気持ちなのだろうか？ 少なくともそんな事はありません。だとすると何故斉藤啓太はそこまで彼女との接触を拒むのだろうか。その理由は分からない、けれど彼女の本意で無いのなら僕は何としても彼女との連絡を取りたかった。だから僕は彼女宛に手紙を書くことにした。

小百合ちゃんへ

その後の調子はいかがですか？ お兄ちゃんとポピーは元気でやっています。小百合ちゃんは元気でやっていますか？ 普通の生活にもうなれましたか？ 新しいお友達が出来ているといいのですが。お兄ちゃんもあと三ヶ月で退院です。そうすればまた小百合ちゃんと一緒にお出かけ出来るね。早くその日が来るのを楽しみに待っています。小百合ちゃんが元気に成れることをいつでもいっています。

飯田 和幸

僕のその短い手紙はまとまりの無いものだった。けれどそれは僕の精一杯の気持ちでもあった。

そして僕はその手紙を施設内のポストに投函した。数日間は返事の無い日々だったが、それが数週間変わる頃には僕の淡い期待は手の届かない場所に成った。僕の中で彼女に一体何があったんだと言う気持ちは大きくなるばかりだった。勿論新しい環境下で新しい友達が出来て僕の事を忘れる程楽しい日々を過ごしているのならそれでもいいと言う気持ちもあった。けれどその可能性は限りなく少

なかった。香奈さんの話では何度か面談に来た時の叔父さんと叔母さんの印象は良いものだったし何処かの大会社社長をしている叔父は社会的地位もあると言う事だった。だったら一体何故？ けれどその答えは分からないまま、いたずらに時は過ぎていった。そして彼女との連絡が取れなくなって半年が過ぎた時、僕の退院の日は訪れた。

「本当に良かったわね、退院出来て」

香奈さんは嬉しそうに退院のお祝いを言ってくれた。

「ええ、でもこの一年半のギャップを考えると先が思いやられますよ」

「何言ってるの、あなたはまだまだ若いよ。それくらいのギャップ、あつという間に取り戻せるわよ。それより退院したら会いに行くんでしょ、彼女の所に」

「一応、あの後連絡も無いので落ち着いたら会いに行くつもりです」

「そう、じゃあもし会えたらよろしく言って置いてね、職員一同心配しているんだから」

「ええ、それはちゃんと伝えます」

「それと何があっても命は大切にしてくださいね。これから先、もっと辛いこと沢山あるかもしれないけれど、その先にはあなたもまだ知らない幸せが沢山あるんだからね」

香奈さんは最後までいい人だった。けれど僕はその気持ちに曖昧に返事をした。正直言って分からないと言うのが本音だった。もしもまたあんな事に出会ったとしたら、僕は果たして生を選べるのだろうか？ それは永遠に分からない答えだった。けれど僕は晴れて療養所を退院する事が出来た。

久しぶりに感じた自由な風、それは一年半ぶりの風だった。僕は振り返って見た。一年半と言う思い出は追憶と成って僕の心に刻まれた。確かに香奈さんが言っていた様に、ここに居た記憶を直ぐにでも消したい人も居るのだろう。けれど僕は違った。僕はここに来てそしてここで出会った人達の事を大切な思い出として残したかった。何故ならそれは僕が歩んできた人生の一部なのだから。そして僕の人生は次へと進んだ。

まず僕がしなくては出来なかった事は、高校への入学だった。僕は中学三年を卒業して直ぐに施設に入院した。その時、一応は合格していた学校があったのだけれど、その後の予期せぬ出来事によって僕はその学校の入学を諦める事に成った。従ってその時の僕は何

処の高校にも属さない人間だった。勿論このまま就職と言う手もあったが、僕は仲間達の居る高校への編入試験を選んだ。年齢で言うならば僕は高校二年生の一学期が終わった所だった。施設の中で僕は勉学に励んでいた事もあり編入試験に対しての不安は無かった。むしろそれ以上に不安があった事は、高校生活自体にあった。僕は一年半という間、別の世界で過ごした。それはこの現実とはあまりにもかけ離れた世界であり、ごく普通の日常生活とは大きなギャップがあった。勿論戸惑う事は数えきれなかった。制服を着ること、授業を受ける事、そしてクラスメートの輪の中に入る事。そんなもの一つ一つが僕にとっては大きな障害と成る。けれどそんな僕を支えてくれたのは、バンドのメンバー達だった。

僕のバンドのメンバーは全員が都内の同じ高校に通っていた。そして僕も二学期からその仲間に入る事に成った。クラスこそ違ったものの、中休みや昼休み、そして放課後には仲間達は僕の元に集まって来てくれた。そんな仲間達が僕にとって唯一の支えだった。僕はそんな日々の中で少しずつ自分を取り戻して行った。そしてそんな自分を取り戻して行く生活の中で思い出すことがあった。それが小百合ちゃんの事だった。

小百合ちゃんと連絡が取れなくなってから半年以上の月日が経った。その間勿論僕の頭の中には彼女の存在はあったが、一度として会いに行っていないと言うのが現実だった。一番の理由は彼女の叔父に電話で断られた事だった。彼女の叔父が言う様に本当に彼女は僕と会うことを拒んでいるのだろうか？ あの施設の中ではあんなにお兄ちゃんお兄ちゃんと僕に言い寄って来てくれたのに。あの施設での日々の事を思い出すと、どうしても僕には彼女の叔父の言うことを素直に受け止める事は出来なかった。そして高校生活に少しずつ慣れて行くにつれて、彼女にまた会いたいと言う気持ちも少しずつ湧き始めてきた。僕はそんな気持ちを抑えきれずに、ある日彼女に会うために彼女の住んでいる町に足を延ばしてみる事にした。

彼女の住んでいる町は僕の隣の区にあったので、行こうと思えば気軽に行ける距離だった。僕は学校帰りにちょっと寄り道気分で彼女の家を探した。香奈さんから貰ったメモ紙の住所を頼りに行くと彼女の家は東急東横線の田園調布駅から歩いて五、六分の所にあるはずだった。僕は駅前に広がるロータリーとその先に続く高級住宅街を横目にしながら、彼女の住む奥沢に向かった。線路沿いに渋谷方面に少し戻ると大きな環状道路、環状八号線に出る。そしてその環状八号線を渡ると彼女の住む奥沢はあった。僕は環状八号線を渡

り、メモ紙に殴り書きに書かれた住所と電柱に書かれた住所を照らし合わせた。メモ紙の住所が正しければ彼女の家はこの一角にあるはずだった。堂々と立ち並ぶ高級住宅地、どれもこれも個性的な家並みだったが、逆に個性が集まり過ぎたその一角ではそんな個性的な家々もみな同じに見えた。それはまるであの施設の中で僕等が当たり前で居られた様な感覚に似ていた。僕は少し傾きかけた空の下で小百合ちゃんの家を探した。そして探し始めて五分くらい経った頃だろうか、彼女の家は傾きかけた太陽に丁度逆光するようにポツンとあった。

白くて大きな二階建ての家、そしてその下には駐車場があり、二台の高級車が止めてあった。見た目には何不自由無いその家の表札には、確かに斉藤啓太と書かれていた。僕はもう一度その家を良く眺めて見た。

逆光で少しオレンジがかったその大きな家にふさわしく大きく立派な玄関が階段越しにある。そして庭に大きな桜の木がありその枝は二階のバルコニーまで伸びていて、そのバルコニー越しに二つの部屋が見えた。一つの部屋は今流行のガーデニングだろうか、バルコニー越しに幾つもの鉢植えが添えてあり、その鉢からは赤や青や黄色の花が咲いていて、部屋中を色とりどりの色彩が飾っていた。僕はその時ピンと来た。もしかするとその部屋が小百合ちゃんの部屋ではないのかなって。子供の居なかったこの家族に養子にきた彼女はきっと分厚い歓迎を受けたのだろう。だから花好きの彼女は花に囲まれた部屋で幸せに育てられているのだろうと。僕はその部屋を少し遠目で見てみた。けれど白いレースのカーテンが引かれていたので、中の様子までは分からなかった。そして僕の視線は隣の部屋にも止まった。隣の部屋はガーデニングされた部屋とは対照的で、まるで閉ざされた部屋の様な印象があった。重そうな雨戸を閉め切っていて、中の様子は勿論、窓越しの雰囲気も分からなかった。きっと物置かもしくは両夫妻の寝室にでも成っているのだろう。その部屋はこの世の光から全てを遮る様に重い扉で閉ざされていた。その他に目に映るものは何もなかった。玄関脇の小窓以外は白い壁しかなかった。僕は襟を正して正面、表札脇のインターホンを押した。しばらくするとノイズの混じった音の中で声が聞こえて来た。

「はい斉藤ですけれど」

それは女性の声だった。きっと叔母にあたる人なのだろう。けれど何故かその声は少し悲しそうにも響いていた。

「あの、すみません僕は飯田と言う者なのですが、小百合さんに用事がありまして、小百合さんはご在宅ですか？」

僕はもしも家の中に小百合ちゃんが居ればその声が聞こえる様に、少し大きな声で言った。けれどその僕の願いは直ぐにかき消された。

「あの、小百合はまだ帰って来て無いんです」

「まだ学校という事ですか？」

僕がそう聞き返した時に二階の窓から微かな音が聞こえた様な気がした。けれどそれは一瞬の事で確かなものでは無かった。

「あっ、ええそれじゃちょっと、そう言う事ですので」

叔母さんは慌てる様にインターホーンを切った。僕はもう一度耳を澄ましてみた。けれどインターホーン越しからも、そして二階の窓からも、もう二度と音のする事は無かった。僕は時間的にも少し余裕があったので、彼女の家の前で彼女の帰宅を待つ事にした。

腕時計の針は四時を過ぎていた。僕は角に体が隠れる様に立ち、彼女の家を眺めてみた。先ほどより更にオレンジがかった彼女の家はどことなく異様に浮き出て見えた。それから待つことどれくらいの時が経ったのだろう。辺りにはすっかり夜のとぼりが降りて暗闇に包まれた。そんな中、街灯の明かりと家の窓から漏れる光だけが、ぼんやりと辺りを照らしていた。僕が彼女の家の前で彼女を待ってから彼女の家の前に初めて変化があったのは、それから更に数時間経った後の事だった。

何処から現れたのだろうか、彼女の家の前に一台の黒塗りのハイヤーが止まった。そして運転手らしき人間が後部ドアを開けて何かを言った。そして中からは施設で何度か見たので間違いない、斉藤啓太本人が出てきた。そして運転手に何か言って家の中に入って行った。僕は時計の針を見た。時計の針は既に九時を指していた。そして僕は大きな溜め息をついた。もう九時なら彼女が帰ってくるはずが無いと言うのが、その理由だった。きっと夕方の時にはすでに彼女は家の中に居たのだろう。今思えばそう考えるのが妥当なところだった。僕は仕方なしに帰ろうとした時、部屋の電気がついた。それは雨戸の閉め切ったある方の部屋だった。雨戸の隙間から微かに漏れる部屋の明かり、さすがに中の様子までは分からなかったが、人影が動くのが見えた。それからしばらくしてまた物音、それは夕方聞いた時よりは小さな音だったが、確かに続く音だった。まるでその音は永遠に繰り返される音の様に僕の耳には入って来た。僕がその音に耳を傾けていると、背後から僕の背中を叩く者が現れた。僕は驚いて振り返った。そこには懐中電灯を片手に持った警察官が立っていた。

「もしもし、おたくこんな所で何やってんの？」

警官は明らかに怪しそうに僕の顔を覗き込む。

「あっ、いえ、別に・・・」

「別になって、すみませんがおたくは何をしている方なんですか？」

「何をって、僕は別に」

警官も懐中電灯の明かりの中に僕の制服姿が写ったのだろう。それを確認すると、そのぶっきらぼうだった言い方を改めた。

「君は高校生か、もう九時過ぎだぞ、そろそろ家に帰らないと。それともここに居なくてはいけない理由でも？」

「いえ、理由なんて」

確かに僕にはここに佇んでいる明白な理由は無かった。僕は仕方なく警官にそう言ってその場を離れる事にした。そして僕は帰り道の中一つだけハッキリした事があった。それは小百合ちゃんが僕に会いたくないと言う事は、彼女自身の言葉では無かったと言う事だった。それは今回の事でハッキリ分かった。それがハッキリ分かってから僕は度々この場所を訪れる様になった。

時にはそれは日曜日だったり、時にはそれは学校の終わった放課後だった。けれど彼女の姿は一度も目にすることは無かった。その間僕は何度も手紙を書いた、けれど返事はそれが当たり前かの様に返って来ない。だから僕はある日意を決して学校をサボり平日の朝から彼女の家に行くことにした。

その日は朝からいい天気で彼女に会うには絶好の日だった。僕はいつもの様に家の角に隠れていた。彼女の家の前に最初に変化があったのは七時半頃だった。中から大きな黒いビニールのゴミ袋を持って叔母らしき女性が現れたが、ゴミをゴミ捨て場に捨てるとすぐに家の中に消えた。それから次に変化があったのは八時頃だった。彼女の家の前にこの前と同じように黒塗りのハイヤーが止まった。中から出てきた運転手は玄関のインターホーンを押した。しばらくすると斉藤啓太が玄関に現れ、そして車に乗り込み消えた。それから何も起こらなかった。時計の針は八時半を過ぎた、普通に考えればそれは学校の登校時間だった。けれど彼女の家の前には小百合ちゃんの姿はいっこうに現れない。今日は休みかなと言う疑問も浮かぶけれど、ここ何回かの訪問の事を考えると家から外に出ていないと言う方が当てはまった。彼女の病気はやはりまだ治っていなかったんだ。それは僕が最初に思った考えだった。やはりあの状態で外に出すにはまだ早過ぎたんだ。もう少し療養所で療養するべきだったんだ。けれど彼女は退院してしまった、彼女の意志とは関係ないところで。僕は何とか彼女への接触を図ろうとした。けれどなかなかいいアイデアが浮かばない。普通に訪問するんじゃ断られるの

は目に見えていた。では誰かのふり、例えば電気屋やガス屋、けれど僕はそんなに嘘が得意ではなかった。結局良いアイデアは浮かばないままただ時間だけが無情に過ぎていく。そして三ヶ月が過ぎた頃、僕はある事を実行する事になった。

その日はライブハウスでライブを久しぶりにやった日の事だった。

僕等はライブが終わり打ち上げ会場の居酒屋に来ていた。居酒屋に来ていたメンバーは僕等のバンドのメンバーとそして僕等のバンドのファンの女の子達だった。僕等は軽くお酒を飲んだ。そしてメンバーの一人太田公彦が言った。

「なあ飯田。飯田はどの女の子がいい？」

公彦のその問いに僕は戸惑った。

「どの女の子がいいって、俺は興味無いよ」

僕のそのぶっきらぼうな言い方に、公彦は心配そうに言った。

「なあ飯田、まあ紀子さんが死んでからもう二年近くも経つんだ、そろそろ忘れてもいいんじゃないか？ まあお前の気持ちも分からなくはないが、死んでしまった人の事をいつまでも引きずっていてもしょうがないんじゃないかな」

「いや、俺は別に紀子さんの事がどうのこうのって言っている訳じゃないんだ」

「じゃあ、あれか？ もしかして他に好きな人でも出来たのか？」

「好きな人かは分からないが、そんな所かもしれないな」

僕のその答えに公彦は少し喜んでいた。正直言って公彦は僕がああ紀子さんと駆け落ちをした時からずっと僕の事を心配していてくれたのだ。だから僕がああ事件から立ち直った事がとても嬉しかったのだと思う。

「そうか、そう言う人が出来たのか。なんだ心配して損したな」

笑いながら言う公彦の笑顔は安心に満ちていた。それから僕等は何杯かのお酒を飲んでそれぞれの帰路につくことになった。メンバーはそれぞれの気に入った女の子達と何処かに消えていった。そして残った僕と公彦だけは別の店で飲み直すことにした。

街から少し離れた静かなショットバー、僕は別として公彦は手慣れた様にメニューを注文した。そんな公彦を見るとこんな所でも一年半のギャップを感じさせられた。そして注文し終わると、公彦は改めて聞いてきた。

「さっきはみんなの前だったから聞き辛かったけど、一体誰なんだお前の好きな人は？ 俺達の学校の人間か？ まあ別に言いたくないければ無理に聞かないが、ただ気になってな」

公彦のその言葉には興味本位的なもの無く、優しさがあつた。
「いや学校の間人じゃ無い。それにまだ恋と呼ぶほどのものじゃ無いんだ」

「そうか、でも何か俺に協力出来る事があるんだつたら言ってくれよ。出来るだけ力に成りたいからな」

僕は目の前に置かれたソルティードッグを飲んだ。そして少し考えてから結局公彦にありのままを素直に話す事にした。それは助けを求めたかったのかもしれない、もしかすると誰かに言うことで開放されたかったのかもしれない、正直言って僕には分からなかったが、公彦にその全てを話した。まだ恋とも愛とも呼べない小百合ちゃんの全てを。そして公彦は親身に成って僕のその話を聞いてくれた。同情もしてくれた。結局僕は全てを話した事によって今まで抱えていた重荷が少し軽くなるのを感じた。

「そうか、正面から行ってもダメか。でもお前の話を聞いている限りでは、その小百合と言う女の子はきっとお前に会いたがっているはずだよ。多分その家に問題がありそうだな」

「やっぱりそう思うか。でもそれを確かめる手が無いんだ」

「拉致、監禁って訳じゃ無いから警察に言ってもな。まあ最後の手段は強行突破しかないかもな」

「強行突破？」

「そう強行突破。強行突破と言っても強引に押し込むって訳じゃなくて、こっそり部屋に忍び込むとかな。まあどっちみちばれたら不法侵入で捕まるけどな」

ちょっぴり冗談めいて言う公彦の提案、けれど僕にはそれは本当に残された最後の手段に感じられた。今思えばそれは冗談で終わらせれば良かったのかもしれない、笑い話で終わらせれば今でも笑っていたのかかもしれない、けれどその時の僕にはそれを冗談で終わらせる事は出来なかった。その結果僕は東京東亜総合病院に入院する事に成った。けれど僕は今その事に後悔はして居なかった。何故ならその時に決めた決意は永遠に続くものなのだから・・・。

~ 例えば君と出会わなければ僕は笑っていたのかかもしれない
例えばそれが愛で無かったとしたならば僕は笑っていたのかかもしれない

けれど僕は君と出会いそして僕はそれを選んだ

例えばこの長く続くトンネルの先が崖だったとしても

僕は君と一緒に歩いて行くのだろう

だって君は例えば僕が死んだとしたらきっと僕の為に泣いてく

れるから

だから僕は君の為にその全てを受け止めよう

だって僕等は命よりも大切なモノを知っているから

だから僕等はいつでも一緒なんだね

この命の終わる場所まで・・・～

僕は公彦と別れた後、一人で街を彷徨っていた。答えは決まっていたのに、いざ実行に移そうとすると人は彷徨うものなのだ。時計の針は十時を指そうとしていた。決行するのは別に今日じゃ無くても良かったのかもしれない。けれどお酒の酔いと決心のある時に実行するのが一番いい方法だった。結局僕は実行するという答えに彷徨った末に辿り着いた。そして僕は彼女の家に向かった。僕等がライブをしたのは自由が丘だったので、彼女の家は目と鼻の先だった。僕は彼女の家まで歩いて行く事にした。僕が歩き始めて十五分程で僕は彼女の家に向き着いた。

彼女の家周りはさすがに閑静な高級住宅街と言う事もあって静まりかえっていた。僕は彼女の家前で深呼吸をしてそして彼女の家前庭に手をついた。彼女の家前庭の所にはセコムステッカーが貼ってあったが、酔っていた僕には不可能というものは無かった。慎重にやれば出来るんだ、僕等はいつだってそう教えられて来た。僕はそっと体を塀の上にすり上げた。家の中には変化が無い、きっとセコムのセンサーは塀には仕掛けられてはいないのだろう。僕は慎重に庭の桜の木に飛び移った。多少の音はしたものの特に怪しまれる事は無かった。僕はゆっくりと木の枝を登り始めた。そして一個目の難所、雨戸の閉まっている部屋の前を通り過ぎなくては行けない。部屋の窓からは明かりが漏れていた。一步間違えればすぐに気が付かれてしまうだろう。僕はちょっと慎重にするためにその窓の手前で静止する事にした。窓の中の様子は相変わらず分からないが気配だけは充分感じられた。その気配は何だかゾクとする程殺気だったものだった。そして微かな音が聞こえる。その音は肉と肉がぶつかり合う様な音と、何かが軋む様な音だった。勿論僕にはその音の正体は分からない。けれどその音は決して感じのいいものでは無く、不快な音だった。僕はその音が止むまでしばらくその体制で待つことにした。幸いな事にその場所は通りから丁度死角に成っていて、もしも仮に通りに誰か来ても僕の姿は見えなかった。それから何十分が過ぎた頃だろうか。その音がいったん激しくなって、それから消えた。そして中からは男性の溜め息と声が微かに聞こえた。

「良かったぞ、小百合」

僕は一瞬固まった。その男（斉藤啓太）は確かに彼女の名前を言った。そして良かったぞとも、一体啓太の言う良かったと言うのは何なのだろう。そして一体この部屋の中では何が行われていたのだろうか？ 想像は疑問を超えていた。僕の頭の中は最悪な事を想像していた。きっと人間は弱い生き物だから最悪を想像していながら、それと同時にそうで無い事を祈っているものなのだ。僕は最悪の想像を打ち消そうとしながらその時を待った。そしてその時は何分も待たないうちに訪れた。中からドアを開ける音が聞こえたかと思うと部屋の電気が消えたのだ。窓越しに僕は中の状況を伺った。人の気配が微かに感じられる。それは先ほどの殺気立った気配に比べ穏やかさがあった。けれど雨戸を開ける事は出来なかった。もしも雨戸を開けてセンサーでも反応したら、すぐに警備員が駆けつけるかもしれない。それに中に居るのが小百合ちゃんと言う保証はまだ何処にも無かった。

僕はそっと雨戸の隙間から中を覗き込んでみた。けれど見えるものは薄明かりに照らされた天井だけだった。僕の心臓は高まる一方だった。悪い想像だけが一人歩きし、そして加速度的に増幅されていく。迷っている暇は無い、雨戸越しの僕の姿は死角から外れて通りからは丸見えだった。僕は一か八か小さく声を掛ける事にした。もしも違ったとしても今更失うものは何も無い。もしもダメでもその時は強引に中に入って小百合ちゃんを探すだけの事だ。

「小百合ちゃん？ ねえ中に居るのは小百合ちゃんなのかい？ もしもそうだったら小さく返事をくれないか？ 僕はお兄ちゃんだよ、施設で一緒だったお兄ちゃんだよ」

僕は運を天に任せて小さく耳を立てた。そして中からは小さく窓を叩く音が聞こえて来た。それは間違いなく小百合ちゃんのものだった。

「そうかやっぱり小百合ちゃんなんだね。お兄ちゃんね、ずっと小百合ちゃんに会いたかったんだよ」

その僕の言葉にやはり中から窓を叩く音が聞こえて来た。そしてそれは小百合ちゃんも僕に会いたかったと言う意志表示でもあった。けれど僕には次の言葉が思いつかなかった。会いたい気持ちはあっても会う術が無い。こんなに近くに彼女を感じるのにその距離は絶望的に遠い距離に感じられた。そして僕は思考錯誤の上にある決心をした。僕は思いきって雨戸開ける事にした。ゆっくりと慎重に雨戸を開ける。幸い雨戸にはセンサーらしきものは付いていなかった。雨戸を完全に開けると薄いレースのカーテンが掛かった窓が現れる。

けれどその窓にはハッキリと分かるセンサーが付いていた。そして僕の目の中にはカーテン越しに窓の中の様子が入って来た。その光景は僕の心に痛いほどの傷跡を残すことに成るとは知らないままに。

月明かりに照らされた殺風景な部屋の中、ただシンプルなベットが一つ置いてあるだけで、ぬいぐるみも無ければ花の一つも無かった。それはまるで拘束された留置所の様だった。そしてそんな何も無い空間は幼い小百合にとってはあまりには残酷な空間だった。そして僕の心を一番傷付けたのはその彼女の姿にあった。

僕のあげたペンダント以外、一系まとわぬその姿は僕の最悪の想像そのものだった。月明かりに照らされた発育途中の乳房、そして暗闇に隠れた陰部は今さっきまでの痛々しい傷跡の様に、白い液が陰毛の周辺に散らばっていた。けれど彼女はその事実を理解していないのか、僕の顔を見て嬉しそうにしていたが、心の潜在意識の何処かでは傷付いたのだろうか、声は出せない様子だった。もう僕に迷っている暇は無かった。彼女をこの地獄の様な生活から救わなければ成らない。僕は小さな声で彼女に服を着る事を言った。彼女は床に散らばっている服をかき集めそしてそれを着た。その間僕の鼓動は一段と早く成っていた。それは誰かに発見される事では無かった。むしろ誰かに発見され警察でも呼んで貰った方が楽だったのかもしれない。そうすれば全てを話して彼女を救う事だって出来たのかもしれない。けれど現実はそんなに甘いものでは無い。それは施設を出たと言うレッテルを持っている僕等はいつでも実感させられるものなのだ。彼女は着替えを済まし、また窓の所にやって来た。けれどやはりここからはなかなかいいアイデアが浮かばない。もしも仮に窓を開けて彼女を連れだしても、彼女を背負ってこの木から下に降りるには多少の時間がかかる。その間に中の住人に気付かれて捕まってしまうのがおちだ。他にアイデアとしては僕がおとりに成っているうちに彼女が一人で逃げ出すと言うこと、けれど幼い彼女にはそれも無理な事だった。ここまで来て僕は息詰まった。やはり一人では無理なのだ。僕はそんな自分を悔やんだ。こんなに彼女の事を想っているのに何一つ彼女の為にしてあげられないことを。僕の流す涙は彼女の心に浸透したのだろうか、彼女もそんな僕の為に涙を流していた。そして僕は彼女にまた明日必ず迎えに来るからと言って別れた。雨戸を静かに閉める時彼女の目の涙が僕には忘れられない記憶と成ったが、全ては明日にと言う僕の決意の中に静かにしまい込んだ。そして僕は彼女の家を後にした。

次の日は僕は公彦に全てを相談した。

「本当に勝手な相談何だけど、公彦がおとりに成ってくれている間に僕が彼女を連れ出すと言う計画なんだけど」

公彦は本当にそんな方法で大丈夫なのかと言ったが他に良い方法が見つからずに最後には快く引き受けてくれた。そして僕等は十時に田園調布の駅で待ち合わせ事になった。

僕は幾つかの簡単な着替えと熊のぬいぐるみのポピーをデイバックに詰めて田園調布の駅に向かった。そして十時に成ると公彦はカワサキGP-Xと言うバイクに乗って田園調布に現れた。

「逃走するのに足が無いといけないだろう」

公彦は笑ってキーを僕にくれた。そして更にこう言った。

「もしも仮に俺が捕まっても、お前は絶対に逃げきるよな。二人で捕まっちゃ全く意味が無いからな」

僕はそんな公彦の気持ちが痛いほど嬉しかった。そして僕等は彼女の家に向かった。

彼女の家は一層静まりかえっていた。運がいい事に彼女の部屋の電気は消えていた。そして僕と公彦は昼間練った計画通りに実行した。

まず僕が彼女の部屋の前まで行く、そしてその時公彦は一階の表の庭に廻って石で窓を割る。それからが計画の本番だ、窓を割った公彦は庭を横切り裏の玄関のドアをひたすら叩く、そして家中の人がそっちに気を取られている間に僕は小百合を窓から救って、そして桜の木を降りて逃亡をする、それから公彦も逃亡をする。足の速さには自信のある公彦はギリギリまで注意を引いてくれるだろう。それは僕等が逃げ出すには十分な時間だった。

僕はとりあえず昨日と同じ段取りで桜の木を登った。そして雨戸を静かに開けて彼女に目で合図を送り、下に居る公彦にも合図を送った。公彦はその合図を受け取ると表に向かった。そしてしばらくするとパリンと言う窓ガラスの割れる音が聞こえて来た。僕はその合図と同時に彼女に窓の錠を開ける様に言った。そして僕は窓から彼女を救い出し、そして彼女を背負いながら桜の木を降りた。精神的にはまだ子供に近かったが体はもう立派な大人だった彼女を背負って木を降りるのは大変な事だったが、そんな事は言ってもらえない。この期を逃したらもう二度とチャンスは無いのだ。僕は必死に成って木を降りた。そして何とか路上に出ることが出来た。

家の中の方ではこの野郎と言う声や悲鳴が聞こえていたが、僕等は振り向きもしないで駅の方に走り出した。素足では逃げにくいと

思って彼女の為に買っておいたスニーカーは少し大きすぎたが、無いよりはましだった。僕等は必死に成って走り出した。そして駅に着くと公彦から預かったキーでGP-Xのエンジンをかけた。

ブルンと言う唸り声をあげて勢い良くエンジンはかかる。そして僕はフルフェイスのヘルメットを彼女の頭からかぶせるとバイクのスロットルをまわした。勢い良く走り出すバイク、そして思い出は加速度的に加速する。僕等はとにかく遠くに行きたかった。いったん自分の家に帰ってからその先のことを考える事も出来たが、住所を書いた手紙を何回か送った事があったので、きっとすぐにばれてしまうのがおちだった。だから僕等は出来るだけ遠くに行くことにした。けれど実際は幼くお金の無い僕等の行き着く所なんて限られていた。結局僕等は一晩中走り続けたあげく二人が初めて出会えた場所、千葉の療養所に辿り着いた。

僕は朝早く療養所のドアを叩いた。中からは管理人が出てきてどうしたのかと聞いてきた。僕は事情を簡単に説明して吉田香奈さんと呼んで欲しいとお願いをした。それから四、五分してから香奈さんは少し眠たい目を擦って現れた。

「あれ、飯田君。どうしたの？　こんなに朝早く」

僕は簡単にいきさつを説明した。

「それで小百合ちゃんを。で、小百合ちゃんは今どこに？」

僕はバイクの横で立っている彼女を指さした。彼女は僕のジャンパーを羽織っていたものの、彼女の体は一晩中走り続けた事によって完全に冷たく成っていた。香奈さんは彼女に走り寄って体に触れて言った。

「あらこんなに冷たくなって、とにかく詳しい話は後で。さあ中に入れてよ」

それから僕等は施設の中に入り、彼女（小百合）は医務室のベッドで横になり、僕は香奈さんの元に行った。

「小百合ちゃんは寝たわ。ところで飯田君、あなたの方は大丈夫なの？　あなたも相当疲れているんでしょ、少し横になった方がいいんじゃない？」

「いえ僕は大丈夫です。それより小百合ちゃんの事が心配で」

「そうね。それでさっきちょっと聞いたけれど、一体あなたは何故彼女を連れだしたの？」

僕はその問いに正直に言うべきか迷ったが、一人だけで抱えられる問題じゃ無い事もあり、香奈さんには僕が見た全てを正直に話す事にした。

「・・・・・・・・で、だから僕は彼女を連れだしたんです」

香奈さんは僕の話聞いて驚きを隠せない様子だった。

「じゃあ、あなたの言っている事が正しければ、彼女は血の繋がった実の叔父に性的虐待を受けていたということ？」

「ええ、多分」

「ねえちょっと待って、多分って、多分じゃ困るのよ。その事が事実ならば、それは大問題を意味する事に成るのよ」

「じゃあ他に何が考えられるんですか！ 確かに僕には聞こえたんです。彼女の部屋から聞こえるイヤな音と斉藤啓太の声が。そして彼女は裸のままいたんです。それを風呂上がりだったとでも言うんですか？」

僕は必然的に思い出したく無かったあのイヤな肉と肉がぶつかり合う音、そして斉藤啓太の溜め息と声を思い出さざるおえなかった。

「分かったわ。あなたの言っている事を今は信じましょう。けれど彼女はその事を認識していたのかしら」

「認識？」

「そう、性交渉言わばSEX自体の事よ。彼女がそれを認識して性交渉していたか、その意味を知らずに言う通りにしていただけかによって、大きく変わってくるのよ」

僕はあの時の光景を思い出しながら言った。

「多分半分は分からなかったでしょう。僕が彼女のその姿を見た時に恥じらいが無かったのはそのせいだと思います。けれど半分は理解していたと思います。きっと漠然とした感覚の中でいけない事をさせられていると、だからそう言う罪悪感に似たものが彼女の潜在意識の中にあっただからこそ、声が完全に失われてしまったんだと僕は思います」

香奈さんはそれを聞いて大きな溜め息をついた。

「もしもあなたのその推測が正しければ、厄介な事になるわね。まず彼女は思春期に入ろうとしていた。言わば第二次人格形成期ね。その時期に性的虐待を受けて言語失落になったと言うことは、それは彼女は自分自身で成長を辞めた事に成るのよ。いい、率直に言うわよ。彼女はその性交渉の意味を理解したく無いと言う制御が潜在意識の中で働くのよ。そうするとそれに連鎖して全ての成長にも制御がかかるのよ。だから下手をすれば、精神遅滞どころか彼女の精神年齢は子供のまま体内時計を止めてしまうの。言わば心を閉ざした貝ね。そうなると彼女の社会復帰は難しく成るわね」

「助ける方法はあるんですか？」

「助ける方法ね。潜在意識の中の問題だから外からの治療だけでは難しいわ。勿論ないことも無いのよ。例えば催眠療法とかね。けれどどっちみち彼女にその性交渉の意味を理解させて克服するのは難しい事だし、下手をすれば精神分裂、もしくは自殺を誘因させてしまう危険性もあるからね」

香奈さんの言っている事は正しかったのかもしれない。確かにこの精神状態を維持する事すら難しいこの複雑化された社会で、彼女の場合は幾つもの大きな波を小さな体一つで受け止めて来たんだ。その中で純粋な貝に成りたいと言うのは、彼女の唯一の願望だったのかもしれない。

「じゃあ彼女は一生このままなのかもしれないと言う事なんですか？」

「ねえ飯田君良く聞いて。私達のこの世界で諦めると言うことは絶対に無いのよ。今さっき言ったのはあくまでも過去の一例からすると、と言う事を言ったまでのこと。この広い世界では彼女の様な状態で性的虐待を受けても社会復帰した例だって沢山あるのよ。だから私達が諦めたらそれで終わっちゃうのよ。可能性ある限り手は尽くすわ。ただ」

「ただ？」

「ただね、一つだけ問題点があるのよ」

香奈さんは絶望的な溜め息を付いた。

「問題点と言うのは？」

「実の叔父の事よ。彼女をすんなり療養所に戻してくれるかってこと。あれからも彼女の担当のチーフがね、月に一回は必ず彼女の家で電話を入れていたみたいなんだけど、彼女はもう大丈夫ですから一点張りだったみたいなの。だけど実際は全然違うじゃない。だから今回の事も素直に受け入れるかどうか」

「受け入れるかどうかって、性的虐待をしているんですよ。そんなところに彼女を置いておけるわけが無いじゃないですか！」

そんな僕の怒りに香奈さんはきかん坊の子供をあやすように言った。

「あのね、良く聞いてね。この事はとても難しい事なのよ。まず一つに養育権は小百合ちゃんの叔父さんにあるの。だから向こうが了解を出さなければこっちで勝手には出来ないの。勿論性的虐待の問題はあるわ。けれどそれには、それを証明する事が出来なければ成らないのよ」

「身体検査をすれば分かりますよ！」

「そうね、確かに身体検査をすれば性交渉があったかどうかは証明

出来るわね。けれどそれが叔父との間で起こった事かどうかは立証できないのよ。特に小百合ちゃんの年齢でいけば、早い子はもう異性と性交渉している場合があるからね。だからこれを立証させるにはどうしても小百合ちゃん証言が必要なの。それに一番困った事は叔父さんは社会的地位も名誉もある人よ。顧問弁護士だっているくらいの人なの。その人を訴えるって事は想像しなくても分かるでしょ。本当に辛い事だけど私達は医療に関しては専門家だけど、裁判とかそういうものには弱いよ。それは私達の力だけではどうすることも出来ないの。本当にごめんね」

僕等はその場で黙り込んでしまった。香奈さんに罪は無く、小百合ちゃんも悪くない。ただ一人の斉藤啓太と言う男がいけないのに誰もそれを裁けない。そして一人の少女だけがその傷を一生背負わなければ成らない。そしてその悪夢はまだ始まったばかりだったのだ。

その後、僕と香奈さん残された可能性を出来るだけ考えてみた。まず一つは何とか斉藤啓太を説得して施設に再入院させる事。もう一つは小百合ちゃんの他の親類に相談すること。そして最後は訴訟をおこすことだった。けれど実質そのどれも可能性の薄いものばかりだ。一つ目の可能性は電話の件からして不可能に近かった。二つ目の可能性も彼女の昔した彼女の身辺調査の結果は、彼女と血の繋がっている人間は父方の叔父以外居なく、母方の方には兄弟は無く、親（祖母）も二年前に亡くなっていた。残されるのは血の繋がっていない義理の叔父や叔母だった。そうなってくるとやはりこの可能性も少なかった。そして残される最後の訴訟だったが、この場合はどうしても彼女の心のリハビリを先に行わないといけない為に時間がかかり過ぎる欠点があった。けれど訴訟を起こしても勝てるかどうかはまた別の話になる。結局僕等は何一つ次に繋がる確かなものを見出せずに午前中を過ごした。そして午後からは小百合ちゃんも元気を取り戻したので、僕と小百合ちゃんは久しぶりに施設の近くのお花畑に行くことにした。

大きく広がった青空、そしてまだ完全では無いものの所々に咲く小さな花々。初めてここに来たのは二年近く前の僕がまだ十五で彼女はまだ十三の時だった。そして今僕は十七に成り、彼女は十五に成った。彼女の体は確実に大人の階段を登り始めていた。けれど熊のポーピーを抱きながら花を摘んで喜ぶ彼女の心は幼いままだった。僕は彼女の横にしゃがんで彼女に言った。

「ねえ、小百合ちゃん楽しい？」

彼女は僕の問いに首を縦に振る。

「じゃあ、お家に帰りたい？」

彼女は首を横に強く振った。

「じゃあ、お兄ちゃんと一緒に居たいの？」

彼女は首を縦に大きく振った。言葉すら交わせないものの彼女の気持ちは痛いほど伝わって来る。少し大きめのジーンズとトレーナーは香奈さんから借りたものだった。彼女は服を汚さない様に僕の横に並んで腰を下ろした。そして彼女は頬を僕に寄せてきた。それはまるで甘えることの不器用な子猫が甘える様なぎこちなさがあった。僕はそんな彼女をぎゅっと抱きしめて心の中で呟いた、大丈夫だから大丈夫だからと。僕の涙は頬を伝って地面に零れ落ちる。もう何も考えずにこのまま時が止まって欲しいと純粹に願った。けれど時は無情にも僕等を急き立てるものだった。

遠くから聞こえて来た香奈さんの声に気が付いた僕は彼女にちょっと行って来るからここで待ってて欲しいと言って、香奈さんの元に走っていた。香奈さんは僕の姿を見付けると慌てて言った。

「来たわよ電話」

「電話？」

「そうよ電話。小百合ちゃんの叔父からの電話」

「ここにですか？ で、叔父は何て？」

「小百合は来てないかって。一応それは何とか誤魔化したけれど、その後の台詞が凄かったのよ。あなたは小百合ちゃんを連れ出した時に何か身元が分かる様な物を落として来なかった？」

「さあ、でもそれが」

「いやね、あくまでも向こうの一方的な言い方だったんだけど。飯田と言う男が小百合を誘拐したから、もしもそちらに来たら伝えて欲しいと言ってきたの」

香奈さんはかなり慌てていたので所々聞き取りにくかったが、緊迫した雰囲気だけは確実に伝わって来た。

「それで何て伝えて欲しいと言ってきたのですか？」

「それが凄い事を言ってきたのよ。もしも仮に施設に訪れたら一日だけ待ってやるから彼女を連れて戻って来いと、それでももしも今日中に彼女が戻らない事に成ったら明日警察に連絡すると伝えてくれと言ってきたのよ。言っている意味分かる？ もしも仮に今日中に彼女が戻らなかつたらあなたは誘拐犯に成ってしまうのよ。そうなってしまうと今度はあなたまで取り返しのつかない事に成るの。だからお願いとありあえず今日は彼女を連れて帰って、これからどうするかはその後ゆっくり考えるとして」

香奈さんには全くと言って罪は無かった。むしろ僕自身の事を考えての意見だったのだろう。けれど僕には怒りしかなかった。

「香奈さん、いいですか！ 彼女はもう何処にもやりません。あんな酷いことをされたんですよ。もしも今度あの家に戻ったら最後です、もう二度と出てこれないんです」

「けれどあなたが誘拐犯に成ってしまうのよ。そうすれば警察が動き出す。そうなったらこんな狭い日本だものすぐに見つかってしまって、結局連れ戻される事になるの。あなたが警察に捕まってしまう事は彼女の今後にも大きな影響を与えてしまうのよ。勿論彼女はそんな事を望んではいないわ」

「ええ分かってます。けれど彼女はそのどちらも望んでいないのです。彼女はただ僕と一緒に居たいだけなんです。そして僕も彼女と一緒に居たいだけなんです。なんでこんな簡単な事が実現できないのですか？」

「だけど・・・」

「香奈さんには迷惑かけません。これは全て僕の問題で、僕が彼女を守ります」

香奈さんは頑固な僕に溜め息を付いた。

「ねえよく考えてね。いい、あなたがもしも仮に少年院にでも入ることに成ったら彼女をどうやって守るつもりなの？ 本当の勇気って言うモノはもっと泥臭いモノだと思うんだけど」

けれど僕の気持ちは変わらない。

「香奈さん、例えばですよ。今日の様なこの透き通る青空を見れなく成ったとしたらどうしますか？ 太陽の光も届かない暗い部屋の中で彼女は監禁させられて居たんですよ。何一つ悪いこともしていないのに。彼女は大きな幸せなんて望んではいないんです。ただ純粋に小さな幸せを願っていただけなんです。そんな彼女の苦しみに比べたら僕なんてどうなっても構わないんです」

さすがにこの言葉は香奈さんにも伝わったみたいだった。

「そう、正直言って私はその意見に賛成は出来ない。けれどただ一つだけ言えることはあなた達の人生、自分達にとって悔いの残らないものにして欲しい事は確かよ。これからの事は飯田君、あなたに任せるわ。ただ本当に困った時はすぐに連絡だけはちょうだいね。出来るだけのことはするわ」

僕は香奈さんに礼を言って別れた。もう後戻りは出来ない、何故なら全ては自分で決めた事なのだから・・・。

僕は小百合にまた出かけるから用意してと言って準備を整えた。

何とかなる、この時の僕等はただ漠然としたものだけで行き先を決めていたのかもしれない。

彼女の用意が済んだ後、僕等はまた行き先も分からないままにバイクを走らせた。僕はとりあえず街に行き、銀行の口座から貯金の全額をおろした。現金は何とか十万円位に成ったが、二人で生活するにはそれはあまりにも少なすぎる額だった。僕は翌日からの事を考えて誰にも分からない住みかを見つけなければならなかった。僕は近くのアウトドアショップから二人用のテントと簡単なバーベキューセットを買った。そして何日か分の食料を買い込んで、バイクを九十九里方面に走らせた。春先の九十九里はにぎやかな夏場とは違い逃避行する二人の住みかとしては最適な場所だった。僕等は海岸から少し離れた平らな所にテントを張り、そこを生活の拠点にする事にした。一日目はそんなこんなで過ぎていった。そして二日目を訪れた。

これからが本番だった。きっと今頃ひょっとするとテレビでは斉藤小百合さん十五歳が二月二十日未明自宅に居たところ見知らぬ少年によって誘拐されました、と言うニュースが全国に流れているのかもしれないと思った。勿論小百合はその一部始終を知らない。彼女は少しの疲労と二月下旬の寒さのせいで風邪をこじられさせているのだろうか、朝から少し咳き込んでいた。僕はそんな彼女の為に温かいスープを作り飲ませた。自給自足の生活、それはそれなりに楽しい一時であったが、それもお金が尽きるその日までの限定された生活だった。僕は職を探すことも考えたが、もしかすれば全国指名手配されている可能性だってあったので、それは危険な賭だった。とりあえず僕の考えの中では十日位は何とかなるという計算だった。その後のことは公彦にでも相談するしか無いが、公彦はあの日以来一回も連絡を取っていなかった。公彦はあの時に無事に逃げられたのだろうか心配に成ったが、今連絡を取るのには危険だった。少なくとも公彦の家にも警察の手が回っている可能性があるからだ。僕は公彦の無事を祈っているだけの事しか出来なかった。

彼女は暖かいスープを口にしてからも体調は思わしくなかった。咳は止まらず更に悪化する様に見えた。僕は彼女に暖かい格好をさせて眠るように言った。そして彼女は眠りについた。僕は彼女の純真無垢な寝顔を見てハッキリ確認することが出来た。それぞれの過去や未来はどうであれ、今現在僕は彼女を心から愛していると。きっと上手く行く、それは僕の合い言葉に成っていた。僕は彼女の寝顔を見ながらそう呟いた、そして僕もここ数日間の疲れが、いつの間にか眠りについていった。そして僕は夢を見た。それは僕に追い込

まれた恐怖と成って現れた。

・・・廃墟になった何処かの建物の一室の中に僕等は居る。部屋は暗く窓からは微かに光の筋が汚れた壁に当たっていた。部屋の中はシーツや毛布の無い組立式のパイプベットだけが無造作に置いてあり、それ以外は何もなかった。そんな中で彼女（小百合）は深い溜め息を付く。夢の中の彼女は言葉を持っていた。

「私達、もう逃げ切れないの？」

「いや、まだ完全にそう決まった訳じゃないよ」

「ねえ、もしも捕まる様な事があったらどうするの？」

「さあ、分からない」

「ねえ、お兄ちゃん。もしも捕まる事があったら死のうよ。私捕まるよりも死んだ方が幸せだよ」

「えっ、死ぬってそんな事君には出来ないよ」

「私は平気だよ。死ぬの怖くないもん。見てて、今やってみるから」

小百合はそう言いながら、何処からかナイフを取り出し手首をかつ切った。静動脈まで切れた傷跡からは血が天井まで飛び散る程に吹き出す。僕はその生暖かい返り血を全身で浴びる。そして血まみれの彼女は笑ってこう言う。

「ほらね、とっても簡単な事なんだよ」

そして僕はその悪夢から目を覚ました。

汗だくに成った僕の横に彼女はぐっすりと眠っている。時々見せる咳は施設から逃げ出した時から続くものだった。本当にこのまま逃げ切れるのだろうか。お金だっていずれは底をつくのは目に見えていた。もしも一年間逃げ延びられたのなら、僕は十八に彼女は十六に成る。そうなれば結婚だって出来るのかもしれない。僕はそんな淡い期待を胸にまだ薄暗い夜空を見上げた。

金星を始め幾つかの星が目映ったが、やがてそんな星達も朝の太陽の光の中で消えて行く。それはまるで僕等の叶わぬ微かな望みの様だった。

その日は僕は食料の買い足しに一人で近くのスーパーまで行った。僕は出来るだけ顔を下げて必要最低限の物を買いだした。僕等の事が公にされているかどうか調べるために新聞も一応買った。けれど新聞には僕等のことは一切書かれていないのを見て少しホッとした。そして僕はあの後の事が気に成り、夕方に公彦の所に電話を入れることにした。

電話越しに公彦の声がすると僕は少し安心した。

「おい飯田。あれからちゃんと逃げたのか？ 俺も何とか逃げ切ったが、あの家は異常だぞ。ライフル持ち出された時には俺はもうダメかと思ったよ」

「本当に悪かったな。俺の方も今は少し落ち着いているよ」

「そうか、それは良かった。それでお前達今何処に居るんだ」

「今は九十九里の方に来ている。これからどうするかはまだ決めていないけどな」

「そうか恋の逃避行か」

公彦は少し羨ましそうに呟いた。

「それで何か変わった事ないか？」

僕のその問いに公彦は思いだした様に言った。

「あっそうそう、今朝学校に刑事が来たぞ。学校も公にはしないから何しに来たのかよく分からないが」

やはり啓太は動き出していた。そうなると動きは慎重に成らなければ成らない。

「それよりお前達は大丈夫なのか？ お金とかそう言った物は」

「ああ今の所は何とかなるけれど、時間の問題だろう底をつくのは」

「お前の家はどうなんだ？ おじさんとか心配してんじゃないのか？」

「いや家は大丈夫だよ。多分俺が家出している事にも気付いていないだろう」

「そうだな。お前の所のおじさんあまり家に帰って来ないもんな。それより何か困った事があったら相談してくれよ。出来ることはするから」

公彦はそう言って電話を切った。公彦はこの時はまだ知らなかったんだ、僕が誘拐犯で指名手配をされていると言うことを。

小百合の調子は一向に良くならなかった。僕は念のために風邪薬を買って飲ませたが、咳は止まらなかった。やはり市販の薬では効果が弱いのかもしれなかったし、とにかくこんな安物のテントの中では効果が無いのかもしれなかった。けれど病院に連れて行くことは出来ない。僕は出来るだけ温かい格好をさせて眠らせた。夕日は絶望的に僕等を照らし続ける。もはや風景には希望の光を見いだすことは出来なかった。そんな僕にとっての最後の支えは小百合の笑顔だけだった。そしてそんな小百合の笑顔も次第に少なく成って行った。

施設から出て二日目の朝がやって来た。一晩中看病をしていた僕

は結局一睡も出来なかった。けれど彼女の様態は悪化するばかりだった。朝方にはとうとう熱が出始めた。頬を赤く染めた彼女の寝顔は幸せと苦しきの境目を彷徨っている様だった。僕は何度もタオルを水で冷やして彼女のおでこに乗せた。けれど熱は手の先で確かに感じるように上がりだしている。もはや市販の薬では効果は無かった。彼女は頻りに僕の顔を見る。その目はまるで僕に助けを求めている様だった。僕は彼女の手を握った、そして彼女も僕の手を握り返して来る。その仕草は何かに必死にしがみつこうとするかの様感じられた。その時僕には二つの考えがあった。一つはこのまま行くところまで行く方法、そしてもう一つは彼女を家に帰らすと言う事だった。僕は彼女に言った。

「ねえ、小百合ちゃん苦しくない？」

彼女は首を縦に振ってうんと頷くけれど、その力無く頷くうんには苦しきは明らかに感じられた。僕はそんな小百合ちゃんを見て一つの事を聞いてみた。

「ねえ、小百合ちゃんよく聞いてね。小百合ちゃんは今病気に成っているんだ。勿論直る病気なんだけど、ただこんな寒いテントの中では直り難いんだ。そしてこのまま酷くなると死んでしまう事だっであるかもしれない。そうなる前に家に帰るって言う事も出来るけれど、小百合ちゃんの気持ちを聞きたくて、ねえ小百合ちゃんは家に帰りたい？」

小百合ちゃんは首を横に振った。それはある意味、家に帰るよりも死を選んだ事に成る。やはり小百合ちゃんは性的虐待の意味を理解していたのかもしれない。僕はそんな小百合ちゃんの為に涙を流した。

~ 過去や未来はどうであれ、僕は君のこと愛していたよ

もう何も要らないね 君がいて僕がいる ただそれだけで良かったんだね

今思えば出会った時から僕等はもう離れられなかったのかも知れないね

この世界の果てに辿り着くその日まで・・・~

小百合ちゃんの病気は夜にはピークに達した。咳は止まらなく熱もかなり出てきた。僕は考えた末に香奈さんに相談することにした。幸いテントを張った位置から施設までバイクで飛ばせば三十分くらいで行ける距離だったので、僕は小百合ちゃんにすぐ戻ってくるからと言って施設までバイクを走らせた。施設に着くと僕は用心の為

にこっそり忍び込んで、香奈さんの部屋の窓を叩いた。

「どうしたの、こんな時間に」

香奈さんは突然の僕の訪問に驚いていたが、事情を察したのか、すぐに冷静に成った。

「何かあったのね」

「ええ、ちょっと小百合ちゃんが・・・」

僕は一部始終を簡単に説明した。

「それで彼女は？」

「ここからバイクで三十分くらいの所にいます。彼女きっとこのままじゃダメに成ってしまいますよ。何とかならないですか？」

「そうね、何とかしなきゃダメね。でもこの施設はもう警察の手が廻っているの、だからこの施設に連れて来るという事は強制的に連れ戻すと言うことになるわ」

「それはダメです。彼女は自分の意志で戻りたくないと言っているんです。戻るより死んだ方がまだましと。そんな彼女を元の家に戻すことは出来ないんです」

「けれど他に手はあるの？ 彼女は今すぐにでも医者に見せて貰わなきゃだめなんですよ」

「それはそうですけど・・・」

香奈さんの言うことは正しかったけれど、それは出来ない事だった。何故ならそれは彼女がみせた意志表示だったのだから。

「まあ、いいわ。とりあえず私を彼女の所まで連れて行って、そうね、十五分で支度するから裏の門の所で待っていて」

香奈さんはそう言って部屋の中に戻った。そして十五分後に裏の門の所に現れた。

「車で行きましょう。施設の車借りる手続き取ったから」

僕等は施設の車に乗り込んだ。そして小百合ちゃんの待つ九十九里に向かった。九十九里のテントの脇に車を止めて、香奈さんは用意してきた点滴を持って彼女の元に走った。

「凄い熱ね。もしかすると肺炎を引き起こしているかもしれないわ。とりあえず点滴を打ってみるけれど、効果があるかどうか」

そう言って彼女の腕に点滴を打った。

「とりあえずこれで様子を見る事ね。でももしも肺炎を引き起こしていたら、医者に見せない訳にはいかないわね」

「でも医者に見せると言う事は、彼女を家に連れ戻すのと変わらないんですよ」

「それはそうだけど、このままじゃ彼女死んじゃうわよ。死んだら何もかも終わりよ」

僕は黙ってしまった。けれど答えは小百合が自分自身で出した。
小百合は微かな声で言った。

「お・う・ち・・か・え・り・た・く・・な・い」と。

「聞きましたか、彼女今喋りましたよ。もしかすると心の傷を克服したんですかね？」

けれど僕の喜びとは反対に香奈さんは冷静に言った。

「今のは心の声よ」

「心の声？」

「そう、心の声。きっと余程家では嫌な思いをしていたんだわ。だから家に帰ると想像しただけで拒絶し、抵抗をしようとしてそれが声になったのよ。可哀想に・・・」

「何とか彼女を助ける方法はないですかね」

「施設では多分無理ね。昨日くらいから警察の出入りが頻繁にあって、すぐにばれてしまうわ。それである日からずっと考えていて一つだけ方法があるの。でも大きな賭けよ。それでダメだった時は本当に諦めてね」

僕は頷いた。香奈さんはそれを確認して静かに話し始めた。

「私の実家は高知で経営している小さな診療所なのよ。もしもそこまで誰にも気付かれずに辿り着けたら、しばらくはそこで生活できるわ。さすがに私の身辺は探す対処に成らないと思うから。けれどそこに行くまでが大変なのよ。新幹線、飛行機はまずダメね。すでに警察の手が回っているはずだから。その他の方法で足のつかないのは、ローカル電車に乗って行く方法しか無いの。けれどそれも100%と言う絶対的な保証は無いの、彼女を背負って行くのだから目立つ事は間違い無いわね。だから見つかってしまえばそれまでだけど、どうする？」

「どうするもこうするも、それしか無いのなら僕は何でもします。でも迷惑掛かるんじゃない」

「あのね、私は個人的にはあなた達のこと応援しているのよ。性的虐待する元に戻す事なんてしたくない気持ちは一緒よ。それに家の親も事情を説明すればきっと分かってくれるはず。だからあなた達は何も心配しなくていいの。本当は私が車か何かであなた達を送ってあげたいのだけど、今こう言う時でしょ。私が下手に動くと見つかってしまう事もあるから。とりあえず明日の朝千葉の駅まで送ってあげるから、そこからはこの住所を頼りに行ってね」

香奈さんはそう言って僕に住所を書いた紙を手渡した。僕はお礼を言ってその紙をポケットにしまった。それから僕等は少し外の風に吹かれながら話をする事にした。

テントの外はまだ肌寒い潮風が吹いていたが、微かに見えて来た希望の光に僕は喜びを感じていた。

「飯田君は本当に小百合ちゃんのこと好きなんだね」

香奈さんは突然言ったが僕はそれに対して素直に答えた。

「ええ、初めはそんな気持ちでは無かったのですが、気が付いた時にはすでに」

「でも本当に世の中は不平等なんだね。小百合ちゃんやあなたの様な人達が辛い思いをしなくてはいけないなんて」

「そうですね。でも良いことをしていればいい人に出会えるって事もありますよ。僕は香奈さんに何てお礼を言えばいいのか」

「お礼なんていいわよ。それにまだ成功した訳じゃないし、永遠に続くものじゃ無いのよ。幾ら片田舎の小さな診療所と言ってもいずれ警察の手が廻らないとは限らないし、それにいずれはどういう形にしるあなた達は社会に復帰しなくていけないの。だからその事を考えると喜んでばかりいられないわよ」

僕はそんな香奈さんの悩みを打ち消すかの様に静かに言った。

「その先の事は考えています。この件のほとぼりが冷めたら僕は彼女を連れて海外にでも行きます。そして誰の手も届かない海外で二人だけで静かに生活するつもりです」

僕は真剣にそう思っていた。とにかく誰にも邪魔されない世界で僕は小百合と一緒に暮らす。そんな些細な夢を僕は見ていた。

僕と香奈さんは色々な話をして、そして車の中で眠った。暖房の効いた空間は久しぶりに味わった心地良い空間だった。僕は後部座席で寝ている小百合の事が気に成り結局朝まで眠ることが出来なかった。香奈さんは僕等を朝早くに千葉駅まで送ってくれた。そして僕と小百合は電車で高知を目指すことにした。行き方は色々あったが、新幹線の様なものは使うと危険性があると言う事で、時間は掛かるが東海道本線を使うことにした。方法は夕べ香奈さんと一緒に考えた方法だった。

まず総武線で東京に出てから、東海道本線で姫路に行き、そして山陰本線に乗り換えてそのまま岡山まで行き、そこで瀬戸大橋線で多度津に出て、そして土讃線で高知まで行くと言う方法だった。それは気の遠く成る方法だったが、明日へ繋がる唯一確かな方法だった。僕は香奈さんにお礼を言い、そして小百合にもう少しだからがんばろうねと言って駅の構内に向かった。小百合の具合は点滴を打って少しは落ち着いたが熱は下がらなかった。香奈さんいわく肺炎を併発しているだろうと言う事だった。そうなれば時間は余り残さ

れてはいない。僕は始発の列車でまずは東京駅を目指した。

東京駅はまだ朝早かったせいもあって、人の波もまばらだった。僕は彼女を背負い顔を下げた乗換をした。とにかく東海道本線に乗れば一安心だ。そうすれば関西方面までは何とか行ける。さすがに関西までは行けば警察の手も廻っていないだろうし、何とかなる気がした。僕は小百合を背負ったまま切符を買って、そして電車に乗り込んだ。僕は一応席の周りを見渡して見たけれど怪しい人間は居なかった。僕はホッと彼女を見た。対面シートに座る彼女はとても苦しそうだった。熱はすでに四十度近くに達していて、本当ならば絶対安静にして居なければいけない状態だったが、それでも彼女は必死にがんばっていた。窓の外の景色は流れて行く、僕はそんな流れて行く景色の中に思い出を照らし合わせた。

二年前僕は紀子さんと心中を図った。けれど紀子さんは僕を置いてひとりぼっちである世に行った。そして僕は一人この世界に残された。その時は絶望を感じたが、前に歩くことで僕は新しい希望を見つけた。それが今目の前に座っている小百合だった。絶望の中で出会った少女、小百合と僕は共に歩いた。お互い心の傷をいたわり合う様に。そして今僕は彼女の心の傷をまた一つ癒そうとしていた。これが終われば全ては終わる。どんなに怖い悪夢にも終わりがある様に・・・。

気が付くと窓の向こうには富士山が写っていた。午前中の朝の光はそんな富士山を美しく照らしていた。電車は順調に進んでいる、小百合も心なしに先ほどよりも元気に見えた。僕は思った、僕等の悪夢ももう少し、そうもう少しで終わるんだと・・・。

小百合の様態が急変したのは瀬戸大橋線で多度津に向かっている時だった。姫路で山陰本線に乗り換える時には彼女の熱はすでに四十度を越えていて、途中の駅で買った駅弁にも彼女は殆ど手をつけられなかった。市販の薬を服用していたが、効果は無く咳は止まらなかった。やはり長時間の異動は僕の想像以上に彼女の体力を消耗したのだ。僕等は何とか岡山で瀬戸大橋線に乗り込む事が出来たものの、それからは彼女の意識が失われた。僕は彼女の名前を呼んだが、反応は無い。握った手の先からも熱が伝わって来た。濡れたおしぼりで彼女の頭を冷やそうとしたけれど、すぐにおしぼりは温くなる。もう少しだからがんばろうと僕は彼女を励ました。そして多度津に着く頃にはすでに駅は暗闇に包まれていた。

僕は今に成って後悔した。岡山で危険を冒してでも特急南風に乗るべきだった。そうすれば二時間ちょっとで、高知に着く計算になる。そうすれば多度津から高知まで掛かる三時間ちょっとという時間は削ることが出来た。このままでは高知まで彼女が持つかどうか分からなかった。僕はそんな彼女を背負いながら駅の構内で乗換電車を探す。見慣れない街の殺風景な景色は僕等を不安にさせた。そしてそんな僕等は異様に見えたのだから、駅員が声を掛けて来た。「お客様、大丈夫ですか？」

僕は顔を下にしたまま返事をした。

「ええ、大丈夫です」

「でもお連れの方はかなりぐったりされていますが、もしあれでしたら列車が来るまで事務室で休まれた方がいいんじゃないでしょうか？ 暖房も効いていますし」

「いえ結構です」

僕は少し焦っていた。駅員も悪気はなく、むしろ良心で言ってくれている事だったが、この時の僕には誰もが敵としか受け止める事が出来なかった。僕は駅員を無視して切符を買い、そしてプラットホームに向かった。一番線と書かれたプラットホームには人が四、五人居るだけで、とても淋しいものだった。僕は構内のベンチに彼女を寝かせ、そして自販機で冷たい飲み物を買った。

彼女に飲まそうとして買ったのだけれども、彼女は相変わらず意識が無い中で病氣と闘っていた。構内の時計は七時を指そうとしていた。時刻表に目をやると僕等の乗る電車は七時二十分に発車する予定に成っていた。やはり駅員が言っていた様に暖房の効いた事務室で待たして貰った方が良かったのかもしれない。けれど今の僕等は誰も信じられない気持ちだった。信じて裏切られることには慣れていたが、今裏切られる事は致命傷だ。今もしも裏切られたら、そう考えると誰も信じない事が一番だった。

小百合の咳は意識を失う頃から無くなっていた。その代わりに苦しそうな息づかいに変わっていた。必死に酸素を吸おうと下顎を大きく開けて、ぜいぜい言いながら酸素を取り込んでいた。僕はそんな小百合にがんばろうねと声を掛ける事くらいしか出来なかった。そして長い時間が過ぎて列車が一番線のホームに入ってきた。僕等はそれに乗り対面シートに彼女を寝かせ、正面に僕が座った。動き出した電車は単調な振動で走り続ける、車窓からは時々街の明かりが淋しそうに写った。僕は正直疲れ切っていた。この何日間はずり眠って居なかったし、今日は朝から体重四十キロ前後の小百合を背負ってここまで来たのだから無理もない。僕は最後の列車に乗

った事で少し安心したのでだろう、気が付くと列車が繰り出す単調な振動の中で眠ってしまい、そして夢を見た。夢の中の小百合は元気で言葉を持っていた。

風景は僕の知らない場所だった。少し小高い丘の上にお花畑が辺り一面を覆い尽くしていた。背後には雑木林があり、時々吹くそよ風に雑木林が揺れる。眼下には街の風景が広がり、その先には何処までも続く青い海があった。彼女は楽しそうに蝶々を追いかけながらそのお花畑を走り回る。僕はそんな彼女を見ながら幸せを感じていた。そして蝶々を追いかけていた彼女は不意に立ち止まり不安そうに周りをキョロキョロ見渡した。僕はそんな彼女に大きく手を振った。彼女は僕に気が付き僕の方に駆け寄って来た。白いワンピースに包まれ、髪をポニーテールにした彼女は清潔感があった。

「どうしたの？」

僕は駆け寄ってきた彼女に聞いた。

「あのね、蝶々を追いかけていたら、お兄ちゃんが急にいなく成っちゃったと思ったの。そしたら急に不安に成っちゃって」

僕はそんな彼女に笑って言った。

「大丈夫だよ。僕はずっとここに居たし、これからだってずっと小百合ちゃんのそばに居るから」

「ほんとう？」

彼女は覗き込むように僕の目を見た。

「ああ、本当だよ。だから小百合ちゃんは何も心配しなくていいんだよ」

「ああ良かった。私もずっとお兄ちゃんのそばに居るね。だからお兄ちゃん痛い時は言ってね、私がさずってあげるから。それから悲しい時も言ってね、私が慰めてあげるから。ねっ」

彼女は嬉しそうにそう言いながら僕に抱きついて来た。僕はそんな彼女を抱きしめる。彼女の体はまるで赤ちゃんの様なミルクの匂いがした。そして僕等は時々吹く暖かい風に身を任せた。やっと辿り着いた幸せの場所。僕は童心に戻った子供の様にその幸せを噛み締めていた。

「ねえお兄ちゃん。私をお嫁さんにして欲しいの」

小百合は突然言った。

「ああ、いいよ」

僕はそう答えた。そしたら小百合は急に真剣な顔に成って言った。

「じゃあ今ここで誓いのキスをしましょ」

僕は言われるままに小百合に口付けをした。小百合は頬を赤く染

めて言った。

「私いまでも幸せよ」

「僕も幸せだよ」

今まで幸せと言う言葉を口にすると、いつでもその幸せが消えてしまいそうになった。けれど今回は違った。この幸せは永遠に続くのではないかと言う気がした。

小百合は微笑んでいた。僕もそんな小百合を見て微笑んだ。暖かい風の中、僕等は一つだった。手と手を取り合って歩んできた愛の軌跡は、今は丘の下の方に小さく見えた。茨の道も今は懐かしい思い出の一つだった。僕等が望んだ小さな幸せ、僕はもう一度だけ手を小百合の頬に伸ばしてみた。その瞬間彼女の表情が変わった。

「でも私死んじゃうんでしょ」

「えっ」

悲しそうに僕を見つめる小百合。そんな彼女の不安に僕は驚いた。

「私、死んじゃうの？」

「何言ってるんだよ。君が死ぬ？ そんな分けないだろ。だってこんなにピンピンしてんだから」

僕は小百合に言って聞かせた。けれどそれは自分に言い聞かせている様だった。

「私本当にお兄ちゃんのお嫁さんに成りたかったの」

「本当も何も君はもう僕のお嫁さんだよ」

「ありがとう。でもいいんだ。私のお願い叶ったから」

小百合はそう言った。

「何がいいんだ。まだまだこれからじゃないか」

僕は段々不安に成ってきた。

「私死にたく無いけど、死ぬの怖いけど、でもがんばるね」

「何でだよ。何で死ぬんだよ。小百合ちゃんは死なないし、これからだよ幸せに成るのは」

だけど小百合は小さく首を振った。

「私ね、もう充分幸せだよ。幸せ過ぎたんだ。だからもうパパとママの所に行かなくちゃいけないの。でもお兄ちゃんの事は絶対に忘れないね。だって最後に小百合をお嫁さんにしてくれたから」

小百合はそう言って立ち上がり、そして歩き出した。

「ねえ、小百合ちゃん。ちょっと待ってよ。一体何処に行くんだ。お兄ちゃんの所にお嫁に来たんだろ。これからだよ。これからなんだよ。幸せに成るのは」

僕は小百合を追いかけた。けれど彼女は僕の手をすりと抜けて、少しずつ遠ざかっていく。

「ねえ、小百合ちゃん。ちょっと待ってよ。お兄ちゃんを置いてかないでよ。僕を置き去りにしないでよ」

けれど彼女は僕の気持ちとは裏腹に、どんどん、どんどん遠ざかっていき。やがて見えなくなった。そして僕は暗闇の中に一人取り残された。

僕が夢から目覚めた時には列車は丁度カーブに差し掛かっていた様で、車体は大きく揺れた。その振動で小百合の手がだらんと椅子から垂れた。僕は慌てて彼女に近寄り、彼女をさすった。けれど意識の無い彼女は無反応だった。僕は彼女の口元の手を当てた。けれど手の先には何も感じるものが無かった。僕は慌てて彼女に人工呼吸をしながら、そして大きな声で怒鳴った。

「すみません！ 誰か助けて下さい！ 彼女が大変なんです。彼女が！！」

僕のその声を聞いて周りの人が僕の元に近寄って来た。

「どうしたんですか？」

その中の一人が僕に言った。

「彼女が死にそうなんです！ 誰か医者のような方は居ないでしょうか？」

けれど僕の問いに誰も反応はしてくれなかった。そしてしばらくすると誰かが呼びに行ってくれたのだろうか、後部車両から車掌が現れた。

「どうかなさったんですか？」

「彼女が死にそうなんです。助けてくれないでしょうか？」

車掌はそれを聞いて、分かった今次の駅に連絡取って救急車の手配をしよう、と言って後部車両に消えた。僕はその間何度も人工呼吸したが反応は相変わらず無かった。

「小百合！ 行っちゃダメだ！ 頼むから僕を置いて一人で行かないでくれ！！」

僕の叫びと涙は、誰の手も届かない場所に零れ落ちる。周りの人達も何とかしてあげたい気持ちがあっても、何も出来ないといった様子で立ち尽くしていた。僕は列車が次の駅に着くまで何度も何度も小百合の名前を呼んで、人工呼吸を繰り返した。そして列車は次の駅に辿り着いた。

周りの人も手伝ってくれて。三人掛かりで小百合を駅の事務室に運んだ。そしてそれから五分くらいが経って、救急車が到着した。救急隊員が小百合を担架に乗せ人工呼吸器を顔に当てた。

「どうしてこんな状態に成ったんですか？」

隊員の一人が僕に尋ねた。

「彼女、肺炎を起こしていたんです。なのに僕が、僕が・・・」

隊員はそれ以上僕に追求はしなかった。その後の隊員の声は僕には非現実的なものに聞こえた。

「イシキハ、アリマセン」・・・「カンジャハ、ハイエンヲオコシテイタモヨウデス」・・・「コキュウナシ、ミヤクモアリマセン」・・・「タダイマ、シンゾウマッサージヲオコナッテイマスガ、イゼンミヤクモドラズ」・・・「ジュップングライデツキマスノデ、デンキシヨックノヨウイヲ」・・・

高知県内の病院に辿り着いた時には彼女は殆ど瀕死の重体だった。彼女は直ぐさま救急治療室に運ばれた。僕はその間、待合所で彼女の治療を待った。文字通りそれは祈る気持ちだった。暗い待合所、時間だけが暴力的に流れていく。窓からは中庭の風景が月明かりに照らされていた。そして僕は窓辺に彼女の姿見た。それは明らかに幻だった。

彼女は笑っている。それは不思議なくらいリアルな光景だった。僕はそんな彼女に言った。

「ごめんね、守ってやれなくて。勿論謝って済む事じゃ無いけれど。本当にごめんね」

けれど彼女は笑って答えた。

「ううん、小百合ね。お兄ちゃんと出会えて幸せだったんだよ。本当に幸せだったんだよ」

「でも俺がこんな所まで連れて来なければ、君は死なずに済んだのかもしれないんだよ」

「私ね、お兄ちゃんの手の中で死ねた事とても嬉しかったのよ。だからそんなに自分を責めないで。私お兄ちゃんから幸せ沢山貰ったから。だから私は大丈夫だよ」

「でも、それは不本意なんだろう。君はまだ若いし、それにこれからもっともっと沢山の幸せがあるんだよ」

「確かに私お兄ちゃんとずっと一緒に居たかった。パパやママにも会いたいけれど、お兄ちゃんと離ればなれには成りたくないの。でもこれはしょうがない事なの。だからお兄ちゃんは自分をそんなに責めないで」

僕と小百合はしばらく見つめ合った。暗い待合所の廊下越しの窓の向こうに彼女は居る。手術中と言う赤いランプは先ほどから点灯したままだった。そして彼女は言った。

「そろそろ行くね。本当にありがとう」

「さゆり？ さゆり……。さゆり！！！」

彼女が完全に息を引き取ったのは午後十一時十八分の事だった。その後彼女の身元が分かり、僕は地元警察に事情聴取の為に向かった。誘拐、殺人の可能性も上がったが、死因がハッキリしていたことで、殺人の線は薄くなった様だった。そして僕と彼女の遺体は、東京で処理する事に成り、僕等は東京に戻される事になった。

翌日僕は警察の取調室に居た。

「いいか、お前は不法侵入、及び誘拐事件の容疑者なんだぞ。なんか言ったらどうだ？」

佐々木刑事は言った。けれど僕は黙っていた。正確に言うと何も話せないのが本音だった。僕はまるで言葉を失った子羊だった。時計の針は午後五時を指そうとしていた。その時間は小百合ちゃんの通夜が始まる時間でもあった。それから警察の尋問は続いたが、僕は一言も言葉をする事は無かった。

～言葉なんてもう要らないよ 君と話すことが出来ないのなら
光だってもう要らないよ 君の笑顔が見れないのなら
命だってもう要らないよ 君ともう愛し合えないのなら・・・～

僕が仮釈放されたのは深夜だった。身元引き受けには兄が訪れた。「お前何処で何やってたんだ。ここ何日間、何度も警察が来たんだぞ」

僕は相変わらず言葉を失っていた。

「まあ無理に喋らなくてもいいけどな。とりあえず俺には関係無い事だから。でも弟が少年院に入るって事は勘弁してくれよ。示しがつかなくなるんだからな」

僕と兄貴はタクシーで家に向かった。

「親父は？」

僕はタクシーの中で呟いた。

「親父か？ 親父は相変わらずのんきだよ。息子がこんな事に成っているって言うのにな」

そう言って兄貴は溜め息を付いた。親父はいつでもそうだった。僕が中学校の時に初めて補導された時も親父は居なかった。そしてお袋が死んだ時も親父は居なかった。確かに仕事は忙しく、それによって僕等は何不自由無く生活出来たのかも知れない。けれど僕等

が本当に欲しかったモノはそんなモノでは無かった。

家に着くと僕は部屋に一人で居た。何本かのギターとアンプ、そして勉強机とベッド。見慣れたその部屋は、あの家を飛び出した時から何一つ変わって居なかった。僕は机の上に小百合の形見の熊のぬいぐるみポピーを飾った。小百合が死んだ実感はまだ無かった。それは手を伸ばせば今にでも届きそうな所に、小百合が居そうな気がしたからだ。僕はポピー見つめながらミニコンポの電源を入れた。スピーカーからはFMの電波に乗ってエルトン・ジョンのキャンドル・イン・ザ・ウィンド（孤独な歌手、ノーマ・ジーン）が聞こえて来た。ピアノの旋律に乗ってエルトン・ジョンの調和のとれた声が聞こえて来る。この歌はエルトン・ジョンが今は亡きノーマ・ジーン（マリリン・モンロー）に捧げる為に作った歌だった。今の僕にはそれは痛いほど心の中に響き渡る。僕も紀子さんに捧げる歌を過去に作った事があった。そして今僕はまた大切な人を失った。僕はギターを取り出して軽く弦を弾いた。ポロンと弦は悲しい音を響かせる。僕は暗闇の中、孤独と戦いながら、一曲の歌を作った。勿論それは小百合ちゃんに捧げる歌だった。

~ いつでも僕等は淋しいところにいたんだね
誰の同情も受けずに 君は笑っていたね
僕はそんな君を見て ここまで歩いて来たんだよ
小さな片隅に咲く花よ 君の笑顔僕は決して忘れない
そして今日も僕は君を思い出す
寂しさはいつでも風のように僕等の間を過ぎていったね
君は覚えているかい 僕等の愛の誓いを
小さな片隅に咲く花よ 君は一人で永遠に成ったね
だから僕は忘れない 君が輝いていていた日々を
だから僕は忘れない 君がくれた大切なモノを・・・・・・~

僕は詩の上に曲を重ね合わせてみた。そして三回位調整をしてピッタリのメロディーが出来た。歌は一番しか出来ていなかったが、それで良かった。二番はまだ先の事で、これから小百合と共に作って行くのモノだったから。

僕はポピーを相手に歌を歌い上げた。そしてポピーを眺めた。ここ数日間は本当に色々な事があったが、それを今思い出すことはしなくなかった。それは小百合を過去形にしたくない気持ちから出てきたものだった。僕はポピーに話しかけた。

「ねえ、お兄ちゃんに会いたくない？」

ぬいぐるみのポピーは何も答えない。

「お兄ちゃんは今、とっても会いたいんだよ」

けれどポピーは何も言わずにただ僕を見つめているだけだった。僕は最後にそんなポピーに向かって言った。

「今そっちに行くからね」

そして僕は机の引き出しからカッターナイフを取り出して手首に当てた。鋭い刃物から冷たい感触が手首に伝わる。初めのうちは右手が震えてなかなか定まらなかったけれど、これで終わりなんだと思ったら、落ち着いて来た。僕は十七年間の自分の人生をほんの少し思い出してみた。振り返るとそれは長い長い人生だった。

僕は1971年に東京で飯田家の次男として産声をあげた。その頃の両親は仲が良くて、父親も家庭的な父親だった。僕はそんな幸せの中で育てられた。けれど親父はある時変わった。僕が三歳の時に課長に昇進した頃から家よりも仕事を取る様に成った。そして僕が四歳の時に母親は泣いていた。それは親父の不倫が原因だった。僕はまだ小さかった事もあり、その意味が良く分からなかった。ただその頃は父親が家に帰って来ないと言うだけで、それ以外の事は良く分からなかった。そして四歳の終わり頃、母親は癌で倒れた。母親が入院している間も親父が病院に来たのは数える程度で、看病や家の家事の殆どは兄と自分でやった。僕が五歳の誕生日は一旦退院したお袋とそして兄だけで行われた。そして三ヶ月後にお袋は「また帰って来るからね。またお前の誕生日祝ってあげるからね」と言って入院したが、お袋はそのまま帰らぬ人と成った。その時の母親の死は、僕に漠然としたモノだけを残していった。それから殆ど僕は親父と口をきかなくなった。

親父もお袋が死んでからあまり家に帰って来なくなった。僕の小学校の記憶は殆ど無かった。内向的だった事もあったが、周りの友達が幼く思えて冷めた目で見ているのかもしれない。成績はいつも学年トップだったが、嬉しいと思ったことは一度も無かった。そして中学校に入学してからバンドの仲間と出会い、僕等はバンドを組んだ。

その頃は僕はとにかく何かに熱中したかった。それは何でも良かった。僕はそんなやり場の無い気持ちをストレートに詩に乗せて歌っていた。聞いてくれている人の気持ちよりも、歌いたい気持ちの方が強かった。だから僕等の歌はなかなか受け入れて貰えなかったが、一人だけ真剣に聞いていてくれた人が居た。それが紀子さんだった。彼女はいつも僕等の歌を誉めてくれた。そしてそんな紀子さ

んを僕はいつしか好きになり始めていた。僕の記憶の上ではこれが初めての恋だった。人を愛する事は僕を大きく変えた。ラブソングにも気持ちを素直に乗せる事が出来たし、言葉に重さを持たせる事も出来た。僕は紀子さんに出会えて一回り大きく成れたと言っても過言では無かった。そして僕が中学三年生の二月に紀子さんと僕は心中を図った。紀子さんとの思い出はその一夜に全てが集結していた。初めての告白に初めてのデート、そして初めてキスに初めての体験。何もかもが一夜にして起こり、そして一夜にして消えた。紀子さんが僕に残したモノは沢山あったが、その分失ったモノも沢山あった。そして僕は失われたモノを拾い集める様に千葉の療養所に入院をした。

小百合と出会ったのはそれから二ヶ月経った時だった。ある時突然目の前に舞い降りてきた小さな天使、彼女の第一印象はそうだった。僕等はお互い傷を持っていた。僕等はその傷付いた心の隙間を埋め合う様に歩いた。長くて短かったその距離は、今終わろうとしていた。僕の十七年間の歴史と共に。

僕は大きく深呼吸をした。強く押し当てた刃先からは血が滲み出してきている。簡単な事なんだ終わらせることなんて。僕はそう自分に言い聞かせゆっくりとナイフを引いた。

・・・終わりは始まりの一步・・・。僕は薄れ行く意識の中で遠い遠い夢を見た。

「紀子さん？ それに小百合ちゃん？」

僕は辺り一面花に囲まれたお花畑にいた。空はピンク色に染まっていて、大地は赤や青、そして緑や黄色の花々で埋め尽くされていた。けれど紀子さんと小百合ちゃんの所と僕の所には、大きくて深い溝があった。

「久しぶりね」

紀子さんは僕に言った。久しぶりに見る紀子さんはあの頃と何一つ変わっていなかった。

「久しぶりです」

「元気だった？」

「ええ、それより紀子さんこそ元気だったんですか？」

紀子さんは笑って言った。

「飯田君面白い事言うのね。死んだ人が病気をすると思うの？ 小百合ちゃんを見れば分かるじゃないの。小百合ちゃんだって元気にしてるのよ」

そう言われて僕は小百合を見た。小百合も最後に見た苦しそうだ時とは違って、すっかり元気な姿に戻っていた。

「お兄ちゃん」

大きく手を振る小百合は純真無垢そのものだった。溝の向こうで二人は楽しそうに僕を見つめる。僕はそんな彼女たちを近くに感じていながら、その場所に辿り着くことは出来ない。

「ねえ、僕もそっちに行きたいんだけど、どうすればそっちに行けるの？」

僕のその問いに紀子さんは答えた。

「あのね、今はまだダメなの」

「えっ」

「あのね、私達もあなたに会いたい気持ちは一緒よ。でもあなたはまだここに来るべきでは無いし、来てはいけないの」

紀子さんは悲しい目でそう言った。

「来るべきじゃ無いって、僕はもうひとりぼっちは嫌だよ。僕はみんなと一緒に居たいだけなんだよ。だからもうそんな淋しい事言わないでくれよ。だって僕はやっとここまで来たんだよ。後もう少しじゃないか。だからお願いだよ。僕もそっちに行かせてくれよ」

けれど僕の気持ちは届かない。ただ悲しく木霊するだけだった。

「お兄ちゃん私良い子にして待ってるから。その時が来るまで。だから今は生きて、私達の分まで生きて」

「小百合ちゃん・・・」

僕は間違っていたのだろうか？ それとも正しい道を歩んで来たのだろうか？ その答えは分からない。けれど僕と二人の間には手の届かない距離が確かに存在していた。僕は深く深くに沈む様に潜在意識の中に落ちていった。そして気が付くとそこは真っ白なシーツにくるまれたベッドの上だった。

退院が明日に迫った日の午前中に香奈さんが花を持って僕の病室に現れた。

「明日退院だってね。おめでとう」

「ありがとうございます」

香奈さんは何を話していいのか分からない様子で、気の利いた言葉を探していた。

「小百合ちゃんの事はどうなったんですか？」

僕は東亜総合病院に入院してから初めてその事を口にした。

「えっ、ああ小百合ちゃんね」

戸惑う香奈さんに僕は言った。

「もう大丈夫ですよ。落ち着きましたから」

それを聞いてホッとしたのか、香奈さんは椅子に腰掛けて話を始めた。

「本当に色々あって大変だったね。何をどう言えば上手く言えるかわからないけれど、とりあえず小百合ちゃんの件は、斉藤啓太の方から告訴を取り下げて来たのよ。理由はハッキリしているわ。彼女の遺体と警察の地道な調べで、性的虐待の真相が見えて来たの。それで斉藤啓太は事を大きくしない様に隠蔽策に出たって事ね」

「それで彼女の遺体は」

「八王子にある彼女の両親と同じお墓に埋葬されたわ」

「そうですか」

「もし良かったら、退院して落ち着いたら一緒に行かない？ お墓参りに」

「そうですね」

僕は少し先の事を考えなければ成らなかった。

「本当、こんな時なんて言ってあげればいいのか思い付かないなんて、チーフ失格かしらね」

「いえ、そう言うものですよ。僕だって逆の立場だったら、何て言っていていいか思い付かないですよ。それに言葉は必要ありません」

「そうね。でもあまり深く考えないでね。小百合ちゃんが死んだのはあなたのせいじゃ無いし、小百合ちゃんにとってもきっと幸せだったんだから」

「ええ、ここまで来る間に深く考えすぎていたせいで、今は何も考えられないですよ」

「まあ退院したら旅でも行きなさい。そうすれば少しは落ち着くと思うしね」

「ええそうですね」

僕等はそれからたわいもない話をした。

香奈さんが帰った後、代わりに小野医師が午後から顔を出した。

「どうかね、体の調子は？」

「ええ、何とか大丈夫です」

「そうか、まあ君の年頃には色々あるもんだよ。私も昔同じ様な体験をした事があった。勿論理由は違うかもしれないが」

小野医師はそう言って左手の袖をたくし上げた。そしてたくし上げられた左手の手首には大きな古い傷跡がハッキリと残っていた。

「でも今は違うんだ」

小野医師は眼鏡を外して言った。

「今は生きていて良かったと心から思う。勿論理由には妻や子供と出会えた事もあるが、それだけじゃ無いんだ。何故か分かるか？」

「さあ」

「人間と言う生き物、いや人間だけじゃ無い。生き物全てに当てはまるが、生まれた瞬間から死ぬ事は決まっているんだ。勿論自ら命を絶つ人間をどうのこうのと宗教じみた事は言うつもりは無い。自ら命を絶った人間でも立派な人間は沢山いるしな。ただ私が言いたいのは、人は生まれたからには何らかの意味があるような気がするんだ。死ぬことは初めからみんな決まっている。だからこそこの生きていうちに一体何が出来たかって事が大切なんだよ。何も残せないで九十まで生きる人間も居るだろうし、凄いものを残して十代で死ぬ人間も居るって事だよ。君はこの世に一体何を残せるだろうか。今死ぬのも君の人生だし、何かを残してから死ぬのも君の人生だ。勿論決めるのは私じゃ無く、君自身で決めることだけだね」

窓越しに遠くを見つめながら言う小野医師の言葉には重みを感じられた。

「ま、私の話はこんな所だ。後は君が君自身で考えなさい」

小野医師はそう言い残すと病室を出ていった。そして一人取り残された僕は小野医師の言葉を思い出す。僕は一体何を残せるだろうか？僕は過去を振り返って見た。お袋は僕に命を残してくれた。紀子さんは僕に勇気を残していった。そして小百合ちゃんは僕に愛を残していった。僕は一体何を残したのだろうか？けれどその答えはまだまだ先の様な気がした。

翌日の退院の日には珍しく親父が迎えに来てくれた。そして最後の最後に小野医師は言った

「昨日の答えは出せそうかな？」

僕はその問いに答えた。

「ええ、時間は掛かるかもしれないけれど、きっといつか出してみます」

そして僕は礼をして車に乗り込んだ。帰りの車の中で親父は僕に言った。

「父さんな、色々考えたが、会社を辞める事に決めた」

「えっ」

僕は少し驚いた。けれどそんな僕を気にも止めずに親父は話を続けた。

「母さん死んでから、父さんお前に父親らしい事全然してやれなかっただろ。だからこれからは出来るだけお前の為に成れる様な父親

に成りたいんだ」

親父のハンドルに力が入っていたのが分かった。

「でも父さんあれだけ仕事熱心だったじゃないか。それなのにそんな事出来るのか？」

「ああ、直ぐに上手く行くとは言えないが、出来るだけがんばるつもりだ。勿論今まで掛けてきた苦勞を帳消しにしてくれとは言わない。母さんにも苦勞掛けてしまったしな。けどこれからは少しずつでもいいんだ。その埋め合わせをしたいと思っている。だからこれからはもしもお前に辛いことや、嫌な事があった時は、父さんに何でも相談して欲しいんだ。父さんも出来るだけ相談に乗れるように心がけるつもりだから。分かったか？」

僕はそれに対してなんて答えればいいのか分からなかったが、それは決して嫌な気持ちでは無かった。

「ああ分かったよ」

僕はそれだけ言った。

僕は家に着くと真っ先に自分の部屋に行った。部屋はあの日以来何一つ変化は無かったが、絨毯の所々にはどす黒くなった血の後が痛々しくある。僕はそんな血痕を横目にしてベッドに寝ころんで、大きな溜め息を付いた。入院と言うの想像以上に疲れるものなのだ。机の上のポピーは相変わらず無表情で遠くを見つめていた。僕は試しにナイフを手首に当ててみたが、引く気にはなれなかった。理由はハッキリしていた。僕は何もまだこの世に残してはいないんだ。きっと僕はこれからなのかもしれない。過去の事は思い出として語られる。けれど今生きている僕は語られることは無い。僕は何かを残さなければならないのだろう。今を語られる様に。

次の日は僕は久しぶりに学校に登校した。そして昼休みに公彦が僕の所にやって来た。

「本当に色々大変だったな」

「いやそれより、公彦には色々世話になって、なんてお礼を言っていたらいいか」

「礼なんていいよ。それより俺はお前が生きていてくれた事の方が嬉しいよ」

それは同情だったのかもしれないが、公彦は本当に安心したように言ってくれた。

「ありがとうな、そう言ってくれて。ところで公彦、一つ聞いていいか？」

「なんだ？」

「あのさ、俺達ってこの世に何か残しているのかな？」

「何かを残しているって？」

公彦は不思議そうに言った。

「いやだから、何て言うのかな。もしも俺達が今死んだとするじゃん。その時俺達は何かをこの世に残せるのかなってことなんだけれど」

「どうしたんだよ、急にそんな哲学じみた事言って」

「いや、色々あったからな」

公彦は僕のそんな疑問に少し考えてからゆっくり答えた。

「そうだな。それは永遠の疑問なんじゃないのかな。もしもそれが分かったら生きている意味も無くなると思うし、それが分からないからみんな生きて行けるんじゃないかな。少なくとも俺はまだ何も残せないし、今死んだら単なる早死にしてああ可哀想と思われるだけだろうな」

「やっぱそうか。でも紀子さんは死んだけれど何かを残したのかな？」

「紀子さんは事情が事情だったから、良く分からないけれど。でも俺は一つだけ紀子さんが残したのがあると思うよ。それは俺達に勇気を与えてくれたことだ。きっと彼女は俺達に託したんじゃないのかな。自分が出来なかったモノを。だからその答えを俺達が出してあげることで、きっと彼女もこの世に何かを残す事に成ると思うよ」

「俺達にか・・・」

「そう俺達に。紀子さんもそうだと思うが、その小百合ちゃんと言う子もきっとお前に託したんだと思うよ。彼女の場合は生きたかったのに生きられなかった。勿論それはお前のせいなんかじゃない。けれどだからこそ生きられるお前は、彼女の分まで生きなきゃいけない様な気がするよ。そして答えを見付けなきゃ」

「そうだな」

「それとこれだけは言っておくが、もう俺に黙って死のうとするなよ。俺いま金無いんだからお香典代出せねしな。分かったか」

「ああ、今度そんな事がある時はちゃんと言うよ」

僕は久しぶりに笑った。それは何十年かぶりの笑いの様な気がした。そして僕は数週間後に香奈さんと一緒に、小百合ちゃんのお墓参りに行くことに成った。

小百合ちゃんの眠る八王子霊園は中央線の高尾駅からバスで十五

分位行った所にあった。八王子霊園は僕が想像していたよりも大きく、僕等は迷いながら彼女のお墓を探した。

「この五十二だからこっちね」

香奈さんは標識を見ながら言った。それから二、三回迷ったけれど僕等は何とか小百合ちゃんのお墓に着いた。

墓標には斉藤家の墓とあり、幾つか並んだ名前の最後に彼女の名前が真新しい傷跡の様にポツンと掘ってあった。

彼女の名前とそして大きく冷たそうな墓石を見ても、僕は彼女が死んでしまった事を実感出来なかった。

「私未だに実感出来ないの。小百合ちゃんが死んだなんて」

香奈さんも僕と同じ気持ちだった。僕はしゃがんで持ってきた百合の花を置いた。白い百合の花はお墓にとても良く似合っていた。

「僕も同じ気持ちです。正直言って今でもあの日の出来事は嘘なんじゃ無いかって。でもやっぱり彼女は死んだんですね」

「そうね。辛いことだけど」

香奈さんは僕と並んでしゃがみ、線香に火をつけた。

「ねえ香奈さん」

「何？」

「一つだけ聞いてもいいですか？」

「ええ」

「僕は間違っていたのですかね？ それとも正しかったのですかね？」

香奈さんは考えながら言った。

「そうね、何が正しいのかは分からないけれど、少なくとも間違っ
てはいない事だけは確かね。今回の件はあなたが決めた部分も当然
あるけれど、殆どが小百合ちゃん自信の気持ちだったと思うの。だ
からあなたは、ただ彼女が自分で決めた事を叶えてあげようと努力
したって事になるわ。勿論死にたいと思っていた訳じゃ無いわよ。
そうね、むしろ彼女は生きたと思うわ、誰よりも自分らしくね」

「自分らしくですか」

「そうよ。あの生死を分け合っている時の目は生きようとした目
だわ。ねえ飯田君、人間はねただ生きるってことは誰でも出来るの
よ。だけどね、自分らしく生きるって事はとても難しい事なの。彼
女は間違いなく自分らしく生きたのよ。死をも覚悟の上で」

僕は香奈さんの言っている事を少し考えてみた。彼女は生きた、
誰よりも自分らしく。そう思うと今の自分がとても小さく思えた。

「ねえ香奈さん。もう一つだけ聞いていいですか？」

「ええいいわよ。でも難しい事は辞めてね。私こう見えても直ぐに

考え込んじゃうタイプなのよ」

「ええ、そんなに難しく無いです。ただ香奈さんはこの世の中に何を残したいのかなって」

「何を残したいかね・・・」

香奈さんは少し悩んでいたが、何かを思いだしたかの様に言った。

「そうね。あえて言うなら子供かな」

「子供？」

「そう子供。来月結婚したら沢山の子供を作りたいなって思っているのよ」

「えっ、結婚？」

僕は突然のその言葉に驚いた。

「あれ、飯田君にまだ言ってなかったっけ」

「ええ」

「そうね、ここんところ色々急にありすぎて言い忘れてたのね。こんな時に言うのもなんだけれど、来月結婚する事に成ったのよ」

「おめでとうございます。でもびっくりしました。香奈さんが結婚するなんて」

「そんなに驚かなくてもいいじゃない。私だってもうすぐ三十よ。そろそろ結婚しなくちゃ子供を沢山産めないじゃない」

「じゃあ結婚したら療養所を辞めちゃんですか？」

「辞めないわ。それは確かに産休とかで一時的に休む事には成るかもしれないけれど、私はあそこが好きなのよ。なんて言うのかな、人の心の傷を癒す場所って言うか。私はあそこで指導しているけれど逆に教わる事も沢山あるのよ。言わばあそこは私にとって大切な場所なの。それに何かに傷付いて入院をした子が、一回りも二回りも大きくなって退院するの見てると、幸せな気持ちに成れるのよ。さっき飯田君が言ってた、何を残したいかって言うのに何となく似ているかな」

香奈さんの言葉には溢れんばかりの実感があった。

「ところで飯田君は何か残したいと思っている事でもあるの？」

「僕ですか？ 僕はこれから探すところです」

・・・初めの一步・・・僕は踏み出せたのだろうか？

あれから十年が経った。香奈さんは子供を三人生みながらも、療養所で働いている。公彦も今では二児の父親に成っていた。僕はと言えば、高校を出てから色々な土地を転々と渡り歩いていた。時にはギター片手で流しのロックンローラーに成り、時には厨房に立ち

皿洗いをしたりしていた。僕の放浪の旅の目的は色々あり、その所々で変化をするものだったが、一番の理由は自分探しの旅だった。十年前の思い出は今でも色あせないまま、僕の心の中にはあった。そしてそんな中、変わらないものは思い出だけで、世の中や周りの環境は目まぐるしく変化した。勿論僕自身も変わった。この十年間で色々な記録が自分の中で塗り替えられた。五十七時間泣き続けた時もあったし、二十二時間海辺で歌い続けた事もあった。どれも僕にとっては最長記録だった。けれど恋愛だけは不思議と無かった。別に紀子さんや小百合ちゃんの事を忘れなくなかった訳じゃ無く、結果として忘れられなかっただけの事だった。そしてそれはこの先も当分は無さそうだった。やっぱり十年間も忘れられないでいると、それが当たり前のように成る。言わば腐れ縁の様なものだった。そんな僕も年に一度だけは東京に帰る事がある。それは二月、そう紀子さんと小百合ちゃんの命日の頃だ。そしてそう言う時は必ず、公彦や香奈さんとも会った。今年の二月には香奈さんのところに三人目にして待望の女の子が生まれた。

「ねえ、やっと女の子が生まれたのよ」

香奈さんは可愛らしい赤ん坊を抱きながら言った。

「そうですか、おめでとうございます」

「ねえ、この子なんて名前だと思う？」

「まさか」

「そうよ。そのまさかよ。ねえ小百合ちゃん」と香奈さんは嬉しそうに赤ん坊の名を呼んだ。小百合と名付けられたその赤ん坊は、亡くなった小百合ちゃんと同じ純真無垢な目を持っていた。

確かに十年前に僕のそばから二つの命が消えた。けれど十年経った今、公彦の所と香奈さんの所を合わせて、五つの小さな命がこの世に誕生した。・・・生は死の始まり・・・死は生の始まり・・・

僕はこの十年間に色々な人を見てきた。一晩中酒をかくらって朝目覚めると、俺はもう生まれ変わったぞと、開き直る人間も居れば、悩むに悩んで死を選ぶ人間も居る。そして時には自分らしく生きる為に死を選ぶ人間も居た。今朝の新聞ではここ五年間は自殺者の数が急上昇していると書いてあった。勿論どれが正しいのかは分からない。きっとこの世の中には誤りや正しい概念は存在しないのだろう。全ては自分の価値観の問題であって、他人の価値観で計れるものではない。それを無理に当てはめよとするから脱落者が現れるのだ。僕等はいつだって弱い生き物だからそれでも必死に答えを求めてしまおうとする。けれど答えはいつでも闇の中にある。僕はこの十年間はその答えと言うものを探し彷徨っていた。そして十年

経った今もまだその闇の中を彷徨っている。僕は十年前の過去に問いかけてみた。

ねえ、紀子さん。ねえ、小百合ちゃん。僕はあの日あの時踏み出せたのだろうか？ 最初の第一歩を……。

ねえ、紀子さん。ねえ、小百合ちゃん。僕はこの先一体何を残せるのだろうか？ この世の中に……。

ねえ、紀子さん。ねえ、小百合ちゃん。僕は真っ直ぐ歩いて来たのだろうか？ 真実という答えに向かって……。

～ 走馬燈は今は僕の周りを風の様に過ぎていく
幾つかの季節は僕の追憶の風と成って過ぎていく
僕は時々立ち止まり振り返る事もあった
死ぬことも生きることも僕にとっては同価値なのかもしれない
黄昏た街　そして黄昏た風景は僕の心の置き場所だった
ノリコ　サユリ　僕は決して忘れない
僕の歩みだした一歩は確かにまだ
初めの一歩に過ぎないのだから……～